類

空想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

類

【Ｎコード】

Ｎ６６７５Ｆ

【作者名】

空想

【あらすじ】

自殺しようとした雪は、類に助けられ、自殺者や自殺希望者のせいで日本が滅ぼうとしているという話を聞く。そして、ひょんなことから、雪は類と暮らすことになってしまう。雪は、類と霊力者（サイキックス）達と共に、謎の暗殺者や国と戦うことになる。

EP0ーCP1　類と雪

‡―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―‡

霊力とは、己の魂を一時的に霊化した、超自然的な力のことである。

それを使う者を、霊力者（サイキック）と呼ぶ。

その種類は様々で、まったく同じものは存在しない。

使用するために必要なものは、第６感・発想力・忍耐・知識・念。

その一つでも欠けていれば、霊力に己の肉体、精神を支配され、悪霊化してしまう。

そんな、霊力者（サイキック）がいる世界―

その世界の中でも、ここ日本が霊力者（サイキック）に支配されようとしていた。

自殺者を利用して……

‡―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―†―‡

Ｅp0　類

夜の東京の街。
高層ビルに囲まれた、一回り小さなビルの屋上に、Ｙシャツに青いスカートの制服を身にまとい、いかにも中学生らしき少女、雪が立っていた。一般的に見れば、彼女は中学校３年生ぐらいにしか見えない風貌だが、実際は１７歳。学校には行かず…というより行けず、仕事もしていない。なぜ制服なのかといえば、簡単な話。お金がないからである。
幼い頃に両親を亡くし、今まで一人で生きてきたのである。
しかし、その人生が嫌になり、自殺を決意したのだ。
雪は一歩一歩、ビルの端の方へ歩き始めた。死へと徐々に近づく。

そして、ビルからゆっくりと落ちていった……

しかし、雪がゆっくり目を開けると、東京の街が広がっていた。
雪はあのビルの屋上に戻っていたのである。

「…え？」

それにびっくりした雪は、数歩後ずさると、背後に人の気配を感じた。
振り返ってを見ると、青のジャンパーに黒のジーンズ、そのポケットからアクセサリーが飛び出している男の姿があった。斜め四ヵ所だけ長い、独特の銀髪に青の混じった、ブルージルバーの髪が風に吹かれている。
その男は、気がついた雪に、だるそうな顔で、だるそうに確認する。

「気がつきいたか？」

「……」
頭が回らない。
雪は何が起こってるのかわからず、ただ男をぼーっと見た。
「おいおい。助けてやったのに礼もなしか？」
呆れた顔で言う男の言葉に、まだ状況が理解ができない。
とりあえず、自分がどうなったかを聞いてみることにした。
「私…」
尋ねようとしたとき、その男はそれを理解したように答えた。
「ビルの屋上を見たら、やけに迷いなくビルの端に歩いていくもんだから、目が悪いのかと思って、眼科を薦めようとしたところ、まさか落ちちゃうもんだから、馬鹿だなー・・・しかたねー的なのりで助けってやったわけですよっ」
その嫌味ったらしい（又は冗談混じり）発言は、普通の精神状態ならば、少々イラっとくるものがあるが、現在彼女の精神状態は正常ではないので、そんなことまったく気にしなかった。
「…どうして？」
男の嫌味ったらしい発言よりも、『助けた』という言葉に雪は俯き、怒り混じりの涙を一滴こぼした。
乙女が涙を流しているというのにこの男は、無表情どころか、さっきから表情ひとつ変えず、死んだ目で雪を見ている。恐らく、彼

女が泣いていることも、怒ってることも、この男は鈍感にも気づいてはいない。

「どうしてと言われましても困るんですが？」

「私は死にたかったの！」

雪は顔を上げ、男に叫んだ。雪のこらえていた涙がぽつぽつと地面に落ちていった。

だが、相変わらず男はまったく動揺しなかった。

雪はまた俯いた。

「もういやなのよ、こんな人生。家族も友達のいない。仕事もないし、お金もないから学校へも行けない…。借金に負われる人生なんて…もう、いや…」

俯いたまま涙をこぼし、自分の人生がどん底で、これ以上生きていったで苦しいだけ、ということを呟いた。つまり、自殺がしたいということを訴えた。

「どうせ私が死んだって誰も悲しまないし、誰も困らない…」

普通なら、親兄弟や友達が悲しむだろうなり自殺をやめさせるために、なんらかの理由を付けることができるのだが、彼女の場合そうもいかず、本当に家族もいなければ、親戚すらいないのだ。友達も一人すら（厳密には、昔はいたが事故で死んでしまった）いない。結果的に、彼女の自殺を止めるためには、強引にやめさせるという方法しかない。

だがこの男、類の「仕事」の関係上、その手の自殺動機はどうでもいいのだ。問題は自殺するという自分勝手な意思にある。そのく

せに、自分が死んでも、誰も悲しまないだの、困らないだのをほざきやがって、と思っているのである。
類は雪の襟を掴み、軽々と持ち上げた。
「おい。さっきから聞いてりゃあ、礼も言わんし、自分勝手なことばかりほざきやがって」
類は思っていたことを素直に怒鳴った。なぜかその怒鳴りは、どこか、めんどくささが感じられたが……。
その言葉に雪は、反省の色を見せるどころか、眉をつり上げて怒りの表情を示したのだ。
「本当のこと言って何が悪いのよ。あんたに私の何がわかるって言うのよ！」
さっきまで類の表情が一変し、雪を蛙を睨む蛇のように見ていたのだが、この蛙、蛇睨みにも動じないらしい。とても自ら命捨てる蛙には見えない。類はふとそう思っていた。
彼女が反論しても、さっきも言ったように、彼の「仕事」の関係でそんなことはどうでもいい。とにかく彼女の自殺を阻止することさえできればそれでいいのだ。
類は目を瞑り、呼吸を整え、また元の死んだ表情でそっと雪を下ろした。
「お前…本当に誰も困らないと思うのか？裏ではお前みたいなのせいで大変なことになってるっていうのに」
「何よ、急に・・・」
表情が少し緩んだ。実は内心、類の話に興味がわいたのだが、突

然何かを思い出したような顔をした。

「…ちょっと待って。あなた、私を助けたって言ってたけど、どうやって！？私はここから落ちた。どういう風にすればここで助けられるのよ！」

「ま、まぁ、まず話を聞け」

類はある方法で雪を助けたのだが、これは言ってはいけない……というより言っても信じないという理由なので、これには類もさすがに動揺を隠せなかった。つまり、類は空を飛んで雪を助けたのである。そんな話を信じるわけもなく、信じられても困るのだ。それでなんとか話をそらしたのである。

「いいか。この国は今滅びつつある」

「……？」

「実は世界的にそうなんだが、特に日本はダントツに危ない。その原因は…あんたみたいな『自殺希望者』や『自殺者』が多いせいだ」

類はその後も真剣な顔で話を続け、雪はその話を聞いて無駄に驚きっぱなしだった。

その内容はこうだ。

日本の自殺者は年間３万人を超え、世界的に見ても1位だ。それだけならまだいいが、その自殺者達の邪念が悪霊と化し、人間達に悪影響を及ぼしているという。次第に悪霊の持つ特殊な霊力によって心理コントロールされていき、自殺者が増えていくという話だ。さらには、悪霊に操られ、犯罪や殺人などを起こす者が増え、死霊でなくとも、他の霊の影響で生霊が悪事を働くという。そしてとう

とう日本は滅び、次第に世界も同じ道を歩むと予想される、と…。

「そんな……こと」

詳しい意味はわからなかったが、とにかく、自殺という行為で、自分だけではなく、国を滅ぼしてしまうことになることはわかった。

雪は今にも腰が落ちそうだった。

「うそよそんなの……」

「本当だ」

類がすかさず言葉を挿んだ。

雪は実際、霊だの呪いだの信じたくはなかった。特にこんな最悪なことは。だが最近ポルターガイストや自殺や殺人のニュースが相次いでいるのは事実であり、科学者までもが霊の存在を認め始めたのだ。信じがたい話だが、雪は素直にその話を受け入れた。

「お前さっき、人に迷惑かけないだの、悲しまないだの言っていたが、本当にそうか？お前が自殺して後悔し、その念がやがて悪霊と化し、人を殺し、悲しませる。ま、別に死んでも後悔しないっていうならいいけど、そんなことはまずないな。なぜなら自殺者はみな、地獄行きだ。せいぜい頑張れ」

類は得意の嫌味ったらしく言ったうえに、ふてぶてしい笑みを浮かべた。雪も少しイラっときたが、何も言えなかった。自殺というものがこんなに重いものだと思わなかった…いや、わかってはいたが自分自身、そのことを無視していたのかもしれない。

「今はそんなに目立たないが、次第にはそうなっていく。そのため

に俺達がいるんだけどな」

「……？」

「俺、『ゴーストマネージャー』だから」

「ゴーストマネージャー？」

類はさりげなく言ったつもりだったが、それは雪の耳にすんなり入ってしまったらしい。
仕方なく、そのゴーストマネージャーについての説明を最小限にまとめた。

「自殺志望者とか霊のなんかの相談とか、悪霊退治をするってところかな」

雪の頭にはハテナがついていた。霊の相談？悪霊退治？この人何者？まさか！陰陽師（おんみょうじ）？といった具合である。

「まぁ…いい。とりあえず自殺さえしなきゃな。あと…」

「……気になる。もうちょっと詳しく説明してよ」

類が帰ろうとしたとき、捨て台詞を吐こうとしていたが、ことごとく無視された。だが、そんなことより、雪の表情に驚いた。
なぜなら、さっきまで世界の終わりのような顔をしていたのに、急に『ゴーストマネージャー』のことを話すと、好奇心に満たした瞳でこちらを見つめてくるのである。類は、喜怒哀楽の激しい素直な女の子だなぁと一瞬感じた。
この「素直で表情豊かな女の子」とここに長くいれば、面倒なこ

とが起きそうな予感がしていたが、運悪く面倒な奴を感知した。
「はぁー…わかった。言うより見せた方が早いなぁ」
そう言って死んだ目を向けた先には、ビルの谷間を歩く二人の女子高生だった。
「どこ見てんの。あの子達になんかする気?」
雪は疑いの目で類を睨み付けた。しかし、類はその視線を気にせず話を続けた。
「いいかー、あの女子高生のうち、一人は時期死ぬ」
「え!」
類はダルそうな声で言い放った。どうしてそんなことわかるのよ、という顔した雪は、その顔のとおり類に言った。
「だから、さっきからゴーストマネージャーって言ってるだろ!人の話聞いてますか?誰が死にそうなぐらいだいたいわかんだよ。お前の自殺がわかったのもこのせい」
言葉からは苛立ちを感じるが、声は普通・・・というよりはだるそうな、めんどくさそうな声で言っていた。元々そういう声質なのかもしれないが・・・。
「って、後ろに男が歩いてるだろ」
女子高生の後ろ、だいたい十メートルぐらい離れたところに、帽

子、ジャンパー、ズボンと靴、全部真っ黒の服装をした、いかにも怪しい若い男が歩いていた。

「うん」

「あの男、次第にナイフを取り出し…」

類がそういうと怪しい男は腰からナイフ取り出し手に持った。

「歩く速度を速め、徐々に近づき…」

すると次は、不自然に歩く速度を速めた。

「あいつらを殺すかもな」

次の瞬間、男は走り、ナイフを振り上げ、女子高生の一人に刺しかかろうとした。

雪は突然のことで思わず類に向かって叫んだ。

「早く助け・・・ない・・・と」

しかし、雪が隣を見たときには既に類の姿はなく、女子高生達の方からは悲鳴が聞こえたと同時にその方向から微かに肉を刺すようなグロテスクな音が聞こえた。

その方にゆっくり目をやると、左手の甲でナイフの斬撃を防いでいる類の姿があった。

「っち。お前のせいで、またひとつ・・・二つも厄介者が増えたなー。どうしてくれる？」

類は痛みに耐えるようすもなく、平然としていた様子で得意の嫌味ったらしく言い放った。だが加害者の方は何も反応せず、ずっと類を見ている。まるで、人を殺すために作られた、殺人兵器のようだ。

被害者の方は、一人は腰が抜け座り込み、もう一人は慌てた表情で携帯で誰か（この状況では警察以外考えられないが）と話していた。

しばらくもしないうちに、警察のサイレンの音が近づいてきた。

「はぁー、最近は出動が早いですねぇ」

そういうと男の腹部を殴り、気絶させ、その男を抱え雪の方へ瞬間移動した。

「え？」

「行くぞ」

「ちょ、ちょっと」

突然のことで混乱している雪を抱え、ビルの反対側の方から飛び降りた。飛び降りると同時に、雪の助けを求む言葉の混じった悲鳴が街に鳴り響く。それぐらいうるさいので、耳元で叫ばれている類にとっては鼓膜が破れる勢いだったに違いない。

地面すれすれの所で、今度はふわりと浮き上がり、二人を抱えた類は夜の街を翔けた

ＥＰ０－ＣＰ１　類と雪（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP0－CP2　類と警察

「あの……」

「……」

「あのー」

もうすでにこの状況が10分は続いている。
緑を基調とした制服をまとった女子高生の一人は、なにもない部屋のど真ん中の椅子に座っている男の耳元でずっと声をかけているが、まったく反応を示さない。

「あーもうイライラするー。優奈(ゆな)は声が小さいのよ！　こんな奴に遠慮することなんてないわ。こういうときは、叩き起こせばいいのよ」

後ろで見ていたもう一人のショートヘアーの女子高生が、椅子に座り俯いている男に近づいて、頭に向かって拳を振り下ろした。が、その男は俯(うつむ)きながら10分ぶりに言葉を発したため、振り下ろした拳が途中で止まった。

「叩き起こすって、俺が寝てるとでも思ってたわけですか？」

彼が喋ったことに彼女たちは、喋らないものが喋ったように驚いた。

彼は、ゆっくり立ち上がりながら、頭のてっぺんの双葉のような髪の塊（寝癖？）を直している。

「大体、俺を叩いたりしたら、暴行の罪で逮捕されますよ～」

何回も何回も手で押さえつけて直そうとしているが、まったく効果がない。それを見ていた優奈は思わず、クスッと笑ってしまった。

「はいそこ、笑わない」

男はすかさず優奈に指を指した。

「まったく、人が話してるときに笑うって……失礼。いいか、俺が君達の話を聞いてないと思ってるのなら、大間違いもいいとこですよ。ホント」

「あんたね、それならこっちも同じ。人が話してるときに寝るってどういうことよ！」

「君、人の話聞いてる？寝てないって言ってるよね」

「じゃあああなたはどうなのよ！人の話聞いてる？」

「ちょっと実果（みか）、もうやめなよ」

優奈は実果に、喧嘩はやめて、という意味も込めて言ったが実果の耳には届かなかった。

「だから、聞いてるって。要は、変な人がナイフで変な人を刺すっていう変態劇でしょ？そんな興味深い話聞き逃すわけが……」

ここで実果が、そんな言い方してないでしょ！という風に、また喧嘩が続くところなのだが、やっと二人の喧嘩は終止符を打たれた。後ろのドアから入ってきた、茶色のコートを身にまとった、いか

にも『刑事』という格好の男の人が双葉男の後頭部を殴りつけたからである。

「何するんですか、先輩！」

「お前がまじめに働かんからだ。バカ！」

殴られた衝撃で前に倒れこんだ双葉男に近づき、片足を上げ、靴底を双葉男に向けた。

「ちょ、ちょっと冗談じゃないですか……ハハハッ」

その言い訳にも動じず、靴底をぐんぐんと腹のほうへ下ろしていく。なぜか双葉男はやけに怯(おび)えていた。

「ま、待ってください。いいんですか？二重の暴行の罪に科せられますよ？」

必死に言い訳するが、刑事はニヤリと笑みを浮かべた。

「竜……。残念だが、俺の六法全書に、お前に対する罪は存在しない」

ドーンッ

岩を粉々にするような音が部屋中に響いた。刑事が床を思いっきり踏みつけたのである。これを見た女子高生はあ然どころか、あごが外れるんではないかというぐらい口を大きく開け、目を見開いて

いる。それも当然。見事に床を粉々に砕いたのだ。
双葉男・・・・・竜は踏まれてはいなかった。踏んだのはそのすぐ横の床だった。そこから、隕石が落ちたかのように、床に地割れが広がっている。当然、竜は衝撃波のせいで泡を吹き気絶している。

「いやー、うちの部下がご迷惑をかけました」

その刑事は何事もなかったかのような顔して、女子高生二人に向かって、頭をかきながら、笑みを浮かべた。

「いえ……」

実果は、あ然以上の表情を変えずに無意識に答えた。

「さて、話はだいたい聞かせていただきました。では、あなた達を襲った犯人の容姿とあなた方を守った人の容姿を聞かせて下さい。……あ、申し遅れました。私は刑事の大地勇(おおちゆう)といいます。よろしく」

勇という刑事が礼儀正しく挨拶をする。
二人はまだ、『怪力』のことが頭から離れられなくて、耳に入ってこなかったが、優奈がとりあえず挨拶を返した。

「……あ！よ、よろしくおねがいします」

優奈は、はっとしたように力のない声で（元々そういう声なのだが……）言ったために、あまり勇のところまでは届いていなかった。そんなことを気にせずに、実果はずっとあ然以上の表情を保ち、体を押したら今にも倒れそうなぐらい固まっている。勇から見れば変

な光景なのだが、すべては自分で招いた結果である。今この部屋に入ってきた人は、見てはいけないようなものを見てしまったように、思わずドアを閉めてしまいそうな画だ。
彼女達はここ、警察署で事情聴取を受けていたのだ。何の事件かというと、さっきの類の事件である。そう、彼女たちは類が助けた被害者なのだ。

「あ、あのー彼は……？」

優奈が倒れる竜を見ながら、小さい声でさらにぼそっと言う。

「竜なら、大丈夫ですよ。いつものことですから」

あのー、の部分は聞き取れなかったが、彼は？という言葉だけで竜のことを聞いているという風に考え、苦笑いで応答した。

「さ、そこへかけてください」

「は、はい・・・・・・」

泡を吹いて気絶している竜が座っていた椅子と、そのとなりの椅子に二人（実果は優奈が無理やり引きずって）は腰をかけた。
勇が、どうぞっという身振りをしたので、優奈はさっきの質問に答えた。

「私達を襲った人は、全体的に黒い服装でした。顔は帽子で隠れていて、あまり覚えていません。私達を助けてくれた人は、藍色のジャケットに黒のジーパン、ポケットから色んなアクセが出ていました。あと髪の色が……青……白？んーなんていうんだろう……」

「シルバーブルー？」

「あ、そう言われればそうです」

やっぱりあいつか……。

「……ありがとうございました。それだけわかれば十分です」

「じゃあ私達はこれで」

竜という男のせいで、事情聴取にかなり時間がかかったけど、これでやっと帰れる、という気持ちで、ドアのほうへ実果を引きずりながら「失礼します」と言って出て行った。

勇は中途半端に閉められたドアを、しっかりと閉め、鍵まで掛けた。

床の破片に注意を払いながら、部屋の中央へと足を進める。竜のところまで来たところで、一度立ち止まり、右脇に移動した。見下した目で竜の顔を見る。

「……起きろ」

勇は、竜の脇腹を蹴る手前で床を蹴り止めた。

次の瞬間、竜は勢いよく部屋の壁に打ち付けられた。と同時に、蹴り止めた場所から、竜に向かって一直線に地割れが伸びていった。

「こ、殺す気ですか！？」

驚いたことに竜は、今の攻撃（？）で瀕死(ひんし)状態なのにも関わらず、起きたのである。瀕死状態と言っても、黒色のジャケットとデニムに切れ目が入ってるだけで、いたって目立つ外傷はないのだが、勇

の岩をも破壊する攻撃的な技を見れば、瀕死状態（又は死亡）だと確信してしまう。それぐらいの威力があるように見えた。

「殺したら面白くないだろ？」

勇は不快な笑みを浮かべた。

「ちょっとそれどういう意味ですか？」

「そのままの意味だよ。まぁ、そんなことはともかく……」

勇はさっきまで二人の女子高生が座っていた椅子に腰掛けた。

「この事件に関してなんだが、意味がわからないと思わないか？」

「え、いきなり、意味がわからないと思わないか？っと言われても困るんですけど……。そもそも、その類って奴は何者なんですか？なんで類って奴の犯行ってわかるんですか？」

「シルバーブルーの髪に、多数身に着けたアクセサリーだけでわかる」

勇は、２週間ほど前に類に会っていた。その類のことは事前に、竜に話していた。

「類って奴のことは、俺もよくわからないのだが、この１２月に突然現れ、被害者を加害者から助けてる」

「じゃあ別にいいんじゃないですか？」

竜は勇のとなりの椅子に腰を掛けながら言った。

「それだけならありがたい話だが……問題はそれと同時に、加害者も助けてるってとこだ」

「それってどういうことですか！」

竜は思わず腰を浮かべ、青い宝石のような目を見開いた。

「さっきの女子高生の話を聞いてなかったのか？助けた男は、加害者を助けている。つまりは、警察に捕まらないように逃がしたってことだ。その理由はわからんが……」

勇が初めて類とあったときも今回同様に、被害者を助け、加害者も助けたのだ。それからは、毎日のように、類と事件で会っている。

「そういえば」

竜はふと思い出したように天を仰いだ。

「さっきの女子たちの話で、加害者の男の他に、あと一人、女子を抱えてたって言ってたような……」

「本当か！」

いつの間にか二人は、椅子がすぐ後ろにあるというのに座り直そうともせず、立って話していた。

「自身はないが、言っていたと思う……います」

途中で自分が先輩に対して、敬語をおろそかにしているのに気づいたのだが、不自然に言い直してしまった。だが、勇はそんなことは気にせず、話を続けた。

「もし、今でも類のそばにその女性がいるのなら、類の居場所を生命探索（サーチ）できるはずだ」

「そ、そうですね」

内心、気づいてなくてよかったー、という安心感に包まれていた。竜はけして誰にでも敬語を使う人間ではない。使うとすれば、さっきの喧嘩のときのように、相手に不快感を与えるときだけだ。上下関係関係なく、誰にでも普通にこういった不快敬語（竜が命名した）を使っているため、誰でも怒らせる才能がある人間である。特に女性に関してその才能は、大いに発揮されるらしい。それならなぜ勇だけに、ちゃんとした敬語を使っているかというと、さっきの勇の攻撃でわかるように、彼には明らかに普通の人とは違う、『何か』を持っている。それが竜の弱みを握ってる、というより、脅されているという表現に近いかもしれない。だが彼も、それを持っているのだが……。

「よし、急いで準備しろ！」

「は～い」

やる気のない返事だった。

勇の言葉と対照的に、ゆっくりとドアに向かう竜。彼は、脅されるということを逆に、スリルとして楽しんでもいたし、例の攻撃をよけることも防ぐことも出来るので、普段はそんなことを気にしていない。だが、時と場合によって、それができないときがあるので、

そのときだけ敬語を使うように意識していた。そして今、さっきまでの、その時と場合がなくなったのである。

「なんだー？そのやる気のない声は」

普通ならまたやるとこなのだが、なぜか足が止まってしまう。

「どうしたの、先輩？やれるもんならやってみればいいじゃないですか♪」

無論、今のは不快敬語だ。

勇はその怒りを抑え、怒鳴った。

「さっさと行けぇ！」

「は～い♪」

竜はさっきのやる気のない声とは違い、うきうきとした返事だったが、勇からすれば皮肉にしか聞こえなかった。

EP0－CP2　類と警察（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP0―CP3　類と見えない何か

空中になれたようすの雪は、すぐ上の方にいる類のほうに顔を向けた。

「ちょっと、どこまでいくのよ～」

あれから、空中にふわりと飛んでから、20分近く飛んでいる。飛んでいると言っても、類が雪を抱えて飛んでいるのではなく、類と雪の間に『見えない何か』が存在し、それが浮遊源となっているのである。その見えない何かは、雪を吊り上げていて、類はそれに乗っている。なので、雪と類との間には、すっぽり見えない空間があるのである。加害者の男はというと、類の隣でまだ気絶してる。もちろん、見えない何かは、類には見えていて、雪には見えていない。

これで私を助けたのか…、と推測して、勝手に納得した。

「ねぇー、こんなところを他の人に見られても大丈夫なの？」

大丈夫なわけないのだが、皮肉としての発言だった。

雪がその心配するのは当然のことだ。高い上空を飛んでいるのでもなく、高層ビルよりも低い高度で飛んでいるため、誰かに見られてもおかしくはない。さらに、飛行時間の20分のうち、15分間は、世界一怖いジェットコースターにでも乗っているかのように叫び続けていたため、目撃範囲はかなり高いはずだ。

「こいつの潜伏能力(ハイド)で他人共にはみえねぇから安心しろ。悲鳴のほうは……」

ダルそうな声で言ったあと、途中で言葉を切った。悲鳴のほうは聞こえてしまうので、余計な心配はかけさせたくない・・・・・・などと思う類ではない。実際は変なことを言って、またこいつがうるさくなったらめんどうだ、という気持ちで言葉を切ったのだった。
みえない何かに吊り上げられている雪は「ハイド？」と小さい声で呟いた。
「お前にはまだ説明しない。まだ助かる見込みがあるからな」
今の私の声が聞こえたんだ、という気持ちが横切ったので、類の妙な言葉が頭に入ってこなかった。
少しの沈黙が続いたあと、類が下のほうを指差した。
「あそこで降りるぞ」
指の先には、滑り台だけがポツンっとあるだけの公園があった。見えない何かは、徐々に高度を落とし、公園の上に着いたところで一時停止した。
「おい！さっさと降りろ」
「言われなくても降りるわよ！」
と言った瞬間に、見えない何かは、パッっと雪を落とした。
「痛ー。ちょっと！優しく降ろしてよ」
尻餅をついた雪が怒鳴った。
「すまなかったなー。お前がそんな脆(もろ)い人間だと思わなかったんだ

よ」
　類は得意の嫌味ったらしい口調で言った。
「じゃっ、俺はこいつを処分しなくちゃならないんで。もう自殺なんて馬鹿な真似するんじゃねーぞ」
　怒っていた雪は『自殺』という言葉を聞いた瞬間、顔を下に向けたが、すぐに類の目を見た。
「……もうしないわよ！」
「ならいいけど。自殺しようとしてもわかるから、そこんとこよろしく」
　類は珍しく笑顔で言うが、その笑顔は少し、むかつくものがあった。
「あと、俺と出会ったこと、話したことはくれぐれもも内密にな」
　類は笑顔を保ったまま、人差し指を唇に当てた。
（この人も笑うんだー）
　雪は内心思った。
「そりゃ笑うだろ。愛想笑いだ、愛想笑い。それともなにか、俺が人間じゃないとでも思ってるのか？」
「え！？あんたなんで私が思ったことがわかるの？」
「……じゃあな」

しばらく黙りこんだ後、雪から目を逸らして、別れの言葉をぼそっと言い放った。

「ちょっと！」

ゆっくりと上昇し、満月のほうへ翔けていこうとしている類を見て、ある疑問が浮上し、問いかけた。

「……あなた、名前は？」

類は速度を少し落とし、後ろを振り返った。

「人に名を聞くときは、自分から名乗るもんだろー」

「……私はー、雪ィー」

少し距離があったので、山に山びこを求めるように叫んだ。

「俺は類だー。じゃあなー、ユキィー」

聞き間違えではない。雪が叫んだ言葉をわざとそのまま言ったのである。

「違う！私は雪！」

雪は目を吊り上げられたように激怒した。それにも関わらず平然の顔で「そうですか」と言って行ってしまった。

雪はしばらく満月に重なる類を見て、公園を後にした。そのとき、あることが頭に浮かんだ。

結局、ゴーストマネージャーって何……？

‡―†―†―‡

街から少し離れた、低い山のてっぺんに、少し小さめの警察署が建っていた。周りが木々で囲まれており、そこへ行くには、一箇所の長い階段から上るしかない。１００段はある。わかるように、まったく上ろうという気持ちにはならない。ただでさえ、行きがたい警察にこんな長い階段があるのでは、用事があっても行きたくないものである。

その警察署の横で、クリーム色の髪に双葉のような寝癖が特徴的な男が、地面に丸の中に三角形がある陣の中央に、チョークで星を描いている最中だった。

「竜。ホント、陣が下手だな」

確かに、竜が描いている陣は、普通に見れば落書きにしか見なかった。

「だって、先輩の陣を書いてるって思うと……ねぇー」

誰かに共感を求める口調だが、勇は当然ながら、まったく共感できない。

「ったくお前は……」

勇は怒っているのではなく、あきれていた。

勇は竜に近づき「貸せ」というと、チョークを取り上げ、三角形

の上に重ねて、逆の三角形を描いて六星に直し、中央の星を消した。
「ホント単純な陣ですね。普通のファンタジー漫画にでてきそうな」
「うるさい。お前さっさと見張ってろ」
「は～い」
竜はやる気のない声で返事をすると、陣から離れ、あたりを見ました。
「たぶん誰もいませ～ん」
勇は一つ頷（うなず）いて目を瞑ると、彼の体から、茶色い魂のようなものが一つ出てきた。
「生命探索（サーチ）！」
その魂は、地中にポチャンっと入っていった。
その瞬間、勇の『内なる目』は、この街をもうスピードで駆け抜け、公園を出ようとしている一人の女性を発見した。
「見つけた。行くぞ！」
勇は陣から飛び出し、警察署の正面を曲がり、階段を駆け下りた。
「ちょっと待ってくださーい」
竜もあわてて、勇の後を追いかけた。

‡―†―†―‡

「さて、今日はどこに泊まろうかなぁ」

雪は今日の寝床を考えていた。

彼女には家がないので、毎晩のように寝床を探していた。ホテルとか宿ではなく、他人の家にお邪魔するという大胆な方法だった。以外にもそれは結構成功するもので、大体はその方法でやり抜いてきたのだ。まぁ、たまに、どの家も受け入れてくれないときがあるが、そのときは野宿ということになる。今は夜中なので、だいたい引き受けてくれないので、今日は野宿ということはわかっているが、あるというフリをして安心感を得るための自己暗示である。

そして彼女はもう一つ、自殺のことについて考えていた。

(彼のおかげで、また人生をやり直そうと思えた。嫌味で変な奴だけど、類のおかげで命を無駄にしないですんだ。この一つしかない命を大切にして、楽しく生きていこう。)と……。

すると、前の方から二人の男が歩いてきた。一人は刑事って感じの服装をした茶髪の人。もう一人は、類ほどではないが、アクセサリーを付けていて、クリーム色の髪に、双葉寝癖が特徴だ。

二人は雪の少し手前で立ち止まった。

「あの～、少し～、お尋ねしたいことが……」

だらだらと喋る竜に、勇は頭に一発かました。

「失礼しました」

勇は苦笑して謝った。

「少しお尋ねしたいことがあるので、署までご同行して頂けますか？」

「え、は、はい」

身に覚えないことだった（実際あったのだが、忘れていた）ので戸惑ったが、ご同行を承諾した。次の瞬間、ふと背中に気配を感じたので顔を後ろに向けると、なんとそこには類がいた。

「すまないが、こいつを警察（そちら）に行かすわけにはいかねぇな」

すると突然、雪を軽々と持ち上げ、ビルの上に瞬間移動した。

「！」

驚く竜に対し、勇はすかさず腰から拳銃を取り出し、雪を抱えているのにも関わらず、類に発砲した。だが、軽々と瞬間移動で避けられてしまう。

雪が銃声一発一発に、悲鳴をあげている。

普通銃声を聞けば、周りの人間が気づくのだが、ここあたりは『通勤区』と呼ばれ、その特徴として、ただでさえ高層ビル建ち並ぶ東京でも、特に大きいものが並んでいる。しかも、今の東京は午後8時以降の会社の入社は禁止なので、この時間帯は仕事をしている人がいない。よって、銃を使っても気づかれないのである。

「先輩。どうやったらそんなに自信が持てるんですか？」

「ふんっ、俺の視力をなめるなよ」

確かに銃弾は、的確に類を捉えている。ただ、瞬間移動によってそれを避けられているだけであって、瞬間移動がなければ確実に仕留められる。

類は瞬間移動をした瞬間、右に走った。今発砲すれば、勇の腕なら確実に仕留められる。

パァーン

勇はこのチャンスを見逃さず、的確に発砲したが、はずれたのか、そのまま走り向こうのビルから落ちていった。

「逃げられちゃいましたね……クスクスッ」

笑いをこらえているが、我慢できず少し漏れている。
勇は舌打ちをした後「あとを追うぞ」と言って、類が落ちたビルのほうへ走って行った。

ＥＰ０－ＣＰ３　類と見えない何か（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP０―CP４　類と澪

雪と類はまた『見えない何か』に吊られて飛んでいた。

「いきなり何すんのよ。殺されるとこだったじゃない」

馴れたように平然とさっきのことについて文句を言う雪の言葉に、類はまったく反応を示さない。普通なら、冷やかしを言うはずなのだが。それに気づいたのか、類の顔をじっと見る。しかし、前髪で顔が隠れて表情が見えない。

「類？」

そのとき、東京の街に一滴の赤い雨が落ちた。二滴、三滴とそれは徐々に増え、所々を赤く染める。それが、雪の手の甲に付いた。

「……血！？」

見た瞬間わからなかったが、それはすぐに血だとわかった。それが類から流れていることも。

「類！血が……」

ジャケットの右脇腹から血が滲(にじ)んでいる。その真裏の部分からも血が滲んでいて、さっきの銃弾が貫通したと推定した。

すると突然、見えない何かが消え、雪と類はそのまま真っ逆さまに落ちていくと同時に、雪の悲鳴が街に響き渡った。

しばらくして突然、ピタッっと悲鳴が聞こえなくなった。類が両腕を雪の肩に乗せ、軽く抱きついたからだった。雪は恐怖を忘れ、

時間が止まったように感じた。冷たい体だったが、不思議と落ち着き、居心地が良かった。
そのまま落下していき、とうとう地面まで１００メートルというところまで来ていた。
雪は正気に返えり、目を瞑って、死ぬと覚悟した。
不思議なことに、自分の意思で死のうとすると怖くないのに、自分に意思に反して死ぬとなると恐怖感じた。

‡―†―†―‡

「先輩までですか～」
竜がいつものやる気のない声で、目を瞑って集中する勇に向かって言った。
「あと少しだ。今、奴の潜在能力（ハイド）が消えた」
「ふーん。しかし驚きました、まさかあいつも霊力者（サイキック）だったなんて。もう少し
早く言ってくれれば、こっちもそれなりの対処が出来たんですけどねー」
今は集中しているから、怒鳴ることができないが、今後は不快敬語にも気にしないでおこう。内心勇はそう思った。
「お前の力は目立つ。だからあえて言わなかったんだ。……よし、見つけた。行くぞ！」

走りだす勇に続いて、竜もその後を追った。
「しかし、あの類とかいう奴は、多種霊力者（マルチサイキック）ですか？」
走りながら竜が問いかける。
「又は、一つの霊力を応用しているという可能性もあるが……まだわからない」
走りながら勇が答える。
「でも、瞬間移動に、ハイドっていう隠れる能力、共通点があるとは思えませんけどね」
また走りながら竜が問う。
「はぁ、はぁ。だから、まだ、わからないって、言ってるだろ」
体力を消耗しているのか、息を切らしながら答える。
しばらくして、途中でとまり、息を切らして苦しそうに、手で待ての合図をした。
「どうしたんですか～♪」
楽しそうに勇を問い詰める。
「もうダウン？早いですねー」
竜の言葉がズカズカと刺さる。言い返すことができないところ見ると、相当苦しいようだ。

「お前は若いからいいが、俺はもう３０だ。お前みたいな体力はない」

言い訳らしい言い訳である。確かに勇は３０歳だが、実際より若く見える。だいたい２５歳ぐらいだ。２０歳の竜が一緒にいても同じぐらいに見える。

勇は体力がないのではなく、類たちを早く見つけるために、強力な生命探索（サーチ）を2回も使ったので、精神的にも肉体的にも、かなり体力が消耗していたのだ。それをわかって、反撃できない勇に対し、遠慮なく（沢（ま）してや喜んで）言葉を突き刺す。

「いいんですか？早くしないと逃げられちゃいますよ～。いいのかなぁ。いいのかなぁ。刑事ともあろう人が、そんなことで逃がしていいのかなぁ」

これには流石（さすが）にカチンっときた。

例の怪力で吹き飛ばそうと片足を上げたが、ふと周りを見回すと、歩行者が４、５人いたので、ゆっくりと足を下ろした。

いつの間にか、勇たちが走っている間に『通勤区』を抜けていたので、コンビニに行く人や帰宅途中の人が少数だが歩いていた。

「お前後で殺す！」

捨て台詞を吐き、早歩きで類たちのところへ向かった。竜も脅しに動じることなく、そのあとから大股で着いて行った。

‡—†—†—‡

ここは……。私、死んだの？
暗闇の中で、雪が自分に問う。
暗闇が横一直線に、ゆっくりと裂かれていく。そこから光が差し込み、その奥には、ぼんやり古いレンガの壁が見える。それは徐々にはっきりと映し出されていく。

「気がついた？」

このシチュエーションに、聞いたことのある台詞。前にも経験したことあった。だが声は、落ち着きがあって、イラッともしない。そして、優しかった。類と違って。
ゆっくりとその方へ目をやると、紫混じりの水色のセミショートヘアーの髪、女性にはめずらしい、髪には気を使わないタイプなのか、寝癖、或いは癖毛が所々跳ねている。逆三角形の黒いサングラスと、白いボレロの中の『DEATH』と書かれた文字の真ん中にある髑髏の黒Tシャツで、パッと見怖いイメージがある。だが、へそを出しているということと、見えるんじゃないかというぐらい短いミニスカートのせいで、男は興味を注がれてしまうであろう。女の私でさえ、じっと見てしまいそうだ。ところが、男性のみなさんには残念なのだが、スカートの中から膝下まで伸びた黒のスパッツでまったく見えない。

「なにジロジロ見てるの？」

何見てんのよ！という感じではなく、ジロジロ見ている私を面白がっているような言い方だった。

「いえ……。私は、いったい……」

部屋の中央のほうへ目を向けると大きなダイニングテーブルがあった。よく見ると、その上に、黒いTシャツを着た男が横になっていた。

「類！」

藍色のジャケットは、頭脇に折りたたまれて置いてあった。その中に履いていたであろうTシャツの右脇腹は血で滲んでいた。

「類は、類は……」

「死んでるわよ」

類が死んでるのかということを確認したいことを理解した女性は、あっさりと平然な顔で言い放った。

雪は驚くというより、冗談でしょ、という顔した。

「でも、生き返るから大丈夫よ」

幻聴だろうか。現在、ありえない言葉を受信した。生き返る……。どういうことだろうか。

「下がってて」

雪は無意識に後ろへ下がった。

その女性は、腰に下がった茶色のポーチからはさみを取り出し、襟に切れ目を入れ、そこから服を引き裂いた。

雪は思わず目を見開き、口を開いた。なぜなら、類の身体(からだ)を覆(おお)い尽(つ)くすように、この世の文字ではないような黒字が書かれているからである。

「これは……」
思わず口に出てしまったが、女性は丁寧に答えた。
「これは、彼の傷跡みたいなものね。傷を負うたびに私がこうやって治しているの」
そう言うと、類の口に手を近づけた。
しばらくすると、白く透明な得体の知れない球状のものが口から出てきた。口から出てきた瞬間を見た雪は、うっと吐き気がしたが、なんとか飲み込んだ。
それを傷に当てると、光を放ちながら中に入っていく。それと同時に、傷がある場所に、他の部分にあるのと同じ文字が現れた。
すると類は、何かが身体の中に入ったように、はっと息を吹き返した。
「は、はぁ〜。……よく寝た」
まるで、今まで何事もなかったように欠伸（あくび）した。
「澪（れい）、サンキューな」
澪という女性に礼を告げた後、こちらをじっと見る雪のほうを見た。
「人の体をジロジロ見るんじゃねー」
さっきの澪とは違い、本当の意味でのこっち見るな発言だった。
類はテーブルから降り、さっき雪が寝ていたベットの上に掛かっ

た赤いTシャツに素早く着替えた。再度雪のほうを見た後、ため息をついた。

「あれ、別に俺の意思でした訳じゃないから。しかたなくだから。そう深く考えるな」

もしここに、澪以外の第3者いたなら、類が照れ隠しに言っているように聞こえてしまうのだが、それが違うことがわかっている澪は、雪を見てフフッと軽く笑う。

当の雪は、顔真っ赤にして、類から目をそむける。

「な、何の話?」

「別に誤魔化（ごまか）さなくてもいいって、俺がお前に、抱きついたことを」

ますます顔が赤くなる。

「だが傑作（けっさく）だー。何が『心地いい』だよ。その気になっちゃって。ハハハッ」

類の言葉と爆笑に、その恥はやがて怒りへと変わり、類に大接近して叫んだ。

「馬鹿!キモイ!死ね!」

その街中に聞こえそうな大声の直後に、バシッという高い音が鳴り響いた。

ＥＰ０－ＣＰ４　類と澪（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾

誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。

次話もよろしくおねがいします。

EP0―CP5　類とレイノ

「心が読めるなんて、乙女の天敵みたいな能力を持ってるなんて。恥を知りなさい！恥を」

右頬(みぎほほ)が腫(は)れた類に対しての文句だった。だが類は（ビンタがこんなに痛いなんて……。なぜだ？ナイフで刺されたときより痛い気がする）などと右頬をさすりながら考えていた。

類の感覚がおかしいというのもあるが、人間は傷が深すぎると痛みを感じないらしいのだ。それと違いビンタは、表面の神経を直接叩くような感じなので、一定の痛さが続くのであろう。

「ちょっと聞いてる？」

「……聞いてるって」

類は、座っていたテーブルから立ち上がり、雪と向き合った。

「だから、心を読む、というより、思考共有(ジョイント)だ」

「ジョイント？あーもー、訳わかんない。あなたいったいなんなの？人を無理やり、連れ出したりして……まさか、新手の変態！？それに、瞬間移動したり、心を読んだり、況(ま)してや蘇(よみがえ)るなんて、とても人間的生命体ではないと思うんですけど？」

確かに、女性をいきなり抱え、ビルに瞬間移動、心読んだりしては、自分の家に連れ込むなんて、まさしく変態であると同時に、地球外生命体ということもありうる。

「それより……ど、ど」

何か言いにくいことなのか、雪は言うのをためらっている。

「どうして、抱き…」

類が雪の代わりにそう言いかけたとき、右類に今度はグーが炸裂した。

「それ、禁句。わかってるなら答えて」

右類がますます膨れ上がった類を脅すような目付きでボソッと言った。その言葉にコクっと類も頷（うなず）く。さすがに痛かったのか、類も素直だ。そんな類を見ていた澪が手を口に当て、おもしろそうに微笑む。

「お前にだき……後ろに近づかないと、そのまま落下して死ぬところだったんだ」

そう聞いた途端、雪の不機嫌な顔が少し緩（ゆる）んだ。

「あの後、俺はレイノを霊体実体（サブスタンス）して、落下の衝撃から守ってやったんだ。殴られる義理はない」

『サブスタンス』と聞いた瞬間、また訳のわからない言い訳をするんだろうと思い、呆れた表情をしたのだが、『守ってやった』という言葉を聴いたとたん、少し驚いた表情になった後、和んだ表情に変わった。

（あんな状況でも私を助けてくれたんだ。）

しかし、類は「これ以上死人が出たら、めんどうだから」という

ことを言おうとしていたのである。だが、また殴られてはたまらないので、言葉を変えたのだ。まぁ、結局は雪を守ろうとしたことに変わりはないが。
するとふと、雪にある疑問が浮上した。『レイノ』とは誰なのか。あの場所には類と私以外誰もいないはず、澪という人でもないし・・・。
最終的に考えられるのは一つになった。『見えない何か』である。
「ねぇ、その『レイノ』って……」
雪が確認をとろうと言った後に、雪の肩に何か違和感を感じた。
「お前の後ろにいる奴だけどぉ…」
類はレイノが、当然そこにいるかのような顔で、雪の後ろを指差す。雪はその指差すほうを見るが誰もいない。だが、違和感は感じる。誰かに肩を触られてるような。
「おいレイノ！いい加減、姿を見せたらどうだー」
類がそういうと、肩の違和感は強くなり、確実なものとなった。
「どーも」
突然後ろから声をかけられたので、驚きのあまり腰を抜かし、その状態で類の足元に後進した。
「だ、誰？ていうか何？」
「誰って、レイノだけど……」

雪が驚くのも当然だった。それは人間ではないどころか、人の形すらしていない物体が浮遊しているのである。澪が類を蘇生するときに出てきた、白い魂と同じ形をしていて、それに空洞の目と口が付いている。それが喋っているのである。

「そんなに驚かなくても……」

レイノが喋るとなにか違和感を感じる。

「そうだ」

類がレイノの元へ歩きながら賛同する。

「こいつが、お前を守り、助けたんだ。感謝ぐらいしてほしいものだな」

「え！」

類が雪の目の前で立ち止まった。

「お前、俺がなぜ飛べるのか、瞬間移動できるのか、知りたくないか？……いや、聞け。お前には話さないといけないことが山ほどある」

類の顔が真剣になった。

雪も好奇心で満ちた瞳で類を見る。

「まず俺についてだ。お前も気づいてると思うが、俺は普通の人間とは違う」

雪は、そんなのとっくに知ってるというような顔した。

「俺には基本、十の能力がある。それができるのは大体がレイノ（こいつ）のおかげだ。どういうことかというとだな…」

類がレイノに目で合図をすると、後ろからレイノが雪に近づいていく。何をする気？と思いながら、後ずさりする雪に躊躇（ちゅうちょ）することなく、徐々に距離を縮める。

「ちょ、ちょっと」

手で抵抗しようとするが、透き通ってしまい、効果がない。
次第に雪の身体（からだ）に入っていく。

「ちょ、ちょっとあの子、今…私の身体（からだ）に入ったんですけど」

雪は自分の身体を指差して目を丸くする。

「これが思考共有（ジョイント）だ」

「ジョイント…さっきの心を読むやつ？」

「まぁ、そうなんだが、正式には思考を共有する能力だ」

「思考を共有？」

「つまり、お前の脳を俺とお前とで共有する。お前が今、お腹すいた〜って考えていることがわかるし、俺がお前の脳に信号を送れば、お前はそれがわかる。言わば一方的なテレパシーと思ってくれれば

いい」
雪がお腹すいた～というのは例えではなく、事実だった。さらに、「我慢しろ」という信号が送られてきたので、驚いたというよりイライラしている雪だった。
「それはすべて、レイノが送受信機の役割を果たしているから出来ることだ。そのほかに、潜在能力（ハイド）や空中浮遊（フロート）というのもあるが、今日はもう遅い。それにもっと大事な話がある」
類がそう言っている間にレイノが雪の身体から出てきた。そして、さっきの雪の発言が気になるのか、しょんぼりしながら消えていった。
すると、いきなり類が信じられない言葉を発した。
「お前には、謝らないといけない」
今の発言に雪は今までで一番驚いた。類の口から『謝る』という言葉を聞くとは夢にも思ってなかったのである。そう長い付き合いではないが、だいたいこの男のことはわかる。ほとんどがマイナスイメージのため、謝るという言葉を言うイメージではなかったのだ。くどいようだが、この男が謝るなんて考えられない、というより似合わない。だが、奥のほうで類たちのやりとりをずっと見ている澪は、まったく動じていない。この男から、謝るという言葉が出るのは、それほどめずらしくないのだろうか…。
「お前は今日から、俺達と共に生活してもらう。っていっても、お前に元々生活なんてないから、俺達と暮らしてもあんま変わらんか…。やっぱさっき謝ったの訂正」

今の発言はイラッどころではない。今すぐ顔面を殴りたい雪としては「これは確かに謝るのが当然なのに、それを訂正し、さらにあいつと暮らすという、絶望的内容を吐きつけてくるなんて信じられない。しかも、私の生活をなんだと…」と長々と文句を言いたいのだが、衝撃的な内容に動揺して、うまく言葉が出ない。

「というわけで、お前のベットはあっち」

類はさっき雪が寝ていたベットを指差した。

「じょ、冗談じゃないわ！なんで私があんたと生活しないといけないの！」

内心、もうわざわざ寝床を探す必要がなくなる、という嬉しい気持ちなのだが、それは類の存在によって、消されていく。

「要はだな、俺といなきゃ、お前は死ぬからだ」

今度は違う衝撃な発言だったたが、今日はもう衝撃発言を聞きすぎて、何を聞いても驚かないようすだった。

「はぁ〜。今度は何…」

雪はため息をつき、もうどうでもいいや〜、という気持ちに切り替わった。

それに今日は、興奮しすぎたということもあって、いつの間にか疲れきっていた。

「さっきお前に警察が話かけてきただろ？」

「ええ」
疲れた声で応答する。
「実はこの警察という奴らある意味での敵でな、正義の暗殺者っていう組織が動いてるらしくて、俺と関わった人間を殺そうとするんだな、これが。あと、霊力者達も」
もう疲労で話についていけてない。頷くものしんどそうだ。
「最初は、あの程度ではわからないと思ってたんだが、やっぱり、バレたみたいだ。だからお前を見殺しにするわけにはいかない。よって強制的にこっちで生活してもらう。俺が奴らを潰すまで。ただ……」
雪は『ただ……』という言葉に、頑張って反応を示した。
「ただ……？」
「ただ、無料でここにいてもらっても困るので、仕事をしてもらいます♪」
類は珍しく声のトーンを上げ、『仕事』という言葉を強調して言った。
雪はある意味、一時的に疲れが吹っ飛んだ。
「は、働く……そんなのって」
（いえ。これはいいほうに考えれば、お金がもらえるということ？）

確認のために聞いてみた。

「……そのー、お金のほうは？」

「3分の1でよければくれてやる」

「そ、そんなにー！？」

雪の目の色が明らかに違う。ギラギラと輝いている。

彼女には家族がいない。よって収入源もないうえに、仕事も雇(やと)ってくれない。雇ってくれると言えば、夜の仕事ぐらいなもので、当然彼女はそんな仕事は一切お断りだった。まず、彼女は17歳なので、その手の仕事はやりたくてもできないのである。やっていたら、違う場面で類と合っていたかもしれない。

なら、今までどうやって食べてきたのかと言えば、またしても、他人の食事をご馳走になるという大胆な方法だったのである。さらに、その家でお風呂や洗濯までしてしまっていたので、制服や体に汚れ一つなかったのである。だが、その図々しいさには、目に余るものがあるが、生きていくためには仕方がないことなのである。

だから、彼女にとってお金とは、一円でも惜しい存在なのだ。。

そして、この先知ることになるが、その貰えるお金が、とんでもなくわずかということを彼女は知らなかった。

「金の話はともかくだ。その仕事内容は……」

そのとき、言葉が途切れた。レイノが類の目の前に急に現れ、類の身体に入っていったからだ。

レイノが入ったと同時に、類の緩やか表情が一変し、険しくなった。

すると、部屋の隅のほうから「類」と澪が無表情で呼びかけた。

「ああ、わかってる」

そう言って笑みを浮かべた。その笑みはどこか不気味で、恐怖さえ感じた。

「えっ！えっ？」

雪には何が起こってるのかまったくわからない。完全に一人だけ除け者にされた気分だ。

類は澪の方へ駆け出すと、澪は部屋の隅に消えていった、ように見えた。実際には、その部屋の隅には上へと繋がる階段があるのだが、雪の角度から見ると、ないように見えるため、消えたように見えたのだ。

その階段に類も駆け上っていき、「待ってよー」と言いながら、その後についていく。

雪が上のほうへ出るとそこは、下の部屋の暗い雰囲気とは違い、何処にでもあるようなアパートの一部屋があった。類たちはその部屋を早々と通り過ぎ、上がってきた階段から見て反対側のドアから出て行ってしまった。雪は仕方なくこの部屋を後にし、ドアの方へ駆け出し、ノブを回してドアを押し開けた。が、突然、雪は何かに頭をぶつけ、ゴンっと鈍い音が鳴る。雪がぶつけたのは壁だった。なんとドアから1メートルも満たない先に壁が立ちはだかっているのである。

この家のドアは、路地にあったため、そうなってしまったということだ。

その路地を抜けると、類と澪、あの時の警察二人が睨み合っていた。

ＥＰ０—ＣＰ５　類とレイノ（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾—＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP0ーCP6　類と霊力者達（サイキックス）

実際睨んでいたのは警察だけで、類と澪は、平然と笑みを浮かべている。

「お二人さん。お久しぶりね」

「……」

澪が冷静な顔で二人に挨拶をした。その挨拶に、類は一瞬澪をチラッと見た。

「お前、この二人と知り合いか？」

「ちょっとね」

二人とも冷静に表情を変えずに、坦々と喋る。

「なぜ…なぜ、あなたがこんな奴のところに？」

澪の姿に驚いた勇が問い質（ただ）す。

「おいおい。こんな奴って言い方はねぇーんじゃねーの」

類の見下した態度と言葉に、勇は一瞬顔を顰（しか）めた。

「俺が何した？俺は人を助けてるだけだ」

「あんたがやってることは、公務執行妨害及び、従犯の罪により、

死刑だ」
竜が途中で言葉を挟んだ。
死刑というのは言いすぎだと思うが、類が犯した罪については正しかった。
「お前は全世界各地で指名手配されている。場合によって死刑ということもありうる」
だが、勇はそれをわかって死刑という言葉で脅した、つもりだったが、類には通じないようだ。
「たったこれだけで死刑ですか…。この日本…いや、世界はやっぱり腐ってるな」
顰めた顔で勇を睨みつけ言い放つ。
「あんたらも、なぜ霊力者（サイキック）なのに警察（そっち）の味方をする？」
突然、竜の右腕が火花を散らし始めた。
「先輩。こいつ、殺してもいいっすか？」
無表情…というより冷酷な目で類をじっと見ている。彼の目には、類が焼き殺されている映像が映っているのであろう。時々不気味な笑みを浮かべる。
「いや、まだ話が…」
勇の言うことを無視し、類に向かって突進する。そのスピードは

その右手が類の顔面に襲いかかる。
かなり速いものだった。その瞬間、一瞬にして右手が燃え上がる。

「落ち着け」

類が表情一つ変えずにボソッと言った。
竜は一瞬、信じられないというような顔で自分の右手を見た。
類の目の前で燃え盛る右手を、顔面ギリギリで、しかも素手で掴まれているのである。
竜は悔しい表情で舌打ちした後、右手を掴まれてる状態で、左足を類の首目掛けて振り上げた。
その攻撃は空振りだった。なぜなら類が、瞬間移動で目の前のアパートの屋上に移動したからだ。
そこから、ふてぶてしい笑みを浮かべている。

「やるってんなら、相手になってやってもいいぞ！」

アパートの上から聞こえる、類の挑発的なセリフに、竜はますます腹立てると思われたが、それとは逆に、類と同じ笑みを浮かべた。
そして今度は、両手を炎で包んだ。

「霊力（バースト）放出！」

類に向かって両手を勢いよく突き出した途端、両手に燃え盛っていた炎が類のほうへ放たれた。人魂を思わせる真っ赤な炎は一直線に類目掛けて飛ぶ。

「レイノ」

類が呼ぶと、背中からレイノがニョロッと出てきて、すかさず類

の右腕に入った。
類の筋肉質な左腕は拳を中心に銀白のオーラが纏(まと)っている。
類はその拳を勢いよく火の玉のほうへ突き出すと、火の玉はまるで蝋燭(ろうそく)の火のようにフッと消えてしまった。

「後ろ！？」

突然背後に気配を感じた類は、今度は炎に包まれた左手を同じ手で防いだ。

‡―†―†―‡

「さて、あっちもやりあってるみたいだし、こっちも戦う？」
類たちのいる屋上を見ながら澪が戦闘を誘う。
それに勇は、竜の火の拳を見て、あ然の表情で固まっている雪を見て返答した。
「生憎(あいにく)、俺は、一般人の前で無闇に霊力を使いたくないし、それ以前に、あなたと戦う気もない」
「残念ね。久しぶりにあなたと殺(や)りあえると思って期待してたのに…」
それは「あなたを殺せなくて残念」と言う風にも聞こえるほど殺気を感じる言葉だったが、声は冷静そのものだった。
「さっきあなた、『私がなぜここにいる』と聞いたわね」

勇がうなずく隙もなく言葉を続けた。

「逆に聞きたいわ。あなたがまだ警察にいるのか」

後ろで聞いている雪にはもちろん、勇にも意味がわからなかった。

「何の話だ」

「あら、まだわかってないの？それとも、まだ教えられてないの？」

澪はそう問い詰めると勇のほうへ、コツコツッと茶色のブーツの音を鳴らしながら前進する。

「竜は、類が『なぜ霊力者（サイキック）なのに警察（そっち）の味方をする？』と言ったとき、彼は目の色を変えて、類に殺意を向けた…。ということは彼は知っている。……もしかしたら、自分が霊力者とばれて、開き直ったかも知れないけど。とりあえず警告しておくわ。」

勇の目の前で立ち止まった後、サングラスをはずして警告の言葉を発した。

「あなたがこのまま何も知らないと、二人とも警察に殺されるわよ」

澪の黒く鋭い眼光に思わず、一瞬目を逸らしてしまった。

彼女が警告していることは、正義（キラー）の暗殺者のことである。

類が説明していたが、キラーとは、類と関わった人間というよりは、霊力者（サイキックス）達と関わったすべての人間を殺すという警察の裏組織であり、実際の目的は類ではなく、霊力者（サイキックス）達である。

勇の怪力や、竜の手の発火も、彼らが霊力者（サイキック）だからできることで

あり、彼らも警察だからと言って例外ではない。霊力者（サイキック）ということがわかれば、クビ程度ではない。即死刑である。
勇はしばらく考え込むように下を向き、動かなかった。

‡—†—†—‡

（いったいどうやって上がってきた…）
そう思った類が竜の後ろのほうを見ると、1メートルにも満たない隙間があった。
（なるほど、カベキックか…）
路地の狭さを利用して、上がってきたとわかった。
「あんたの霊力…いったいどうなってる？」
「つまり、俺の魂が何か？って聞いてるわけか？」
ぐいぐいと左手を押し付けながら聞かれた類は、こっちもそれに負けずと、ぐいぐいと押し返しながら聞き返した。
「あんたの行動や、先輩に聞いたところによると、あんた多数の霊力を使う。その数は多種霊力者（マルチサイキック）どころではない」
「そのことか…。その質問に答えるのは簡単なことだ。…俺の霊力が霊そのものだからだ」

　そもそも霊力とは、己の魂を一時的に霊化させたものを霊力という。霊力が霊そのものというのは、当たり前のように聞こえるが、それはつまり、魂自体が元々幽霊だということになる。簡単に言えば、類はある意味人間ではないのである。
　目の前にいる奴が、人間ではないとわかれば、誰だって動揺し、身を退くだろう。竜もその一般的な行動をとったが、その隙に類が掌（てのひら）を完全に開いた左手を竜に翳（かざ）した。
「霊力放出（バースト）」
　類の左腕の銀白のオーラが竜に放たれた。
　避けたいのは山々だが、飛び退いてしまったため、空中では身動きが取れない。
　そして、そのオーラは見事にヒットしたのだが、竜になんら変わりはない。竜も不発に終わったのかと思うが、その異変に気づくのにそう時間は掛からなかった。
　竜が両手を発火させようとするが発火しない。歩こうとしても動けない。
　首から下がまったく動かなくなっていたのだ。
「身体が……」
「思考共有（ジョイント）を応用した、金縛りはどうだ？」
　類は腕を組み、自慢気に言う。
　霊は人間の身体に入って、ある程度の暗示をかけて金縛りを行う。そして、だいたいの運動神経を霊力によって遮断（しゃだん）するという霊の力を自分の力に応用したのだ。
「じゃあな」

手で身振りをすると、屋上から飛び降り、澪の隣に猫のようにピタッと着地した。

「行くぞ澪」

「ええ」

硬直する雪を抱え、さっきの出入りしにくいドアのほうへ向かった。

勇は逃げ出す二人にハッとなり「待て」と呼び止めるが、聞くはずもなく部屋に入っていった。

急いで駆けつけ、ドアを開けると勇は目を丸くした。そこには何もない空き家があるだけで、誰もいなかったのである。

‡―†―†―‡

類たちは、ちゃんとさっきの部屋に戻ってきていた。

まだ完全に硬直が解けていない雪が心配そうに聞いた。

「ねぇ、あの人達、ここに入ってこない？大丈夫？」

「心配するな。ここは特殊な祓(はら)いがある。奴らは入ってこれない」

「祓い」という言葉を無視して、雪は少しほっとした。竜の燃えている手と冷酷な目を見たせいで、少し恐怖感を覚えてしまっていたのだ。

少し落ち着いた雪が疑問に思い問う。

「じゃあ、どうしてわざわざ外に？」

「警告するためだ」

類がいつものように、だるそうに答える。雪はその答えにあまり満足していなかったが、類も疲れていたようだし、何より自分が疲れていたので、次の機会に詳しく聞こう、と思っていた。

「類、勇たちは…」

澪がサングラスを掛け直し、普段の冷静な声で言う。

「いずれわかることだ。それに、あいつら簡単に死ぬような奴らじゃないし、今はほっといてやればいい」

類はドアから見て左の壁にあるソファに寝転がり、目を瞑った。しばらくもたたないうちに、微かにいびきが聞こえる。あまりの早寝に雪は呆れてしまった。

「疲れたでしょう、コーヒーでも飲む？」

玄関のすぐ隣にある台所に向かう澪に、優しく聞かれた雪は「は、はい」と慌てて返事をした。

今日は本当に不思議なというより、疲れた一日という印象のほうが強かった。何より、類と一緒にいたことがイライラしたり怒鳴ったりと、疲れる原因だった。だが本音を言えば楽しかった。こんな気持ちは久しぶりだった。雪はふと死んでしまった昔の友達のことを思い出した。今思えば、結構似ているかもと思ったが、あとから、友達(あいつ)のほうが優しいと思い直した。

あいつが助けなかったら、今私はいない。こんな気持ちになることもなかった。類のおかげで、生きる楽しさを思い出した。雪はも

う自殺しないと決意した。
雪は類の方を見た。手の平に火傷の後が残っている。そして、澪がコーヒーをもってくるまでの間、しばらく類の寝顔を眺めていた。

ありがとう…類

ＥＰ０－ＣＰ６　類と霊力者達（サイキックス）（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
ＥＰ０完結です。
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次章もよろしくおねがいします。

EP1－CP7　正義の暗殺者（キラー）（1）

Ep1　霊力

現在の時刻、４時４０分ぐらい。午後ではなく、午前４時。
空はほんのり明るい。あと数十分で朝日が昇りそうな雰囲気だ。
あれから、何時間たっただろうか。
実はあの時間でだいたい１０時半、ということは約６時間も経っている。

「もうこんな時間！親に殺される～」

身に着けている腕時計を見た実果が現在の時刻に驚く。
木々に囲まれた歩道を、絶望的な顔で歩く実果に、優奈は慰めの言葉を掛けていた。
なぜこの二人は、まだ家に帰っていないかというと、竜のせいで事情聴取に時間が掛かったということもあるが、まず警察署に行くのに車で送ってもらったのに、３０分掛かるのである。つまり、警察でだいたい1時間を消費し、実果の硬直状態が解けるまで数十分。帰るときも、車で３０分掛かるのだから当然、徒歩では倍以上掛かるのである。それでも、大体2時間半（午前1時）で帰れるはずなのだが、警察署が自宅とはまったく別方向なので、道がわからず、2時間程度迷ったあげく、やっと知っている道にたどり着いたと思ったら、警察から1キロも満たない場所ということが判明し、自分たちが警察の周りを2時間近くグルグルぐるぐる回っていたというバカさ加減に落ち込みながら、ここまでたどり着いたというわけなのである。

「足が痛ーい。あたし、運動している間に筋肉痛って始めて何だけど」

４時間ぐらい歩きっぱなしなのだからということもあるが、二人ともバスケ部に所属しているので、今日…正確に言えば昨日は、部活帰りだったのだ。なので、運動中に筋肉痛という珍しい体験ができたのである。

「あたしは親という大人が待ってるけど、優奈は大丈夫？弟さん」

「大丈夫よ。もう中学生だし、それに……」

「そうだね」

優奈が何かを言いかけたが、それを理解したように実果は納得した。

すると突然、優奈がピタッと足を止めた。

「どうした？」

「…誰かいる」

その言葉に実果は顔色を変えた。

当然街なので誰かいて普通なのだが、別の言い方をすれば『殺気を感じる』というほうがわかりやすい。

「…普通に歩いて」

優奈が唯（ただ）でさえ小さい声で囁（ささや）く。

二人は相手に出来るだけ悟られないように歩いた。

後ろの木の上に隠れている『誰か』は、持っている半透明の銃の引き金をゆっくりと引いた。

それと同時に優奈が合図をすると、二人はしゃがみ、銃弾から逃れた。

「下！」

さらに、実果はしゃがんだと同時に、相手の方向へ掌を向けた。その後ろに優奈が隠れる。

ポーン

聞きなれない銃声が何発も放たれる。だがそれは、実果の掌寸前で止まる。

相手は舌打ちをして、その木から降り、その姿を現した。

竜の髪型に双葉を除いたような黒い髪型に、黒い科学ゴーグル、黒のパーカーに黒のジーンズ。おまけに手袋に靴まで黒い。まさに真っ黒男である。だが、真っ黒男の右手に半透明の拳銃だけ浮いている。それに、服についた返り血も…。

「頼むからとっとと死んでくんないかな?俺忙しいだ」

ダルそうに言うが、本当に心から死んでくれと感じる言葉だった。

「あんたなんかに殺されえてたまるもんですか！」

実果はそういうと、手首をくっつけて、その状態で地面に掌を勢いよく叩いた。

その瞬間、その手から真っ黒男に向かって、地面が割れていく。

「なっ」

彼女の攻撃に驚くあまり、真っ二つに分かれた地面の穴に落ちてしまった。

「早く逃げるよ！」

「うん」

二人は急いで家の方角へ駆けっていった。

「くそ～、油断した～」

ギリギリで地面に片手を掛けて今にも落ちそうな状況なのに、真っ黒男はだらだらと喋っていた。

‡―†―†―‡

「もうなんなのよ！今日は人生最悪の１日。私がいったい…」

走りながら、実果が文句を並べる。

「ねぇ、実果」

「ん？」

愚痴をやめ、優奈の言葉に耳をやる。

「最近、変だと思わない？私達みたいな超能力者といっぱい会ってるし。あの警告も…」

『最近』というのは正確に言えば今日のことだ。

「警告って？」

「何日前くらい、思考配信（テレパシー）みたいなので『無闇に能力を使わないでください』っていう警告があったでしょ？」

「あ〜あったあった」

実果は思い出したように手を叩いた。

「それと関係してるのかなって」

「そんなの考えすぎだって、私たちの学校だって、そういう子たくさんいるじゃん。だぶん誰かの悪戯（いたずら）だよ」

優奈は納得できなかった。

しばらく走って、優奈の家についた。

「じゃ、気をつけてね」

「うん。それじゃ」

優奈は少し古びた家の屋外階段から2階にあがって、実果は猛ダッシュで自分の家に向かった。

もう朝日が昇りかけていた。
優奈は弟が心配なので急いで玄関の戸をあけた。

「ただいまー」

弟が寝ていると思い、小声でドアを閉めながら言った。
玄関からリビングに来た途端、顔色を変え、呼吸が震えた。優奈は手から力が抜け、鞄が床に落ちた。
優奈の目にぐったりと倒れこんだ弟の姿が飛び込んできたのだ。
その周りには潰れた半透明の銃弾が転がっていた。

「祐！」

‡―†―†―‡

「ニュースです。昨夜、謎の悲鳴が東京の街に響き渡り、住民は騒霊現象が起こったと、警察に多数の通報がありました。水沼さん、これについてどうお考えですか？」
「そうですねー。誰かが叫んでいるにしては、広範囲でしたし、そのような人を誰も見ていないことから、ある種のラップ現象と言っていいでしょう」
雪が愕然とテレビを見ている。その後ろでは類が腹を抱え爆笑していた。
もちろんこの悲鳴とは、昨夜の雪の悲鳴のことで、まさかニュースになるなんて思いもしなかった。

「次です。滝の自然公園近くの歩道に地割れが発見されました。不自然な形をしているため、人的に発生したとして、警察は詳しく調べています」

「レーイ。コーヒーを2つ用意してくれ」

突然、ソファに寝そべりながら、テレビを見ていた類が、澪に頼んだ。

するとドアをノック音が聞こえ、類が立ち上がってドアを開けた。

「よぉ。待ってたぜ」

そこに立っていたのは、実果と優奈だった。二人とも元気がないようすだが、特に優奈の顔色はひどかった。その優奈は、自分よりもさらに顔色の悪い少年を抱えていた。

「入れ」

類は珍しく優しく招いた。

「どけ！」

今度は雪に冷たく言い放った。

類はテレビのボリュームを小さくして、椅子に座るよう指示した。

澪がコーヒーを二人の前に置く。

しばらくの沈黙のあと、以外にも優奈が口を開く。

「あなたが…本当に祐を治してくれるんですか？」

「正確には俺じゃないが、弟さんは直してやる」

再び優しく、そして笑みを浮かべて答える。

「弟さん、病気なら…」

途中で類に口をさえぎられた。今のがかなり『KY』発言だからである。まあ、事情も知らない雪だから仕方がないが…。

「あんたには助けられたけど、どうも怪しいのよね」

類は疑いの目で実果に見られる。

ふと雪が気づいたのだが、彼女たちを助けるために負った左手の傷がいつの間にか消えている。澪さんが治療したときにはまだあった。いったいいつ直したんだろうっと疑問に思ったが、まだ口を抑えられて言えなかった。

「こっちは親切に、思考共有（ジョイント）で悲劇にあってるその子をみて、助けてあげようといってるのに、その態度はなんだ？」

ジョイントに反応して、抑えられていた手を無理やり退かして、立ち上がって激怒した。

「まさか類！また変態能力を使ったの？」

今度は変態能力に反応して実果が立ち上がった。

「変態能力！？」

「そう。この人は他人の脳内に自分の魂を入れて、その人の脳を共有するという変態能力を持ってるのよ！」

「だから、状況がわかったし、私たちを呼べたわけね！」

二人の女性はヒートアップしているのに対し、男性のほうはクールダウンというより、嫌な予感がするというような顔で身を退き始めている。

「お二人さん、落ち着いて。そのおかげで、弟さんが助かるんだから、いいじゃないか…ハハハ、ハー」

「良くないわよ！」

二人は同時に怒鳴った後、バシッという鈍い音がやはり鳴り響いた。

ＥＰ１－ＣＰ７　正義の暗殺者（キラー）（１）（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP1－CP8　正義の暗殺者（キラー）（2）

「弟さんはどうしてこんなことに？」

今にも泣き出しそうな優奈に、雪は恐る恐る聞いた。

「…それは私にもわからないけれど、私のせいなの。私が…もっと早く帰っていれば」

目に涙が溢れているが、表情は変わっていない。

「まぁ、そう自分を責めるなよ」

「お前が言うな！」

類の頭上に2つの拳が落ちた。
両頬に赤い手形がついた類が、優しく慰めた。だが、類が腫れてうまく話せなかったということもあり、そもそも優奈の帰りが遅れたのは、類のせいなので、二人がゲンコツを食らわせたというわけなのである。

「あのさー、俺モグラじゃないから。俺でも痛いからね、これ」

雪と実果が今までにないすごい顔で睨みつけてくるので、さすがの類も口を閉じた。
すると、優奈が堪えていた涙を一気に流した。

「お願いです…。私の…弟を、祐を…助けて…」

そのまま顔を手で覆って伏せてしまった。

誰もが哀れんだ目で彼女を見つめるなか、テレビのすぐそばにいた雪が、小さい音で気になるニュースが耳に入った。

「今入ってきたニュースです。今朝、東京都立通学第3高校の生徒6名が自宅で丸焦げになって遺体で発見されました」

雪は、もしかしたらという気持ちで、彼女達の制服の刺繍（ししゅう）を確認した。

『通学第3高校　守原（かみはら）　実果（みか）』

「あー！」

雪はさっき聞いた高校の名前と同じだったので、思わず声を上げた。

突然雪が叫ぶので実果は目を丸くして驚いた。優奈と澪はまったく動じず、そして類は、耳をふさいで「うるさいなぁ」と小声で愚痴った。

「ごめんなさい…でもこれを見て！」

雪はテレビの前から離れ、テレビを指差した。

「死因は感電死と見ていますが、遺体近くに感電するようなものがなかったため、警察は詳しく調査を進めています」

通学第3高校の生徒、6名死亡と画面右上に映された文字と画面下に映し出されている死亡者の名前が知ってる人の名前だったことに、実果は固まってしまった。

「雪、澪。お前らはここでこの子を見てろ。俺はこいつと一緒にあいつを仕留めに行く」

類がドアのすぐ横のカウンタにおいてある紺のジャケットを羽織った。

『こいつ』という言葉に実果の硬直が解けた。

「な、なんで私まで行くのよ！」

「お前の霊力は役に立つ。それに、俺は今から霊力を澪に預けるんで、戦闘できないしな」

そして、類は澪を見て、少し声を小さくして頼んだ。

雪は「霊力…？」と疑問に思ったが、口には出さなかった。

「弟さんの治療と同時に、相手の能力がわかったら知らせてくれ」

「ええ」

優奈の代わりの敵討ちだと自分に言い聞かせた実果は、しょうがなく立ち上がって、外に出る類の後についていった。

‡—†—†—‡

「なぁ」

「何よ」

実果が不機嫌そうに返事をする。

「お前のその高校には、霊力者（サイキック）が何人いる？」

「霊力者（サイキック）！？」

まるで初めて聞いたように聞き返す。

「何よ霊力者（サイキック）って？」

類は以外な発言に走行をやめた。

「まさか、お前ら霊力を知らないんじゃ……」

「知らないけど、それがどうかした？」

怒り口調で言い放つ。

「マジかよ……」

言葉そのままの表情をした後「まっ、いいか」と開き直って再び走行した。

「じゃあ質問を変える。お前のような能力者は何人いる？」

しばらく考えた後、実果は質問に答えた。

「う〜ん。だいたい３０名くらいかな……」

「それは高校では多いほうか？」

「多いっていうより、あんまり他の高校の能力者の話を聞いたことないのよね。私達は、生徒会と名の能力者達の集いがあるけど」

「生徒会？」

「私達能力者だけで組織された6名の生徒達のこと。6名は能力者の中でもより優れて、学校生活も何の問題もない生徒。当然私も入ってる」

自慢気に言う実果に類は不機嫌な顔になって「お前が優れてるなら、俺は神だな」と呟いた。

すると、類の頭のコブが3つに増えた。言うまでもなく、実果がゲンコツを食らわせたからである。

「とにかく、他の高校の事は知らない」

「じゃあ、今朝殺された奴らのことは？」

「……全員が能力の弱い子ばかりだった。でも、とってもいい子だった」

実果は少し俯き、声のトーンが低くなった。

「ってことは、次も能力の弱い奴が狙われる可能性が高いってわけだ。誰かわかるか？」

「たぶん……リクだと思う。殺された子たちの家にも近いし……」

「そいつの家はどっちだ？」

「このまま真っ直ぐ……ってあんた今まで当てもなく走ってたわけ！？」

突然声のトーンが上がった実果の質問に平然と突然のように答えた。

「そうだけど……何か問題でも？……いいじゃないか、結局方向合ってたわけだし。それに気づかないほうもおかしいけどな」

実果は俯いてその場で立ち止まり「あんたって人はー……」という怨念の囁(ささや)きを聞いて、走行スピードを急激に上げた。その後からすごい顔で実果が追いかけていく。はたから見れば鬼ごっこをしているように見えた。

‡—†—†—‡

「ここよ」

実果がクリーム色の大きな寮のほうを指差した。

「通学区にしては人が少ないなぁ」

「まぁ、今朝の事件があったから、たぶん休校になったんじゃない」

無論、今朝の事件というのは、６人の高校生が殺害されたことである。

類が寮の入り口のほうへゆっくりと歩き始める。しばらく歩いた

後、立ち止まってしまった。なぜなら自動ドアらしきドアが開かないからである。

「おい、これ……」

「ああ。それ学校の生徒じゃないと入れないよ」

実果が自動ドアのほうへ歩き、着いた途端、自動ドアのセンサーの色が赤から緑に変わり、ドアが開いた。

実果はそのなかへ笑みを浮かべて入る。その笑みになぜか類は悔しさを感じていた。

その後、奥にある階段から最上階に上がり、右折。一番奥の部屋の前に来た。そして、実果がチャイムを鳴らそうしたとき、類が小声で叫んだ。

「おい！」

実果はびくっとして「何よ？」と返事した。

「もし、奴が中にいたらバレるだろうが」

「じゃあどうしろっていうの？」

「何言ってる。破壊だろ、破壊」

類が当然だろっというような態度に「は！？」と通常の声量で批判した。

「静かにしろ！」

「破壊って言ったて、どうやって？」

「お前のれい…能力でだ」

「でも……わかった。やってみる」

そう言って、ドアノブに手を掛けた。

ＥＰ１－ＣＰ８　正義の暗殺者（キラー）（２）（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP1―CP9　正義の暗殺者（キラー）（3）

カチャッ

以外なことにドアには鍵が掛かっていなかった。実果は類を睨みつけた。本当は、殴りたいところではあるが、今はそういう状況ではない。ゆっくりとドアを開けた。

部屋が暗い。何も見えない中、電気のスイッチを覚えていた実果は、そこのほうへ手を伸ばした。

部屋に電気がついた。だが、その部屋には、ひどく顔色の悪い青年が横たわっていた。その横に、例の真っ黒男が立っていた。そして、その男から少し離れた後ろのほうに、黒髪に赤毛が混じった女性が立っていた。

「あ〜あ、悪いタイミングに来ちゃったね」

真っ黒男が実果に向かって半透明の銃口を向けると同時に、実果も掌を銃口に向けた。

奇妙な3発の銃声が部屋に鳴り響く。だが、やはり半透明の銃弾は実果の掌の手前で静止し、先が潰れた状態で落ちる。

真っ黒男が舌打ちすると、実果のほうへ駆け出す。だが、次の瞬間、男は赤毛の女のほうへ吹き飛ばされた。

「あんなガキに手間取ってどうすんのよ、クロ」

「痛（つ）っ、俺の名前はクロじゃねー、黒（コク）だ」

まさにぴったりの名前を持つ男、クロ、ではなく黒は、ゆっくり起き上がった。

「それより明は『残り物』を片付けて来い」

「…わかったっ。さっさと終わらしなよ」

「そうはいかないなぁ」

類が赤毛の女、明の前に立ちはだかった。

「何よ、あんたやる…」

ブシッ

その言葉は類の重いグーパンチによって阻まれた。

「てめぇ、女を殴るなんてどういう了見だ！」

倒れこんだ明は類に向かって吼えた。

「何、それ？差別？男女殴る権利ぐらいあるだろ」

味方の実果でさえ、殺してやろうかと思う考え方だったが、敵の黒は「確かに」と小さく納得した。

「黒、気が変わったわ。うちはこいつを殺してから行くことにする」

「おいおい、無茶はやめてくれよ。めんどくさい事になるのはこの俺なんだから」

「そんなの知ったことか、うちはこいつを、お前はあのガキを殺れ」

「はぁ～、おおせのとおりに……」

黒が実果のほうへ再び駆け出すと、実果はすかさず掌を前方に突き出した。が、今度は目にも止まらぬスピードで背後に回り込み、実果の背中に手を伸ばした。

「おい、来ないのか？」

類が見下した目で明を挑発する。

「コノヤロー！」

右手のストレートで類の顔面を狙うが、ことごとく右手で防がれてしまう。左ストレート、右足の振り上げからのかかと落とし、すべてが防がれ、避けられていく。

類は勢いよく防いでいた両手を突き放し、瞬時に右手で額を押す。明はまたしても倒れこんでしまった。

「男だからって遠慮しなくていいぞ」

嫌味ったらしく挑発する。その挑発にまんまと乗っかる明。

すばやく立ち上がり、回し蹴りから上段蹴り、連続のストレートパンチ。力重視ではなく、スピード重視に切り替わり、もはや当たればいいという攻撃になっていた。だが1発も、それどころかかすりもせず、楽々とかわしていく。

すると、実果と黒が戦っているところで、爆発？ものすごい衝撃が生じた。それに隙を見せた明の足を素早く払い、またまた転ばせる。

背後に気配を感じた実果は、無意識に加減なく、ドアの向こうまで黒を吹き飛ばしまったのである。

「……やってくれるね、お嬢さん」

その笑みを浮かべた顔は、恐怖を感じた。

この時、類にある情報が入ってきた。その情報は澪から返却された魂によるものだった。

「金属を……破壊？」

黒はゆっくりと実果のほうへ歩み始める。

「君の霊力がようやくわかったよ」

両手で腰から半透明の銃を2丁取り出す。

「振動破壊（バイブブレイク）。自ら発する振動で、物を破壊する霊力。攻撃面、防御面でも万能。ただ…君の場合、弱点がある。自分の身体から数センチまで接近しないと効果がないということ。さらに、発生できる場所が1点だけということ。つまり、2点同時に、効果がないギリギリのところから攻撃すればいい」

実果は自分が殺されると確信した。その恐怖が顔に出ている。

そして、銃口は実果の心臓と脳に向けられた。

「さて、どっちを守る？どの道死ぬけど……」
残酷な言葉が実果に迫る。
ゆっくりと引き金が引かれる。
実果は、頭を抱えて、その場にしゃがみ込んだ。

カチッ

奇妙な銃声がしない。
ゆっくり目を開けると、そこには、額を手に当てられている類の姿があった。
類の息が荒い。今にも倒れそうだ。
実果には何が起きているかさっぱりだった。
「俺の霊力を知って、わざわざこの子を守るために飛び込んでくるか……」
「……汚い…まねする…な、お前」
つまり、さっき黒が振動破壊（バイブブレイク）についての説明は半分うそで、半分本当ということである。さらに詳しく言えば、確かに、発生できる場所は1箇所なのだが、その振動範囲は自分で調節することができる。なので、別にどこで何発攻撃されようが、すべて防ぐことができるのだが、いかにもそれをできないというように暗示を掛け、驚きや恐怖を感じると硬直する実果の特性を利用したのである。実際にあの銃弾には元々弾はこめられておらず、ただの身代わり（フェイク）だったのだ。

「勝負なんて勝てばいいんだよ、勝てば。だが、それにしも、よくこの貧血状態で立てるな」

　敵ながら黒は感心した。

「貧血…状態？」

「そうだお嬢ちゃん。元々俺は君を殺すつもりはない、というか殺せない。だから、銃を身代わり（フェイク）として使い、君に接触して貧血状態にして動けなくなったところを、明に殺させるつもりだったんだが、その計画がわかったこいつが、かばったってわけだ」

　実果にはまだ意味がわからなかった。その様子を見た黒が自分の霊力を明かした。

「俺は金属を破壊できる。つまり金属破壊（メタルクラッシュ）」

　黒はそれに加えて説明した。

「人間の身体（からだ）にある鉄分を破壊し、鉄欠乏性貧血（てつけつぼうせいひんけつ）を起こし、身体を動けなくできる」

　だるそうに説明を終えた後、類の額に当てた手を退こうとすると、いきなり類の右手がその手を掴んだ。

「おい、俺様を誰だと思ってる。俺はこんなことじゃ、動じないんだよ！」

　目の色が変わった。あの力のない目ではなく強烈な目力だ。まる

で猛獣のような、恐怖感と殺気を感じさせる目だ。
そして、類の右腕には銀白のオーラが纏（まと）い始めた。

「！」

黒の手は、徐々に類の額から離れていく。それと同時に、その手はメキメキと音を鳴らす。
黒がもう片方の手で抵抗するが、そのオーラを纏った右腕はびくともしない。
黒の手が折れる手前で、勢いよく掴んでいる手と抵抗する手を突き飛ばす……というより、オーラによる小爆発によって吹き飛ばした。
そのオーラは右腕から身体全身へと広がった。
全身のオーラから殺気のような念を感じ取った実果は、ひどく怯えた顔で類から後退りした。

「霊力放出（バースト）」

類の全身のオーラが分裂して黒に襲い掛かる。
避けたいが、避けられない。攻撃数が多いということもあるが、避けるだけのスペースがない。
だが実際食らってみると何の変化もなかった。
しかし、耳元で誰かに囁（ささや）かれている。最初ははっきり聞こえなかったが、それは徐々にはっきりと聞こえる。
「おいで」「死のう」「殺してあげるよ」
複数の囁きが耳ではなく、脳に直接インプットされていくようだ。

「やめ……ろ」

頭抱え、目を瞑る。

目を開けると、広がる漆黒の闇。

「いったい……」

ふと自分の身体に目をやると、複数の霊らしきものがすがり付くように纏っている。子供、大人など年齢層はさまざま。誰もがささきの囁きの言葉を呻いている。

暗闇からそれは、どんどん増え、纏わりつき、次第に黒の身体は霊で埋め尽くされていく。

「やめろ！やめ…」

とうとう完全に埋め尽くされてしまった。

「いったいあいつは、どうしちゃったの？」

類の後ろから苦しむ黒を見ての疑問だった。

「……幻覚を見せてやったん……」

言葉の途中で、類の身体が倒れていく。

「ちょ、ちょっと。ここで倒れられても困る」

次第に外が騒がしくなってきた。銃声などの破壊音が響いたので当たり前である。

ふと後ろを振り返ると、あの女の姿がない。そして前を見ると、男の姿も消えていたのだ。

実果はとりあえず、リクのところに行き、荒いが呼吸をしていることを確認にし、部屋の外へ急いで駆け出した。

この部屋から一番奥の部屋についた途端、振動破壊（バイブブレイク）でドアを破壊した。

「わー！…先輩？ちょっとなんですかいきなり」

黒髪のショートヘアーの女の子が制服の上で身体を隠している。別に裸というわけではないが、上は白のロゴ入りTシャツ、下は緑の制服のスカートだったため、アンバランスな服装を見られたくないという本能がそうさせたのであろう。恐らく、着替えの途中にタイミング悪く、実果が突入したので、そうなったのである。

「瑞希、ちょっと来て」

実果はそんなことお構いなしに、瑞希の手首を掴み、さっきの部屋へと連れて行く。

「あの～できれば着替えてから……」

「そんな時間ないの！」

部屋に着くと、瑞希はあ然とした。

倒れこむ男にひどく顔色の悪い青年、凹んだ壁や崩れ落ちそうな天井、何があったのかと思ってしまう。

「早くこっち」

「は、はい」

瑞希を類とリクのところに案内した。

「先輩……これは」

「話はあと。今すぐ、この二人と私を瞬間移動（テレポート）でこの場所から移動させて」

「え！誰かに見つかったら……」

「そんなのあなたが見つからないように移動すればいいだけじゃない」

とんでもなく自分勝手な考えだと思ったが、先輩なのでそんなこともいえない。

「わかりました…」

仕方なく了解した後、二人の手をつないだ。実果は瑞希の背中に乗っかった。

瑞希が寮の向こうに視点をあわせた。

「きゃーーーー」

実果が悲鳴を上げる。寮のすぐの空中に移動し、落下しているのだから当然である。

瑞希は寮の屋上に視点を合わせた後、地面スレスレで屋上に移動した。

４人は無事屋上にたどり着くことができたが、実果は胸に手を当て、息を切らしている。

「瑞希！なんでわざわざあんな怖いとこに移動すんのよ！」

「あそこに移動しないと屋上見えないで」

しゃがみ込んでいた瑞希が立ち上がりながら「そんなことより」と言葉を続けた。

「具体的に何処(どこ)に行きたいんですか？」

屋上から東京の街を見下ろして質問した。

「具体的って言われても…」

「勤務区……」

類が突然口を開いた。

「勤務区134―65―0」

「わかりました。では移動します」

さっきと同じような体勢になった後、その方向へ1km間隔で移動していった。

空中を移動していくため、実果の悲鳴が街に響き渡った。

‡―†―†―‡

「まだやる？」

澪がぼろぼろになっていた明に対しての言葉だった。
明のすぐ右上に、電気の塊のようなものがビリビリっと呻きを上げ浮遊している。それと同じように明の身体も、時々ビリリッと電気が走る。
澪はというと、片方に2つ、もう片方に1つの刃をつけた、奇妙な形の大鎌を持っている。その大鎌は水でぬれていた。
明は舌打ちをした後、電気球を発光させ、目くらましをし、姿を消した。
澪は一ため息をついた後、手に持っていた大鎌をわざとらしく例の谷間に落とした。

「ひぇーーーー」

澪にとって聞きなれない声が例の谷間から聞こえてきた。その谷間を覗くと…。

「ちょっとあんた！こんな物騒なの落とさないでよ！」

４人の人々が谷間の間にぴったり挟まっている。さらに大鎌もうまい具合に谷間に挟まっており、その鎌の刃先ギリギリのところに瑞希の顔があった。あと数センチでグサリである。

「ごめんなさい。わざとじゃないの」

「うそつけ！わざとでしょ。絶対わざとでしょ！あたし見たもん。この目でしかっりきっかり見たもん」

「とりあえずこの鎌をどうにかしてください……」

さっきの悲鳴を上げた瑞希が、泣きそうになりながら願った。

「おかえりー」

雪と少し元気になった優奈が出迎えるが、類とリクは意識不明。瑞希が泣き喚いているのをあやしている実果。その状況にあ然になる他ない。

「なにがあったの！？」

「さぁ……なにがあったんでしょう」

それを見て澪は一人面白そうに笑んだ。

ＥＰ１－ＣＰ９　正義の暗殺者（キラー）（３）（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP1－CP10　新東京

あの事件から1週間。連続殺人事件はピタッと止まり、今のところここ以外は平和続いてる。
私こと雪は、類という変態の家で無理やり住まされているので、平和とは言えない。

類が言うには「おまえは霊力もなんももたない、ひ弱で一般的な女子だから危険だ」と言って、私をこの家から出してくれない。
当の類はというと、夕方に出て行っては、朝方に帰ってくるという繰り返し。その間は、愛用のソファーでグースカ寝てばかり。「これが俺の仕事なんだ……。わかったら眠らせてくれよ」と言うけど、彼の仕事が未だにわかんない。たぶん彼と初めて会ったときに言っていた『ゴーストマネージャー』だと思うけど、それが具体的に何をするのかは不明。
澪さんはというと、あれ以来突然と姿を消した。類は「ほっとけ」と冷たく言い放つだけ。
12月23日午前9時現在、誰もいないこの部屋で私は、朝のニュースを見てる。「もう少しで2008年も終わりですね」「もうすぐクリスマス！」的なことばかり報道している。
誰もいない部屋で、一人テレビを見てたって寂しくないよ。だって今日は祝祭日。あの子達が来るから。

「よっ！ユキィー」

ほら来た。
彼女たちはあれ以来、暇があればここに遊びに来るようなった。

「あれ、あいつは？」

「まだ帰ってきてないよ」

「ふーん、じゃあ出かけない？」

「え…でも…」

類からは、「絶対外に出るなよ。出ても、わかるからな」という、ストーカー的発言を受けていたので、外に出るのはあまり気が進まなかった。

「あいつのことはいいから。行こ！」

「…うん」

私は、まぁ、いいかな、という気持ちで類の家を後にした。

‡—†—†—‡

雪と実果と優奈、女3人で、類の家から500メートルも満たないカフェに来ていた。黒のバックに白い文字で『Coffee Black』と書かれた看板目印だ。

有名店なのか駐車場や店内は混雑している。

その混雑中、運良く4人テーブルに座る女性達の姿があった。

「ホント、雪も大変だねー」

類と同居しているということに対してと、前聞いた、自殺未遂を

したことと、その理由についいて話したことについての同情だった。

「まあね」

コーヒーを少し飲んだあと、ホッとため息をつく。

「私、東京でこんなに落ち着けたの初めて」

「え！そうなの？」

「うん。元々私、千葉にいたから」

大して距離はないのだが、千葉と東京ではけっこう違いがあるのである。特にここ数ヶ月は…。

「へぇーどうして東京に？」

「仕事探しに……」

実果は、悪いことを聞いてしまったような気がして、すぐに言葉が思いつかなったが、雪が話しを続けてくれてホッとした。

「やっぱ、中卒の私を雇ってくれるとこってあまりないし、東京だったらあるかなぁと思ってきたけど、やっぱだめだった」

それでもやはり言葉が見つからなかった実果が、空気を壊さないために頑張って言葉を捜していると、以外なことに隣にいた優奈が口を開いた。

「それで、どうしたんですか？」

その話から離脱して～。
実果が心から願った言葉である。
「それで自殺未遂。類と出会って、今ここでこうなってるってわけ」
だが、実果が思ってるほど、雪は自分の自殺未遂に関しては何も思っていなかった。
「だけどさ。この東京には驚いたわよ。私がイメージしてたより非現実的だった」
「まぁ……。この数ヶ月で東京は１８０度回転したから」
「どんな風に？」
好奇心に満ちた目で実果をじっと見る。
「まず、街の地形が変わったし、それに……」
「地形が変わった!?」
「ええ、そうだけど……」
「何、この東京という場所はシーズン置きに地形を変えるんですか？ていうかそんなことができるんですか？」
「それはわかんないけど……と、とにかく街が変わったし、学校の制度も変わったし……」

「女性3人も集まって、恒例のご近所話ですか？」

するといきなり、空いていた雪の隣の席に座り、大きな態度でもたれた。

「ちょ、あんた何よ！」

類が座ったことに実果が不機嫌そうな顔で怒鳴る。

「こいつが店から勝手に出るから悪いんだろ？」

店？

女性3人の頭に疑問が過ぎったが、そのまま聞き流した。

「今の話、俺が説明していいか？お前らも知らない部分もあるだろうし」

「あんたがすべて知ってるような言い草ね」

「だって現に知ってるし、俺天才だし」

実果の顔がますます不機嫌になる。雪のほうは怒る気もせず、呆れていた。

「説明するぞー。まず、東京は3ヶ月前に工事をした。その工事で、道路から建物に至るまで、すべてを変えた。そして、東京23区は今や3区までに減った」

「いったいどうやって？」

「だまれ、質問は後だ」

雪はさすがに実果と同じく不機嫌な顔になった。

「通勤区、通学区、商店区の３つ。通勤区は残業などをなくすために作られた会社密集地域で、午後８時以降の会社への侵入を禁止するシステムだ。しかも、会社はもはや個人の物ではなく、国のものになっている。建物そのものは国のものだが、内容はそれぞれ個人が管理している。だから、１つのビルに会社が何十個というのもおかしくはない。もちろん東京だけだが…」

「それはあたしも初耳」

優奈も同じくというようにうなずく。

「それでちゃんとやっていけてんの？」

「ああ、もちろんだ。それで国の不景気は回復したたし、順調そのもの。まぁ、その理由としては、会社が倒産しそうなときは国が支援するが、いらない会社は強制的にやめさせられる。だが、その連立する会社に勤めることができるから、失業者を最小限に抑えられるところかな」

「どうりで物価が安くなったはずだわ」

「で、おまえなんかが通う通学区は……」

「それは知ってる。１つの地域に小中高大の学校が密集していて、

学校同士のコミュニケーションや、通学のし易いようにできてるんでしょ？　便利だよね～。あと、寮も充実して、今では小学校の寮もあるんだよー」

優奈が自慢げに話すが、類が興味ないという顔で目を背けている。

「もういい？」

優奈がまた不機嫌な顔に戻った。

「商店区は別に説明するほどでもない。渋谷とか秋葉とかとなんら変わらん」

「思ったんだけど……」

今まで聞いていた雪が問う。

「それを都民は了解したの？」

「当然だ。教育費、工事のための引越し代は国が負担。会社も倒産しにくいうえに、失業しないとなると断るほうがおかしい。だが、すぐにそれを信じるというわけではなかったがな」

「……あ～あれですね。あれは誰も信じないかと思いましたけど、まさか証明するとは」

「まぁ、結局は霊力だったんだがな」

「そうだったんですか？」

雪と実果を置いてふたりだけで話を進める。
スイッチが入ったのか、今までにないテンションで類と会話する優奈に雪は少し驚いた。
その気持ちを抑え、その次に思っていることを言い放った。
「ちょっと私たちを置いていかないでよ！」
「そうよ！　あたしにも説明してよ」
次は優奈が説明を始めた。
「東京が工事されるときね、本当にそんなことができるのかって、一部の都民が反論したの。それで、国が東京都のみで、テレビを通じて、それを証明させたのよ」
「見たかったな〜」
「でも、どうして国は、東京をそんなにまでして、改善させたかったの？　それにどうやって短時間でここまで……」
「短時間でできたのは……正義（キラー）の暗殺者たちが全部霊力で工事したからさ。国がなぜそれをするかについては……あれだ。国の繁栄のためだろ？　その考え方はいいが、方法が間違っている。正義の暗殺者（キラー）が霊力者（サイキック）を殺して捕獲し、解剖して、霊力を国のものにするというのが目的だろうな。」
すると、実果と優奈は目を丸くして、あ然とした。
「……サイキックって私達のことよね？　それこそ初耳なんですけど」

「……もしかして、あの警告はこのために」

「そのとおりだ。あの警告は知り合いに頼んで、全霊力者（サイキック）に俺が警告した言葉だ」

類は深刻な顔になって、二人に顔を近づけた。

「これから正義の暗黒者（やつら）はますます活発になる。自分達も含め、その周りの霊力者（サイキック）にも再度お前達からも警告しろ」

「でも国はどうしてこんなことを！？」

雪が思わず大声で叫ぶが、人が混雑していて、周りにはあまり気づかれていない。

「国、政治家がやってるわけじゃない。お前には話したが、自殺者達の悪霊がそうさせているだけだ」

「まさか話しには聞いていたけどここまでの影響だったなんて」

実果が顎に手を当てる。

「ん？お前らも知ってるのか？」

「はい…。私達の生徒会（メイジャー）の先生が、説明してくれたんです」

類の疑問に優奈が答える。

「ふ～ん」

そう納得して、類は立ち上がった。

「それじゃ、俺は行くわ。ホント、お前らと話してると疲れるっ。おい行くぞ」

捨て台詞を残して、雪を引っ張り、類は店の外に出て行った。

「なんなのよあいつ！」

実果は一気にコーヒーを飲み干して、乱暴に席を立ち、支払いを済ませて、二人は店を去った。

ＥＰ１－ＣＰ１０　新東京（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP1－CP11　類の10の霊力

祝祭日のためか、商店区は人々でにぎわっている。行列ができている店も少なくない。

街の中に類と雪の姿もあった。雪は不機嫌そうに類の後ろ歩いている。

「ねぇー、あんたが普通に街歩いてもいいの？」

「俺を知ってる警察官はあの二人だけだ。あの二人にさえ合わなきゃ問題はない」

類が冷たく言い放つ。

雪は自分が質問したにも関わらず、その答えを聞かずに、周りをキョロキョロ見回す。

「やっぱり、東京はすごいなぁ」

雪がぼそっと独り言をこぼす。

類は聞こえていないのか、無視しているのか、ゆっくり自分の家に向かって歩く。

「ねぇ」

それでも無視して歩き続ける。

「さっきの話で思ったんだけど、なんで会社を8時までに閉めるの？」

「……」

「ちょっと聞いてる？」

「……俺は興味のない話は聞かない主義なんで」

さすがにイラッときた雪は、類の後頭部を殴ろうとした。が、後頭部からレイノが出てきたため、わっと悲鳴を上げて、尻餅をついた。

雪は多数の周りからの視線を浴びた。

「俺をほいほい簡単に殴れると思ったら大間違いだ」

類が初めて後ろ振り返って喋った。

雪はすぐに立ちあがり、服のホコリを取り払った。

「最っ低」

雪は不機嫌というレベルではなく、激怒というレベルで類を追い越し、早歩きで先に進む。

類は、しょうがない、というため息をつき、雪に向かって掌を翳(かざ)し、小さく呟いた。

「思考共有(ジョイント)」

早歩きで俯き、愚痴をぼそぼそと呟く姿は、まるで危ない人である。

すると、雪の脳内がなにかを捕らえた。

サービス残業というものをなくすために、残業そのものをなくして、

午後8時の会社の入社は法律で禁止されてる。
あと、さっきはごめん……ってレイノが。

という言葉が頭に入ってきた。
しばらく立ち止まり、許そう、と思ったあと、類のほうへ振り向いた。が、類はいなかった。
雪が類のいたところまで引き返すと、そこの店で、商品を見つめている類を発見した。
その店には女性客が多く、男性の類が少し目立つ。
雪が店の看板を確かめるため、上を見上げると『ジュエル』と書かれていた。つまり、アクセサリー専門店というわけである。

「何やっての?」

店内に入り、目をギラギラとさせ、アクセサリーを見る類に恥じらいと軽蔑の意味で小声で声をかけた。

「見ればわかるだろ〜、アクセ見てんだよ♪」

類にしてはめずらしい、活き活きと楽しそうな感じだ。そんな類に雪は少し引いていた。
そして雪は確信した。この男がアクセサリー好きということを。

「あれもいいが、これも捨てがたいし……」

アクセサリーを見ながらぶつぶつと呟く。
そんなにいいものなのかと、雪がガラスケースの中のアクセサリーを見ると、髑髏やナイフなどのダークなアクセサリーばかりが並んでいた。
類のポケットからはみ出るものをよく見ると、やはりダークアク

セばかりだった。

「あ、金もってねぇーんだった。……は～」

類はひどく落ち込んだようで、愕然となり、店を後にした。

あんな類を初めてみた衝撃に、しばらく雪はそのまま呆然としていた。

‡—†—†—‡

「……せんぱ～い、疲れました」

先に階段を上る勇に、甘えるように言った。

勇は階段の手すりから顔を出した。

「あと少しだ。早く上って来ぃ」

縦長で狭い階段なので、よく声が響く。

それにしても長い階段である。彼らはもうすでに1時間近く階段を上っている。

しばらく上った後、途中にあるドアの前で立ち止まった。

「ここだ」

「あ～、階段だけでも疲れるのに、まだ……」

竜が息を切らし、絶望する。

「開くぞ……」

勇がゆっくりとドアを開ける。

「遅い！」

突然スナック菓子が勇の顔面を襲う！

「1分遅刻！129円ね」

ピンクのカラーサングラスを頭にかけ、同色のピンクの瞳が勇たちのほうを睨む。さらにロングヘアーの黒髪がピンクの瞳を強調しているため、その鋭さはいっそう増している。

さらに恐ろしいのは、椅子に座る彼女の周りにある大量のスナック菓子である。1000個、いやそれ以上と言ってもおかしくない量である。彼女のテーブルとドアを結ぶ床以外は、すべてそれで覆い尽くされている。

「ん？……おい勇！竜はどうした」

テーブルの上に足を組み、大きな態度で勇に怒鳴る。

「俺の後ろにいますけど」

「ちょっと先輩！」

竜はさっきからやけに怯えている。

すると、スナック菓子がいきなり動き出し、竜を包み込む。強制的に、竜を自分のとなりに連れ込んだ。

「よしよーし、お前はホントにかわいいなぁ」

竜をとなりに座らせ、頭の双葉を撫でてぺったんこにするが、やはりすぐに元の状態に戻り、それを面白がって撫で続ける。

勇からみれば、いつもやられいる分、いい気味だと思っているに違いない。

見てわかるとおり、竜にとって彼女は唯一、反抗できない人間なのである。

「それで今日は何のようだ？」

「類について話があってここへ来た」

「ふ～ん……それで？」

「それについては竜から……」

「話しますから、撫でるのやめてください。茜(あかね)さん」

そう竜が言うと、茜は竜の頭から手を退いた。

「まず質問です。霊力自体が霊ってあり得ますか？」

茜は撫でていた手を顎(あご)に当てた。

「まずないわね。それってつまり死んでるか、1度死んだことがあ……」

茜は何かを思い出したように、そして思い出したことがとても重大というような表情をした。

「……訂正。やっぱあり得る。過去にそういう奴がいたから」

「え！」

「確か、200年前ぐらいのヨーロッパにいたという話があった。そいつは霊力を10も使えたと聞いてるわ」

「10も…」

驚きというより、二人はあ然となった。

「もし、類って奴が、そいつの生まれ変わりだとしたら、その確率はゼロではないはず」

「……10っていうのは、ちょっと、ありすぎじゃないのか？俺や竜でも応用して2つだってのに。多種霊力者(マルチサイキック)だとしても、4，5が限界だ」

勇は驚きのあまり取り乱していた。

「霊が霊力っていうのは、思ってるよりも強力。霊のすべての能力が使えるだから、基本それぐらいが当然。応用したら、計り知れないわね……」

「それりゃ、勝てないはずですよ」

竜がため息をついて、さりげなく茜のそばから離れようとしたが、頭を鷲掴(わしづか)みされ、椅子に引き戻された。

「それで、類ってやつの能力はわかったの？」

竜は苦笑いしながら答える。

「……えーっと、潜在能力（ハイド）、瞬間移動（テレポート）、空飛ぶ能力に、特殊な霊力放出（バースト）です」

「20点。瞬間移動（テレポート）は既に存在するから、何か別の移動系列能力。空を飛ぶ能力は、空中浮遊（フロート）ね」

茜は立ち上がると、汚れ一つない白衣の科学服が姿を現した。

そして、スナック菓子の中から『銀白糖』を取り出しては、すぐ袋を破き、中身を取り出して、2，3個口の中に入れた。

「とりあえず、しばらくあいつからは退きなさい。下手に関わると奴らに殺（や）られるよ」

「だが……」

すると、茜が鋭い眼差しで真っ直ぐ勇を睨む。

「これはお前だけの問題じゃない。竜にもあたしにも関係がある。命を無駄にさせるな！」

茜は静かに怒鳴った後、ドアを開けて「今日は帰りな」と言って、二人を部屋から出した。

「そろそろあたし達も、本格的に動く時期かな……」

口の中の飴をガリガリッと噛み砕いた。

そのとき、追い出された勇たちは、ゆっくりと階段を下りる。

「竜。お前、俺に隠し事してないか？」

「……」

竜は勇の質問に表情を変えずに、黙って階段を下りる。

「あの女からも、茜からも、俺に警告突きつけてくる」

あの女とは澪のことである。あの時の澪の言葉を思い出した。言葉は違うが、警告していることが、茜が警告したことと同じような気がした。

「澪がお前がわかると言っていた……」

「先輩。俺は隠してる事なんかない。ただ、先輩だけが知らないだけだ」

「どういうことだ？」

勇は途中で立ち止まり、後ろを振り返った。

「先輩以外の霊力者（サイキック）はみんな知ってる。先輩と裕輝以外が知らないだけで……」

ＥＰ１－ＣＰ１１　類の１０の霊力（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP1－CP12　仕事

東京の街は雪が降っていた。
今日は1月7日。雪が類と出会って約3週間が経っている。
雪にとっては、類と出会ったこと以外は何も変わってはいなかった。だが、その変化はとても大きなものだった。
雪はいつものように、類の家でテレビをみている。類は相変わらず外出。澪も戻ってきていない。
優奈と実果も冬休みが明け、遊びには来ない。

「……お腹すいた～」

雪は立ち上がって、キッチンへ向かった。
鼻歌を歌いながら、冷蔵庫や棚などを漁り、食べ物を探すが、食べたいものが見つからない。
そこで、地下なら何かあるかもしれないとそこへ向かう。
階段を下りるとき、あれ以来この場所に来たことなかったなっとふと思った。
地下はとても暗かった。光は階段からしか差し込んでいない。
電気のスイッチを探すため、壁をあちこち触って探す。
そして、スイッチを見つけて、部屋の明りをつけると、驚きの光景が広がっていた。

「……何、これ……」

そこにはなんと、形大きさ様々なレイノのような白い魂が奥の部屋まで行列を作っているのである。
その魂たちが、雪に向かって軽い会釈をする。条件反射で雪も軽

く会釈する。
後から変な気分襲われたが、そんなことより、行列の先がとても気になった。
最初は最後尾に並ぼうとしたのだが、魂たちが「どうぞどうぞ」と言うので、少し躊躇しながら、魂たちを透き通って、行列の先頭に進む。
思えば、奥の部屋に行くのは初めてだった。というより、奥に部屋があること自体知らなかった。
徐々に部屋に近づいていく。暗い廊下の終わりが見えてきた。その途中にドアのない部屋が見える。
部屋まであと数センチというところで、歩く速度を遅め、ゆっくりと部屋に近づく。
雪はそっと部屋を覗く。

「はぁ！？」

そこには、魂の相談相手になっている類の姿があった。

「……あ」

「あ、じゃないわよ！ここで何してんのよ」
雪が類のいる、部屋の端へ早歩きで進む。

「仕事」

「仕事！？」

類が椅子を雪のほうへ向きなおす。

「最初に言ったろ。ゴーストマネージャーだって」

「じゃあ今まで、いなかったのって……」

「そうだ。ここでずっと仕事してたわけだ」

今思うと、類が外へ繋がるドアから出たのを見たことがなかった。いつの間にいなくなっていて、いつの間に帰ってきていたのである。

「じゃあ、この変なのは……」

「霊だけど」

自分でも以外だったが、それほど驚かなかった。恐らく類のせいで慣れてしまったからであろう。

「……そう。じゃあ、その霊、さんを相手になにを？」

「相談だ。どうやって成仏できるかっていうな」

「相談？」

「こいつら全員自殺者で、人生に未練があるらしい。だからそれを手伝ってやってるんだ」

類はテーブルの中央にある真っ白の紙を幽霊に手渡した。

すると、幽霊はその紙を持って、スッと消えていってしまった。

「なんなのその紙？」

「推薦状」

「……？」

「霊はこの世に未練があるからあの世にいけない。かと言って、生き返ることはできない。だから、普通は、この世に徘徊して、悪霊化し、騒霊現象引き起こしたりする地縛霊に成り下がる。それを阻止するため、俺が人として生まれ変わるため、二度と自殺が起きないようにするための、人生の保険を書いてやってるのさ。まぁ、実際それは、あの世が決めることだが……」

類は白紙の紙にボールペンで何かを書きながら説明する。
書き終わると、それに手を勢いよく押し付ける。
すると、行列を作っていた霊たちが、その中に吸い込まれていく。
そして、その紙を裏返す。

「今日はここまでだ」

類は椅子から立ち上がって、雪を無視してそのまま部屋を出ようとする。

「雪。上に行って、テレビのニュース見て来い」

「え！？……うん」

そう頷くと、部屋を早々と出て、階段を駆け上がった。
上がりきると、ちょうどニュースが始まっていた。

「たった今入ってきたニュースです。東京都立通学第3高校で強烈な騒霊現象が起こり、全校生徒は緊急に帰宅という状況になりまし

た」

雪は類が来るまで、テレビをずっと見つめたまま動かなかった。

「よーし、通学第3高校に行くぞー」

やる気があるのかないのか、よくわからない言い方だった。

‡—†—†—‡

雪たちは高校の校門に立っていた。

やはり、校内には生徒どころか、先生の姿すら見えない。

そのまったく人の気配がしない校内の中にゆっくりと歩みだす二人。

中庭に着くと、不自然にも空が雲で灰色に染まる。すっかりあたりは薄暗くなってしまった。

すると、人がいないことをいいことに、優奈を背負った瑞希が二人の前に瞬間移動（テレポート）してきた。

当然、人がいきなり自分の前に瞬間移動（しゅんかんいどう）してきたら、半端なく驚くだろう。雪はまさしくそういう顔して、数歩後ずさった。

「類さん！」

優奈が慌てて瑞希の背から降り、珍しく大きな声で類を呼ぶ。

「大変なんです。実果が理科室に閉じ込められちゃったんです」

「え！」

反応したのは当然雪だった。
実果の身が危険ということで、驚きから平常に戻った。
「そのぐったりしてるお友達は瞬間移動(テレポート)だろ？　そこに行って助ければいいじゃないか」
息を切らし、俯いている瑞希を指差して類が提案した。
「それが、瑞希は視野に入ったところにしか移動できなくて、理科室は鍵が掛かってて、窓はひどく曇っていて……」
類は鼻で笑って訂正した。
「それは、瞬間移動(テレポート)じゃなくて、視点移動(アイポイント)だ」
「そんなことより、早く実果を助けないと！」
雪が話を元に戻した。
「私が案内します」
優奈はそのまま真っ直ぐ進み、廊下の窓を開けて、そこへ二人を案内した。
「ちょ……ちょっと、待ってください」
瑞希が制服の汚れを払い、遅れて後についていく。

校内は広く、場所を覚えるのに時間がかかりそうなぐらい複雑だった。

「こっちです」

優奈が右に進み、３人はその後からついていく。
次第に光が差し込む窓が少なくなり、暗くなり始める。
そして一番端の教室のドアの前で立ち止まった。
そこは恐らく、校内で最も暗いところであろう。いかにも出そうな雰囲気である。

「ここです」

その教室の窓は、優奈が言った通り酷く曇っており、中から微かに騒音が聞こえる。

「まさしくってとこだな」

類がドアに近づく。そして、ドアに手を当てる。

「霊力感知（センス）」

類の手には、霊の気配をしっかりと感じ取っていた。

「おっと……よりによって強力な悪霊（れい）だな」

「……それで、実果は大丈夫なんですか？」

「……金縛りにあって、動けない状態だ。だが、命に別状はない」

命に別状はないと聞いて優奈はホッとした。

「どうしてそんなことわかるのよ」

「俺には１０の霊力があるって言ったろ」

雪が疑いの目で類を見つめる。

何度も言わせるなというような口調だった。

「それより問題は、どうやって入るかだ」

「曇りを晴らせば、私がみなさんを移動させられますけど」

やっと疲労を回復した瑞希が提案する。

「類のその１０の霊力って奴でなんとか出来ないの？」

「出来なくもないが、俺が疲れるから遠慮しとく」

「そんなこと言ってられないでしょ！」

「霊力を使えないからそんなことが言えるんだよ。この瑞希って子のさっき見たろ？息をあんなに切らして、まるで１００ｋｍ走り切ったみたいだったただろ？そんぐらい疲れるんだよ」

「じゃあ、どうやって……」

しばらくの沈黙のあと、また類が口を開いた。

「はぁ～、仕方ない。俺が破壊してやるよ」

「結局！？」

全員同じ気持ちだったが、つっ込んだのは雪だけだった。

「いや～、誰かが『実はドアを壊す能力を持ってるんです』的なことを言ってくるのを待ってたんだが、それもないようだから」

それって私？

優奈と瑞希が同時に思ったことである。

「少し離れてろ」

すると、類の右手が銀白のオーラに包まれた。

その右手を後ろに引いた後、勢いよくドアに向かって拳を突き出した。

見事にドアは粉々になった。

「あ～やりすぎたか……」

類を除く3人は、類がドアを破壊したことにではなく、教室の様子を見て驚いた。

教室のありとあらゆるものが空中を舞っていたのである。ビーカーやフラスコ、骸骨達が踊っている。

「なにこれ。ダンスパーティ？」

この教室を見た類の感想だった。

「あ！見てあそこ」
教室の奥の壁に実果が倒れこんでいるのを見て、雪が声を上げた。それに気づいた優奈が、実果の元へ急いで行こうとするが、類が腕を広げて阻止した。
「下手に動くな。死ぬぞ」
さっきまでのふざけていた類の表情が変わった。そうとう強力な悪霊（れい）達らしい。
「ところで、あんたの霊力はなんだ？」
「私……ですか？……私もよくわかりませんが、人の気持ちを読むことと、ある程度、人を思い通りに動かすことが出来ます」
類は顔色を変えずに、少し微笑んだ。
「なるほど。思考接続（シンクロ）か。あんたの霊力で、この霊たちを静めることができるな」
優奈が類の方を向く。
「俺が合図したら、意識を浮遊しているものに集中させて、『止まれ』と念じろ。いいな？」
類が優しく説明すると、優奈は「はい」と小さく、はっきりと返事をした。
なぜか、優奈だけに優しくする類に、不快感を感じていた雪だっ

た。

ＥＰ１－ＣＰ１２　仕事（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP1－CP13　悪霊

自分でも意味のわからない嫉妬を抱いていた雪の背中を、類が強く押し出した。

「わっ。ちょっと何……」

雪の言葉が途切れた。最初は類に向かって文句を言っていたのだが、途中で正面を向いたとき、浮遊しているものが突然ピタっと止まり、すべて雪に向けられているのである。

「え……？」

突然のことで、何が起こってるのか理解できない雪に、いきなり浮遊物体が襲ってくる。

「今だ！」

類が合図すると、優奈は浮遊物体に手を翳し、目を瞑って意識をそれに集中させた。

すると、見事に浮遊物体はゆっくり止まった。中には雪の顔ギリギリで止まったものもあるが、とりあえず止まったのでどうでもいい。

止まった瞬間、類は実果の方へ駆け出した。

「潜在能力（ハイド）」

そして、実果が宙に浮いた、ように見えるが、類の姿が見えないのでそう見えるだけで、実際は類がお姫様抱っこをしているのであ

る。
　一方、悪霊を自分の能力で拘束している優奈は、気温１２度にも関わらず、額から汗が落ちる。そうとう疲れるらしく、限界という顔している。

「……げん…かい」

　次第に浮遊物体が動き始める。
　自分の身に危険を感じた雪は、瑞希のところまで数歩退がる。
　瑞希も自分と二人に危機を感じ、優奈の肩に手を乗せ、雪の手を握る。
　急に手を握られた雪が振り返る間もなく、瑞希が視点を合わせた理科室の中央に視点（アイポイント）移動した。

「何？」

　と雪が尋ねるときには、既に移動が終えたときだった。
　その移動と少し遅れて、理科室の中央で何かとぶつかった。

「いったー」

　全員が同時に声を上げた。
「視点（アイポイント）移動するときは、周りをよくみてやれ！」
「すいません」
　類が見えない状態だったので、そんなことは無理だった。

バリンッ

浮遊していたビーカーやフラスコが地面に衝突した。

だが、その割れたガラスの破片らが、再び浮遊し、先の尖がった方を類たちの方へ向ける。

さらに、理科室のドアが閉まる。

「おい！視点移動（アイポイント）。お前のせいなんだから、責任持って、雪を保護しろ。」

「はい……」

瑞希がしょんぼりしたようすで返事をする。

「あんたもつらいとは思うが、出来るだけ、奴らを止めてといてくれ」

息切れしている優奈に向かって優しく頼んだ。

優奈は息を整えた後、一つ頷（うなず）いた。

類は優奈が同意したことを確認した後、浮遊物体に手を翳（かざ）した。

「霊体実体（サブスタンス）」

しばらくもしないうちに、浮遊源が姿を現した。

その姿に雪はもちろん、瑞希と優奈も腰を抜かし、表情が恐怖で包まれた。

雪が今まで見てきたレイノのような霊とは、比べ物にならない姿だった。漆黒に包まれ、その中に吸い込まれそうだ。戦闘に慣れていない者でもわかる強烈な殺気。形も魂（たま）状ではなく、人型だが、絶

対に人間ではない。それが７人もいるのだから、恐怖感はさらに増幅する。
　それにも関わらず、平然と立ち尽くす類は本当に人間なのかと思う。
「レイノ、行くぞ」
　類の肩からレイノが姿を現し、「うん」と頷くと、右手に移動する。類の右腕が銀白のオーラに包まれる。
　次の瞬間、一人の悪霊が、持っている割れたガラスの破片を、類に向かって刺しかかる。
　だが、類は悪霊の前から突然姿を消した……ように見えたが、実際はサイドに瞬間移動し、右腕の拳で悪霊を思いっきり殴った。
　悪霊は思いっきり吹き飛び、試験管などがおいてある棚を突き抜け、廊下の壁にひびを残し、激突した。
　そして、類が殴った瞬間、他の二人の悪霊が類に襲い掛かる。思いっきり殴ったせいで、体勢が元に戻せない。
　恐怖感を祓い、はっとした優奈が、急いで二人の悪霊に手を翳すと、ギリギリのところで止まった。
　そのチャンスを利用し、殴った拳をそのまま地面につけ、勢いで身体ごと浮かした。さらにその反動で、二人の悪霊に思いっきり蹴りを食らわした。そしてその勢いで、そのまま足を地面につけ、元の立ち姿勢に直した。
　そして次は４人の悪霊が同時に襲ってくる。
「霊力（バースト）放出！」
　類が右手を悪霊たちに手を翳すと、銀白のオーラがその方向に向かって勢いよく放たれる。
　３人には避けられたが、一人には的中した。前例とは違い、さっ

きの殴りや蹴りのように吹き飛ばされた。
二人の悪霊は優奈によって止められているが、霊力を使いすぎたのか、完全には止まっていない。すこしずつだが、こちらに向かってくる。
すると、類があることに気づく。
「ちっ。もう一人はどこ行った？」
類が３６０度、あたりを見回すと、最悪なことに、瑞希と雪の背後に回り込み、襲いかかろうとしている。
瑞希は気づいていないので避けるのは不可。優奈は集中していて、気配を感じず、当然雪が気づくはずもない。
悲劇は避けられない。

ブスッ、グサッ

複数の肉を刺す音が身体（からだ）に響き、雪の顔に血の雫が落ちる。
雪たちの目に飛び込んできたのは、身体の至るところにガラスの破片が刺さった類の姿だった。
悪霊のほうは、類の攻撃を受けたのであろう。壁に穴が開いて、雨が降っている向こうの校庭（にわ）の方に倒れこんでいる。
類はそのまま倒れこんでしまった。
だが、問題はまだ残っている。優奈が引き止めている悪霊は今にも襲い掛かろうとしているが、それを必死で優奈が抑えている。
とうとう優奈の霊力が切れた。優奈はそのまま疲れてきって倒れる。
二人の悪霊が複数のガラスの破片を浮遊させて、尖がった方をこっちに向けて放つ。

次の瞬間、ガラスの破片はギリギリのところで粉々になり、二人の霊は黒板の方へ吹き飛ばされた。
実果が寝たまま右手を突き出して、振動破壊(バイブブレイク)で吹き飛ばしたのだった。そしてそのまま、再度眠りにつく。
雪にはもう着いていけなかった。頭が混乱していて、気絶したい気分だ。だが、そういうわけにはいかず、座り尽くすだけだった。
4人の霊力者(サイキック)中、3人が戦闘不能。
この状況では、倒れている悪霊が起き上がったら確実に殺されてしまう。だが、そんな心配はいらなかった。
7人の悪霊たちは、徐々に透けて、とうとう完全に消えてしまったからである。
「どうします?」
何が?と言い返したいところだが、頭が働かない。
しばらくの沈黙の後、やっと頭が働き始めた雪が提案する。
「…類の…家に移動できます?」
瑞希はコクっと頷き、理科室の後ろの穴が開いた壁の向こうの校庭(にわ)に視点を合わせた。

‡—†—†—‡

「なんでこうなるかな…」
この状態から数分で目覚めた実果が思った正直な言葉だった。
この状態というのは、例の路地の間に挟まって動けないという状

態である。
　実果と瑞希にとっては二度目の体験である。

「……つらい」

「つらいってあんたのせいでしょう！」

「まぁそうなんですけどね（笑）」

「まったく、あんたの能天気には目に余るものがあるんですけど」

「まぁまぁ、二人とも。とりあえず落ち着いて」

　瑞希の正直な感想に実果がつっ込み、それを雪が宥めるという会話が繰り返される。
　だが、その会話は途中で途切れる。類が寝返り（？）をうったので、うまく挟まっていたのが、落ちそうになったからである。
　何が問題なのかというと、類は現在、一番上にいる。その下に雪が挟まっている。つまり、この状態で落ちれば、雪までがガラスの破片の餌食になってしまうのである。

「しょうがない……」

　実果が残念そうに言うと、類のガラスが刺さっていない部分に手を当て、そのまま斜め上に軽く飛ばした。
　予想外の行動に雪はあ然とする。今の「しょうがいない」は、雪がガラスの餌食になるのがしょうがないと思っていたのだ。まぁ、結局、自分が助かるのでそれでも良かったのだが…。
　もちろん、類は地面にぶつかったせいで、前よりも深手を負ってしまった。

「ねぇ、あの人ホントは目覚めてないですか？　実は、私らの見られたくないもの見てたり……」

「あ～大丈夫。あたし達、ちゃんと中からズボン着てるし」

瑞希がそれを聞いてびくっと身震いした。

「それに、あの状況でそんな思考が出来たら大したもんよー。万が一そんなことが出来ても、どうせ中はズボンだし。あんたもそうでしょ？」

実果が瑞希に同意を求めるが、実は瑞希、中はそのまま。ズボンなどは履いていない。今日は部活がないので、あえて履いてこなかったのである。

先輩達もそうだと思っていたのに…。まさか、こんな状況になるなんて……。

「…瑞希？」

「……は、はい！」

すると、さっきの振動破壊（バイブブレイク）の反動もあって、４人の制服女子達の姿勢が崩れた。そして、地面に落ちてしまった。

「…痛たたたー」

そう打った頭をさすりながら、実果が瑞希の方を見た。

「あ……」

「……」

雪も瑞希の方を見る。

「……」

「……」

「あーーーーー！」

ＥＰ１－ＣＰ１３　悪霊（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP1－CP14　自殺相談所　霊の方はこちらからお入りください

騒霊現象（ポルターガイスト）事件が解決した、２時間後…。
雪たちは類の家で休憩していた。

「俺思ったんだが…」

テレビの前にある椅子に、絆創膏と包帯を多数付けて座っている類が、腕組みをして偉そうな姿勢で言う。

「お前ら４人。紛らわしい」

失礼である。
それを無表情で言うので、実果と雪は余計むかついた。
特に実果は今腹が立っている。
数分前、実果を除く3人の女が、先にソファーに座ってしまったため、３人用ソファーには空きがなかった。
後輩である瑞希に、その上下関係を武器に、変わるよう言うが、「先輩なんだから、後輩に譲るのが普通でしょ」と上下関係で返り討ちにされてしまい、苛立っているのである。
そのため、自分だけソファーに座れず、その横に立っている。

「紛らわしいって、何が？」

雪が怒鳴り口調で疑問をぶつける。

「まずその1、全員制服。お前ら個性って言葉知ってる？たまには、個性をアピールするために、私服で来い。特に雪！」

類が雪の顔に指を指す。

「3人は学生だから未だしも。お前はフリーだろが。どっかから拝借して来い」

「それってどういう…」

「はい、その2」

雪の言葉を無視し、話を続ける。

「雪と瑞希。どっちか髪を染めろ。または、坊主になれ」

今の発言に、堪忍袋が切れた雪が、テーブルを思いっきり叩き付けた。

「今のはさすがに……。女性に対して言う言葉？」

「まず、優奈を除き、3人の髪型がほぼ同じなのは、かなり紛らわしい」

類がまた、雪の話を無視して続ける。

まぁ、類の言うことに同感できるものがあった。優奈を除く三人は、ホントにほぼ同じ髪型。優奈も、少し長いだけで大して変わらない。後ろから見ればパッと見、区別が付かないかもしれない。

「せめて色を変えろ。ほらー、実果も、茶髪に染めて、いかにもヤンキーという個性をアピールしてるだろ？」

「あんたね！」

雪だけではなく、実果も同時に声を上げた。
「俺は間違ったことは言ってるつもりはない。況してや、アドバイスだ。怒られる義理はない」
ますます二人の怒りがこみあがる。
瑞希はポカンっと呆然するだけで、優奈は二人をなだめる。
「……もう我慢の限界！」
雪が呟いく。
今にも怒りが爆発しそうな二人を余所に、突然瑞希が立ち上がり、キッチンの方へと向かいだす。冷蔵庫から何かを取り出した後、怒りのオーラを纏った二人に近づく。
優奈と、あの類でさえも、その瑞希の行動を呆然と見守る。
それを持っている手を、雪と実果の頭上に運び、ぱっと握っていた手を開く。
それは雪の頭の斜め前にすべり落ちた。

「……」
コンっという音が鳴り、テーブルから床に落ちる。それが落ちたところは水滴が残り、落ちた床にも、それを中心に水がたまっている。
それは氷だった。
瑞希がなぜ二人の頭上に落としたかは不明である。
「……あんたー、何してんの？」

実果が怒りを必死に抑えて瑞希に尋ねる。

「頭を冷やそうと思って、へへっ」

「……このー……瑞希〜！」

突然の怒鳴り声にビクっとする瑞希。実果の殺気を感じて、数歩後ずさる。

実果の怒りの対象は、類から瑞希へと変更され、瑞希をギロっと睨みつけ、瑞希に襲い掛かる。瑞希もあわてて、実果から逃げる。

「私何も悪いことしてないのに〜」

「待てーーーーーーー！」

と部屋中を駆け巡る。

一方、雪のほうはというと、怒りが静まったようだった。というより、逆にリラックスしていた。何故だかわからないけど……

「雪、髪が……」

驚いた表情で優奈が雪の髪を指差す。

雪は瑞希が指差す髪を掴んで、じっくりと見る。

水色……。

さっき氷が通ったところが水色に変わっていたのである。

「ど、どういうこと……」

雪が実果の髪を確認するが、まだ氷が頭に乗っている。驚くほどのバランスである。少なくても、色は変わってなかった。

「さて、冗談はこれぐらいにして……」

その類の言葉に、雪と実果の怒りの対象が再び類に変更された。いつもなら「パー」なのだが、今回はあまりにもムカついたので、二人は「グー」で類を殴りつけた。

そのようすを見て苦笑いを浮かべていた優奈の表情が一変した。そして、いきなり出口へと駆け出し、路地の壁にぶつかることなく、外に出て行ってしまった。

その優奈の予想外の行動に、部屋にいた全員が優奈が出て行ったドアの方をみる。

「なんだ？」

「まさか…また」

実果が、どこか嫌な予感がするというような表情で、優奈の後を追った。

「いったい……」

「弟さんですね」

「弟さんって、祐…くん？」

「祐くん実は……、自殺希望者なんです」

類と雪の疑問を瑞希が解いた。その疑問が解かれたとき、雪はもちろん、類までもが驚きの表情をした。

「ってことは、優奈が自らの霊力で、弟さんの自殺意思を察知したわけか？」

「たぶん……」

類はため息をつき、呆れた顔で雪を呼んで、出口へ向かった。

「仕事だ。行くぞ」

そう言って外へ出る。
類の仕事がまだ把握できなかったが、とりあえず弟さんの自殺を止めに行くということはわかったので、雪は瑞希に目で合図して、類の後に続いた。
外に出た雪が、ふと家のドアの上の方を見ると

『自殺相談所　霊の方はこちらからお入りください』

と書かれた小さな看板が掛けられていた。
赤いペイントで地面に向かって矢印が書いてある。恐らく、『こちら』っというのは、『地面』もしくは、『地面の下』という意味であろう。もちろん、地面には穴のような、下に繋がるものなどない。

「なんだろう、これ…・・・」

「おい！」

路地の向こうから類が大呼する。それに雪も振り返る。

「早く来い！」

「う、うん…」

類の怒鳴り声に急いでそこに駆け出す。
類と雪が瑞希の手を握った瞬間、３人は消えていった。

ＥＰ１－ＣＰ１４　自殺相談所　霊の方はこちらからお入りください（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP1－CP15　霊力と自殺（1）

高層ビルの屋上を見上げる実果と優奈。
そこに、突然上から襲い掛かる3人の人間。
この状況、どこかで見たような……

「おい、視点移動（アイポイント）さんよー。もう少しうまく移動できないのか？」

「すいません……」

理科室に続いて、ここでも同じことを繰り返す瑞希を皮肉な口調で叱った。
だが、瑞希のミスはこれだけではない。実は周りに人が結構いるのだ。幸い、ここは通勤区で、忙しい人ばかりだったので、見ているものは少なく、見たとしても、自分の疲れを言い訳に現実逃避している人がほとんどだったが。
男子1名と女子4名は、すぐに立ち上がった。
優奈が倒れている間もずっと、ビルを見上げていたので、雪もそれが気になって仰ぐ。

「あ…！」

雪が目を丸くして、思わず指を差す。
その声に他の3人も、雪が指差す方を見上げる。

「あ」

類だけが、驚いているのかわからない声を出す。

皆が見上げるビルの屋上には、今にも落ちそうな祐の姿があった。
無論、自殺をしようとしていることは、誰が見てもわかる。

「早く助けないと……」

雪が皆に言った言葉だったが、特に優奈に対しての言葉だった。

「いいの」

「え……？」

表情を変えずに拒む優奈の言葉に、類と雪だけが動じた。雪は思わぬ発言にあ然とし、類は優奈を軽く睨む。
そして、とうとう祐がゆっくりとビルから落ちてしまった。
それに周りの人はまったく気づいていない。
雪が思わず目を瞑る。

「あの子、あんたと同じで霊力を持ってるんだろ？」

類の質問に優奈がゆっくりと頷く。
それを確認すると、右手の親指と中指を口に軽く入れ、息を吹いた。

ピィーー

類の透き通った単調な指笛が街に轟く。
すると、不思議なことに、周りの人たちの動きがピタッと止まった。だが、今はそんなことを疑問に思っている場合ではない。

祐の寿命が徐々に縮まっていく。祐の死は確実なものと思われたが、死まであと1メートルというところで、落下がピタッと止まる。少なくても類の仕業ではなさそうだ。なぜなら、落下運動が止まったのは一瞬で、その後すぐに地面に落ちたからである。しかし、1メートル付近で落下運動をリセットしているので、落下による衝撃は1メートルで済んだのである。しかも、骨折もなさそうだ。まぁ、痛いことには変わりないが。

「祐！」

優奈が急いで祐の元に駆けつける。
その他の女子も急いで駆けつけるが、類はゆっくりと歩きながら向かう。

「祐…大丈夫？」

実果が躊躇(ためら)って聞く。それに優奈は一つ頷いて、

「…大丈夫。気絶してるだけ」

と今にも泣きそうな声で答えた。

「…今のは……」

雪の疑問ももっともではあるが、さっきまで静止していた周りの人間たちが再び動き出したので、類が口をふさいだ。
動き出した人々は、あれ？どうしたの？などと呟き、時計を見ては驚いていた。中には悲鳴を上げる者までいる。それも当然のことで、類が彼らを止めてから5分経っている。つまり、彼らは5分損したのである。時間が命のビジネスマンにとって、時間によるダメ

ージは殺人的なものだった。

「急いでここから退くぞ」

つまり、注目を集める前にこの場から逃げたいというわけである。騒霊現象(ポルターガイスト)などは認められているが、超能力、それも超自然的能力は認められていないどころか、(国民には)発見もされていないので、バレるとまずいのである。

しかし、この馬鹿な瑞希はそんなことお構いなしに、みんなを霊力で移動させてしまった。

ＥＰ１―ＣＰ１５　霊力と自殺（１）（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾―＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP1−CP16　霊力と自殺（2）

「おまえ、本物だな」

「？……実果…先輩、本物って何？」

隣に立っている実果に聞く。

「私は一様、この世に一人しかいない本物の瑞希だけど……」

実果は呆れた顔でため息をついた後、類に向かって首を横に振る。まじですか、という顔をしてしばらく俯(うつむ)いた。そして、息を吐いて正気に戻り、やや真剣な顔で、ソファーに横になるリクを見つめる優奈に問う。

「で、弟さんはどうして自殺を？聞くところによると、何回も自殺未遂をしてるらしいが……」

「……」

少し俯いて、手をひざの上に乗せる。

「祐は、学校でいじめにあっています。だけど、それだけが原因ではありません。…リクの能力を見たと思います。あれが一番の原因で、あれのせいでいじめられていると言ってもいいです」

「見たは見たが、あれだけなら、俺でもそいつの霊力はわからない。具体的に、どういう霊力だ？」

類が腕組んで補足するように言った。

「……一部の物体をひきつけない能力です」

「一部……」

「ナイフ、針、嫌いな人。自分に害を与えるものです。だから、祐は病気をしたことがありません。怪我も幼いときにしただけで、それ以降は一回も…」

それを聞いて類が納得した表情をした。

「なるほど…絶対防御（ディフェンス）か」

「ディフェンス？」

テレビの前に座る類の隣に立つ雪が聞き返す。

「ディフェンスと言っても、ただの防御じゃない。絶対防御（ぜったいぼうぎょ）と書いて、絶対防御（ディフェンス）と呼ぶ」

「絶対防御……」

実果と雪が同時に呟いた。

「絶対防御（ディフェンス）は、第６感を含む、知覚で危険だと判断したものに対し、防御反応を示す霊力だ」

「つまり……」

「つまり、ナイフを投げるとすると、絶対防御（ディフェンス）はそれを見るだけで、視覚がナイフを捉え、脳が危険だと判断すれば、見えないバリアを張ってくれる。自動でな。しかもそれは視覚だけじゃなく、嗅覚や聴覚といった、そのほかの感覚から危険を察知すれば、物理的外傷はもちろん、細菌やウイルスにも効果を発揮する」

「もしそれが人でもですか？」

瑞希がいつものように、無表情で聞く。

「……ああ。本能的、思考的に嫌いだと判断すれば、嫌われた相手は絶対防御（ディフェンス）に近づくことはできない」

類がやや俯きながら返答する。

すると、優奈が顔を俯けて立ち上がり、出口へ向かう。その姿を見て、涙を堪えていることは子供でもわかる。たとえ瑞希でも……やがて外へ出て行ってしまった。

「私なんか変な質問しました……？」

その瑞希の問に誰も答えなかった。

重い沈黙が続く。

そのおかげでやっと、自分が悪いことを言ったと理解した。だが、瑞希が悪い質問したというのは、類を除く、誰も知らなかったことである。優奈が出て行って雪と実果も理解したのだろう。どういう理由があるのかは知らないが……

「また、助けられたんだね……」

以外にもこの沈黙を破ったのは、優奈の弟、祐だった。

祐がゆっくりと起き上がる。そして、足を地面に運び、ソファーから立ち上がった。

「……どうして僕を助けたの？僕は死にたかったのに」

類は祐の言葉を聞いた途端、重くリクを睨んだ。

雪は気づいた。自分と同じ、だと。

「何言ってんのよ。あんたが死んだら……」

実果が説得するが、祐はまったく動じないどころか、無視して出口へと向かう。

「どこに行く？」

不快な笑みを浮かべて、嫌みたらしく言う。

「……あんたには関係ないよ」

「関係なくはないだろー」

不快な笑みを保って、椅子から立ち上がる。

「もうこの日本は、自殺を許せるほどあまくねぇんだ。お前のやっていることは、全国民……」

「うるさい！」

声に似合わず、大声で叫ぶ。

「あんたにはわかるか。触りたくても触れない気持ちが。何もできない気持ちが！」

やや俯いて、床に叫ぶ。

「この能力のせいで、僕は少しでも不安を感じたものや人に触れることができないんだ。２度と。そのせいで、友達もできない。それならまだいいよ…。だけど、この能力を利用して不満とか、怒りを僕にぶつけるやつがいる。僕はストレスを解消する道具じゃない！」

雪以外の者が共感できる話だった。
皆が霊力のせいで、祐のような同じ体験をしているのだ。類さえも。

「ねぇさんだってそうだよ。昔は明るかったのに、能力のせいでおとなしくなって」

「それはお前が、人をすぐ判断するからだろう？」

話が少し遅れている。

「そんなに霊力と付き合う人生が嫌なら……」

今の発言で、祐にとっては完全に類は、『嫌いな人』になってしまった。にも関わらず、祐との距離を徐々に縮める。
類が祐に手を翳す。

「来るな！」

類と祐の距離だと、確実に祐の絶対防御（ディフェンス）が発動しているはずだが、

なぜか類は、さらに距離を縮めていく。
そして、類と祐の距離はもうゼロに等しくなった。
類が大きな手で祐の頭を掴んで、リクの瞳を覗く。

「なら、俺が殺そうか？」

表情が危ない。つまり、本気で殺そうと思えば、殺せるような表情なのである。それは、雪たちも感じたことで、類から強烈な殺気を感じる。へたをすれば見えそうなぐらいである。
祐が類の青黒い瞳を覗く。というより、引き込まれていく。

気がつくと真っ暗な空間にいた。
どこまでもどこまでも漆黒に包まれた世界が広がる。
その中に自分の姿だけがはっきりと見える。

暑い……

身体（からだ）はそれほど感じてはいないが、なぜか脳がそう判断する。
ふと周りを見ると、青黒い炎に囲まれていた。
肌は暑いと感じないのに、気持ちが暑いと言っている。次第に『暑い』ではなく、『熱い』になっていた。
炎の勢いが増す。
それは形を変え、人型の炎↓炎の人間、つまり『炎人』になっていく。
炎人は祐にゾンビのように近づいてくる。
その青黒く、人の顔の皮膚を剥いだような恐ろしい姿から逃げたい。が、それが地面、というより下から祐の足首を掴んで動けない。
身体が震え、全身から恐怖の悲鳴を上げる。だが、動けない。

次第に炎人たちに体を完全に固定され、指一本動かすことすら許されなくなってしまった。
すると、目の前に巨大な火の塊が姿を現す。
それは雫の形をしていて、中心からやや下から、横に裂かれていく。つまり、口である。それが大きく開く。入ったら二度と出られないような、果てのない口だ。
その口の中から、無数の手が出てくる。生々しい、青い人の手である。それが、おいで、おいで、と誘っている。気味が悪いどころではない。もはや恐怖源だ。

近づきたくない。行きたくない。

だが、なぜか自分からそれに近づいて行っている。

いやだ。行きたくない！

気がつくと、炎人が自分の体から離れている。だが、身体は動かない。
手首足首を掴まれる。

助けて！

叫びたいがなぜか声が出ない。なぜなら、口内から出る手が首を絞めているからである。だが、不思議と苦しくない。それどころか、掴まれている、絞められている感覚すらない。
しかし、恐怖は増す一方だ。
突然、その手が死の入り口へと強く引っ張る。

いやだ。こんなのは……嫌いだ！

類が部屋の壁に思いっきり吹き飛ばされる。

「類！」

思わず雪が叫ぶ。

「僕にこんなものを見せるなーーーー！」

叫びながら、ドアへ駆け出す。
ドアを乱暴に開けると、例の壁ではなく、人にぶつかった。
優奈はぶつかってきた弟を思いっきり抱きつけた。
涙を流して……
　何も言わずただ、抱きついた。
だが、その優奈の気持ちを無視し、腕を払い除け、路地を抜ける。
優奈はそのまま俯いて、一度流した涙をまた、堪えた。

一方、祐の絶対防御（ディフェンス）によって飛ばされた類は平然とその状態を保って、何かを考えている。

「ちょっとあんた大丈夫！？」

３人を代表して、実果が気遣う。

「ああ。…だが、あんな強力とは思わなかったなぁ」

類がなぜ祐に触れられたかというと、簡単な話。類の１０の霊力

の一つ、思考共有（ジョイント）によって、一時的に祐の霊力を抑え付けたからである。

そして、その霊力で幻覚を見せた。

だが、それをさらに上回る霊力で、それを解き放ったというわけである。

「お前らはここで待ってろ」

そう命令して立ち上がる。

ドアの方に駆けていき、半端に閉じていたドアを乱暴に開く。

すると、人、優奈とぶつかった……という類ではない。

最初はぶつかりそうなって少し停止したが、涙を堪えている様子だったので、類にしては珍しく、気遣ってそのままスルーした。めんどくさかったのかもしれないが……

優奈は類がとおりすぎた後、家の中に入り、突然雪の目の前に立った。

「あ……優奈。類なら……」

「雪。お願いがあるの」

「え？」

雪はもちろん、実果と瑞希も一瞬驚いた。

ＥＰ１－ＣＰ１６　霊力と自殺（２）（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

ＥＰ１―ＣＰ１７　霊力と自殺（３）（前書き）

※すいません。優奈の弟の名前が途中から『リク』になっていましたが、正しくは『祐』でした。お詫びいたします。訂正してありますが、されていないところがあればご指摘ください。

EP1ーCP17　霊力と自殺（3）

「ったく、何処いったんだー」

走り疲れた様子で立ち止まる。

「あ……」

しまったっというような顔で自分の手を見つめる。
実は、類は祐に思考共有(ジョイント)を掛けっぱなしだったので、レイノが類の身体にいないのである。つまり、類の霊力の半分以上が使えないということなので、探索能力に欠けてしまう。よって、祐を探すのにそうとう時間がかかることになり、その間に自殺してしまうのではないかという、しまったっという意味の込めた「あ……」だった。

「めんどっ」

そうぼそっと呟いて、人影のない路地へと向かう。

ピィーピィー

単調なリズムの指笛が街に轟く。
すると、類の周りに多数の白い魂が姿を現した。

「霊体実体(サブスタンス)」

すると、白い魂はやがて人型へと変わった。そして最終的に、ど

っからどう見ても人間という形になった。

「え～とっ、そこの女」

「えっ……」

類は霊人間のなかでも、奥にいた一番かわいい女性を選択した。

「なんでうちがあんたなんかに……」

霊人間を掻き分けて、類の目の前に来る。

「あ、けっこうきつめだったのか……」

人選ミスか、と小さく付け加えた。

「それどういう……」

「すまないが、お前と雪や実果のような会話をする時間はない」

「はっ？ それ誰？」

霊のため色が判断できないが、とりあえず透き通った髪をいじりながら聞く。だが当然、類の耳には入っていない。

「名は」

その女性は、少し考えて、

「霊に、名前なんてないわよ」

となぜか拗ねた様子で言う。

「じゃあ、アンジェラな」

「はー！？うちはそんな名前じゃない！」

実は内心、かわいい名前…、と思っているのだが、つい照れ隠しで怒鳴ってしまう。

「とりあえず、自殺しようとしている『祐』って奴を探してほしい」

「えーー……まぁいいけど」

「じゃ、よろしくなっ」

そう言い残して路地を出た。

「ったく。私の名は火恩よ」

‡—†—†—‡

冬ということもあって、午後5時であたりは暗くなり始めていた。

「はぁ…はぁ、あーめんどっ」

類もあれからずっと祐を探しているようすで、息を切らし、顔に疲れが出ていた。

「おい！あんた」

突然類の背後に姿を現した、さっきの霊の女性、火恩が透けた手で類の肩を叩いた。

「見つけたか？」

「ええ」

「案外役に立ったな」

わざとらしく、ギリギリ火恩に聞こえる程度に呟いた。

「んだと～」

この程度の嫌みで怒っていては、俺によるストレスで死んでしまうだろう。こいつは俺とは合わないなどと、思っていた。まぁ、もしかしたら、死因はそうかもしれないが。

しかし、今はこんなことより、祐の自殺を阻止することを優先させるため、類は、

「冗談だって、ハハハハハ」

などとごまかした。

「ったく、次そんな冗談言ったら、一生あんたに協力しないよ」

どうせ一生なんてないくせに、と小さく、今度は聞こえないように呟いた。

幸い、聞こえなかったから良かったものの、相手が超耳が良いなんて霊だったら、リクを救えなかったところである。

「まぁいいわ。こっち、ついてきて」

その透けた女性、火恩は、類を透き通ってそのまま駆けて行った。類もその後を追う。

走って5分もしないうちに、車が多々通る大通りへ着くと、火恩が、あっち、と視野に入っているビルの中でも、一番高いビルの屋上に指差す。

だが、このビルが高すぎて、人がいることすら確認しづらいが、類の視力、1，7でぎりぎり顔認識ができた。

恐らく、視力が類並みでないと、ビルの屋上に誰かが自殺を図ろうなんて誰も気づかない。となりのビルの屋上から見て、やっと完全に確認できるぐらいである。

結果、この人が多い時間帯の通勤区であっても、自殺するところを見つかる、という確立は非常に低い。

しかも運悪く、類が着いたときにはすでに、自殺する寸前だった。レイノがいない類には何もできない。

「っち、遅かったか…」

だが、よく考えると、祐に絶対防御(ディフェンス)という霊力がある。つまり、どんなに高いビルから落ちても無傷で済んでしまう。

しかし、類の考えは違う。さっきも言ったように、レイノは思考(ジョ)接続(イント)のせいで、まだ祐の身体にいる。しかもその効果はない。なぜなら、祐の絶対防御(ディフェンス)によって、互いにそれを打ち消しあっているの

である。すなわち、祐の絶対防御(ディフェンス)も発動しない。
今、高層ビルから落ちれば、落下死、又は轢死(れきし)である。どちらせよ死ぬ。
レイノを呼んで、霊力を復活させるということもできるが、車の騒音などで、レイノには聞こえない。
まさに、絶体絶命という感じだ。
それは祐もわかっている。だからこそ、こうして自殺しようとしているのである。

祐がこの場所に向かうとき、赤信号で道を渡ろうとして、あと数センチというところで、車が急ブレーキをかけたのだ。
「あぶないだろが！」
その車の主の注意を無視し、自分の霊力が発動しない、という嬉しい気持ちで溢れていた。

とうとう死ねる。
そういう気持ちを抱き、ビルの屋上から数１００メートル先の地面に眠り込むように、仰向けにゆっくりと落ち始めた。
「さよなら……ねぇさん」
すると、突然、冷え切ったような冷たい感触が右手を掴む。
ゆっくりと目を開けると、見慣れた顔が目から涙を流して、その目で僕の瞳をずっと見つめている。

なぜか、僕の目も熱くなって、涙がこぼれる。
左手を今度は違う手が掴んで引っ張る。
再びビルの屋上に引っ張られた祐を優奈が思いっきり抱きしめた。

「お願い……死なないで…」

冷え切った二人の身体は徐々に暖かくなっていく。
その二人に、さっき引っ張っていた雪が近づいて、祐の顔を見た。

「私も同じだった。動機は違うけど。私も人生が嫌になって、自殺しようとした。…でも、あの類が私を助けちゃったの、死にたかったのにね。でも、類と出会って以来、あれから、楽しくって」

最初は雪の話をただ聞いていたが、次第に話に呑まれていった。

「生きていれば良いことがある。なんて、保障はできないけど、生きていれば、楽しいことは絶対あるとは、保障する。絶対。私だって、類と出会ってから楽しくなった。類と出会っただけで。なにかをきっかけに絶対楽しいことはあるよ。だから生きようよ！」

「そうだ」

恐らく、このビルの外階段から上ってきた類が賛同する。

「1秒1分先、もしかしたら楽しいことがあるかもしれないだろ？それが人生だ。なにが起こるかわからない。楽しいときもあれば、楽しくないときもある。その能力とうまく付き合えば、楽しいかもしれない。その方法も俺が教えてやる」

今まで抑えていた感情が涙として一気に流れた。

それを見て、雪と実果も貰い泣きする。
優奈に肩を涙で濡らす祐の元へ行き、しゃがみ込んで頭を撫でた。
「生きろ。皆のために、ねぇさんのために。そして、自分のために、な！」
そう言っている間に、祐の身体から、レイノを自分の身体に戻した。
祐の能力を復活させたのにも関わらず、類が吹き飛ばされてないところをみると、『嫌いな人』から抜け出したようだ。
祐は優奈の腕の中で泣き続けた。

‡—†—†—‡

あたりはすっかり夜になり、一同は類の家に集まっていた。
「ありがとうございました」
優奈が祐をおんぶして、類に深々と頭を下げる。
「当然のことをしたまでだ。俺の仕事だしな」
そのあと、雪にも頭を下げる。
「いいよ。私も当然のことをしたというか…」
雪が照れ笑いを浮かべる。

「弟さんのことも解決したことだし。もう俺の家には来るなよ」
できるだけさりげなく言ったつもりだが、まったくそうではなかった。
「え…！」
実果と優奈が同時に声を上げる。
あの感動の場でも、呆然としていた瑞希は、この場でも、何の話？などと考え込む。
「お前らには、霊力がある。その霊力で自分の身は守れるはずだ。弟さんには、強く念じれば、思い通りに操れると言っておけ。後、楽しいという気持ちを忘れるなとも」
類はドアを開けて、実果と優奈の方を向いた。
「くれぐれむも、警察との接触は極力避けろ。他の仲間たちにも言っておけ。あと、お前らが使ってるのは、能力じゃなくて、霊力ともな」
「類！どうして二人を……」
雪の言葉を察して、類が説明した。
「ここに来たことで、お前らに影響がきても困るからな」
「……」
「それにお前らにかまってる暇もない。こいつだけで十分だっ。ほ

ら、さっさと行け」

「先輩泣いてんの？」

瑞希が実果の顔を覗きこむ。

「な、泣ぁいでぇ…なぁんか…ないわぁよぉぉ」

誰がどう見ても泣いている。
それに続き、雪までも泣き出す。

「泣くなよ。別に一生合えないわけじゃない。ここに来るなと言ってるだけだ」

「だがぁら…泣ぁいでぇなぁい」

必死に涙を堪えているが、泣いているものは泣いているようにしか見えない。
４人は重い足を引きずって、外へ向かう。

「じゃあね」

雪が涙を堪えて手を降ると、あっちもドアの向こうで手を振り返した。

パタンッ

類が軽くドアを閉めた。

「あの！」

優奈がもう一度、ドアを開くと、そこはただの空き家になっていた。

「……ありがとう」

ＥＰ１－ＣＰ１７　霊力と自殺（３）（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます＾－＾

これで《ＥＰ１　霊力》は完結です。

ＥＰ２は戦いに入っていきます。

　１月いっぱいは、受験のため更新はできないと思います。ご了承ください。

　次章もよろしくおねがいします。

ＥＰ２－ＣＰ１８　人体と魂

Ｅｐ２　霊力者達

「次はどうする？」

「俺がやる」

「まただらだらしないで、早く帰ってこいよ」

「……」

「一応言っておくけど、このあたりにいる精霊（スピリット）力者は強いらしいぜ」

「心配無用だ。殺す気はあっても、戦う気はない」

「じゃっ、俺は待ってるから、早く来いよ」

「……ああ」

‡—†—†—‡

雪は相変わらず制服で、類の家らしき場所にある、ブルーのソファに腰掛けていた。どうやら、ファッション雑誌でも読んでいる

らしい。

「ほら」

そのとき、類がいつもの気が抜けた声で、小汚い巾着袋をテーブルの上に投げつけてきた。

「……何？」

閲覧中を妨害されたことにイラだっているのか、不機嫌そうな目つきで類を見る。

「給料」

「……」

しばらく黙り込んだ後、無言でそれに手を伸ばし、中身を見る。

「……」

その中に入っていたのは、たったの１００円。給料と言われ、期待していたということもあり、雪は何も言わず項垂(うなだ)れた。

前回の『氷』事件以来、水色になってしまった部分を含む前髪をかき上げ、頭を上げたと思ったら、眉をつり上げ、怒る準備万端という感じになっていた。

本当に喜怒哀楽の激しい少女である。

「……これ何？」

だが、その気持ちをやや抑え、表情を一段階下げ、不機嫌な表情

で問う。
「給料」
最初の言葉とまったく同じ調子で答える。また、ずっと表情一つ変えないというところが腹立たしい。
「たったこれだけ……？」
雪の表情が徐々に元の怒る準備万端という顔に戻っていく。
だが、それはすぐに収まった。なぜなら、このお金を理由を考えてみると、心当たりがなかったのである。つまり、怒る理由はないということに気が付いたのだ。
「給料って……私何かした？」
「仕事」
「仕事？」
ここに来てやっと、類が表情を変化させた。だがそれは、不快な笑みだったが。
「お前がここに存在することによって、誰かが侵入したとき、お前の殺人的超音波によって、誰かが来たってことがわかるだろ？」
もちろん、殺人的超音波とは、街中に響き渡る雪の叫びのことである。
「あんたって冗談好き？」

類がコクっと頷く。

「だが、今のは冗談じゃないけどな」

いつものビンタを食らわせようと思ったが、その怒りをなんとか抑えた。

「3分の1って言ってたわよねー？」

「ああ。今月は300円だから、それに3分の1掛けて……100円だろ？」

「それも冗談？」

「俺は金関しちゃ、冗談は言わん主義だ。だいたい、300円でも多いほうなんだっ。0円なんてときもあるしな」

「どういう仕事がそんなに稼げないんですか……」

「いろいろ複雑なんだよ。この仕事は……」

しばらくの沈黙の後、雪が話しを切り替えた。

「……仕事といえばね類」

手に持っていた雑誌をソファーに置き、さっきと違って真剣な目で類を直視する。

「私、類と仕事がしたいの」

「はぁ……」

突然のことでさすがの類もあ然とする。

「こんな冗談じゃなくて、類みたいに自殺をしようとしている人とか、自殺して困ってる霊を助けたいのよ」

「……」

「私、祐くんが自殺しようとしているのを見て思った。本当に苦しいんだって。私も同じだったからわかるの、自殺したいっていう気持ちが。でもやっぱり、命を無駄にするなんて考え方が間違ってるって気づいたの。だから、そういう人たちを救いたいのよ！」

正直類は戸惑っていた。雪をこのまま一生、正義の暗殺者（キラー）から守るからといって、この状態にしてはいけないと前々から思っていたのだが、その解決法が雪に霊力を身につけさせるという考えだった。だが、霊力というのは、思っているほど苦しいものなのだ。雪が望むのなら構わないが、リスクを伴う。

「……本気か？」

類も真剣な表情で雪を見る。それに雪も頷く。

「俺の仕事は、お前が思ってる以上に危険だ。命を落とすかもしれない。……それでもか？」

「ええ」

雪の同意を確認して、一度目を瞑って「わかった」と類も同意した。

「じゃあお前には、これから時間を掛けて、霊力を身につけてもらう。ただし！辛くても途中でやめたりするな。そして、やるからには、仕事はちゃんとやれ。いいな？」

「うん」

雪の返事を聞いた瞬間、硬くなっていた表情を瞬時に緩め、元のやる気のない顔に戻った。

「はぁ～。じゃっまず霊力について説明するからよく聞けよ。まず霊力とは何かというとだな、というよりまず、人体と魂について説明してやる」

「ねぇ、魂って存在するの？」

「お前それ、宇宙人は存在して、UFOは存在しないって言ってるようなもんだぞ」
「……意味わかんない」

こいつ馬鹿だ。

「まぁいい。人間はひとつの魂じゃなく、複数の魂の集合体で出来てる。その魂の一つを離脱して…」

そう言って、右手から銀白のオーラが吹き出して、球状にした。

「身体の外へ出す。そうすると、魂は一瞬で青から銀色に変わる。これを『霊化』という」
まるで、先生が生徒向かって教える口調で説明した。
「じゃあ、澪さんが類を生き返らせるときに出てくる変なのとか、レイノっていう幽霊はどうして白？」
「あれは『死魂』って言って、いわば、死んだ魂だ」
「あ……そうなの……」
今の発言は、あの時類は本当に死んでいたという証言になった。
「で、この霊化した魂、又はその攻撃を霊力というわけだっ」
「霊化ってする意味あるの？」
類は呆れた。
今の質問は一般的に妥当と考えていい。だが、類にとっては当然という質問だった。
「はぁ～。じゃあさ、お前、霊についてどういうイメージがある？」
雪は手を後ろに組んで、考えながら答えた。
「人を脅かしたり……殺したりする……かな？」

「どうやって？」

「それは……金縛りとか、操ったりとかじゃないの？」

「まぁそうだ。そのほかにも、色んなことができる」

「例えば？」

「己を実体化する。憑依する。物を燃やす。とかほぼ無限にある。その霊の能力が霊力で、それは霊化しないとできない」

「え！じゃあ、類の変態能力も、実果とか優奈が使ってたのも？」

「そっ」

ここまでの類の話を聞いて、やっと霊力について完璧にわかった、と思ったのだが、まだ続きがあるらしく、また話を続けた。

「霊力はなんでもできる……が、一人1つから2つまでが限度で、基本的に同じ霊力を持つ者は存在しない。似たようなものがあっても、それは微妙に違う」

「じゃあ類は？」

「俺は天才だからな。例外」

あまりの自意識過剰な発言に雪は呆れ、再びソファーに腰を掛けた。

「テレビでやってる、超能力者っていうのも、それ？」

「いや。霊力と超能力は違う。超能力は、脳の異常覚醒によってできることで、皆が使えるというわけじゃない。だが、霊力は条件を満たせば、誰でもできる」

「えっ、私にも？」

「当然だ。じゃなきゃ、お前に霊力を教えようというめんどいことはしない」

さっきの怒りが徐々に甦り始めたが、それを出来るだけ抑えた。

「それで、その条件って？」

「第6感・発想力・忍耐・知識・念。幸い、お前には、弱いが第6感がある。俺が霊体実体（サブスタンス）をしなくても、レイノが姿を現せば、魂が見えるんだろ？」

意味は今一わからないが、とりあえずレイノが見えるのか、という確認をしていることはわかり、コクっと頷いた。

「それで、一つの条件はクリアだ。次は発想力だが……」

「何よっ」

類があまりにも、不快な目つきでこっちを直視してくるので、思わず顔が不機嫌な表情を浮かべる。

「……おまえ、発想力……ないなっ」

「なっ、あ、あるわよ！」

「いやいやいや、ないっ。ないって顔してるし」

「どういう顔よ！」

「トイレに行って、鏡見て来い。そういう顔してるから」

今にも怒りが爆発しそうである。次、なにか言われたら、ドメスティックバイオレンスでも起こしそうな勢いである。

「そんなに言うなら、テストをして、合格したら認めてやる」

「テスト？」

ここまで雪と話をして、一歩も動いていなかった類が、地下に繋がる階段側の隅にある本棚の方へ初めて足を運んだ。

その２００ｃｍもある棚の上に置いてあった、紙切れを１７９ｃｍの長身で、楽々とそれを取った。

その紙には何か、陣らしきものが書いてあった。

「なにそれ？」

「まぁ見てな」

そう言ってテーブルの上に紙切れを置いた。

ＥＰ２－ＣＰ１８　人体と魂（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます＾－＾

今回は少し時間があったので書きました。

１月は更新速度が遅いかもしれませんが、これからもよろしくお願いします。

ＥＰ２－ＣＰ１９　無限の発想力

「呼ノ陣」

そのテーブルに置いた紙の上に手を叩きつけた。
突然のことで驚く雪の目の前に、陣が消えると同時に一人の少年が姿を現した。
その少年はレイノのように透けていたが、表情も読み取れ、どっからどう見ても人間という姿をしていた。けど、紙からニョロっと出てきたので、雪から見ればそれが人間ではないということは明らかである。
すると、その少年は被っていたシルクハットを取って、右脇に挟んでいた２冊の本と同じところに挟み、

「どうも」

と丁寧に一礼した。
雪もそれに条件反射で軽く会釈した。
雪の会釈を確認したあとすぐに、類の方に素早く振り向いて睨みつけた。
天井の明りが反射して、メガネがキラーンっと光っている。
「あなたには助けられましたが、いきなり呼び出されては困ります。僕も僕で忙しいんですっ」
すると類は鼻で笑い、不快な笑みを浮かべたあと、嫌な目で睨みつけた。
「そんなこと言っていいのかー？　学（まなぶ）。契約、切ってもいいんだぞー」

「うっ……」

どうやら、類はこの学という少年の弱みを握っているらしい。

学は、再び類を強く睨んだあと、１５０ｃｍ弱の小柄な身体に似合わないスーツの中から、懐中時計を取り出して、時間を確認したあと、ため息を一つついた。

「それで、何のようですか？」

その言葉を待っていましたっという顔で笑みを浮かべる。

「そいつの発想力を試すテストと、その訓練をしてほしい」

「それだけですか？」

「ああ」

学はテーブルから降りて、雪の前に立ち、手を伸ばした。

「僕は学です。よろしくおねがいします」

「わ、私は雪です……。よろしくおねがいします」

お互いに挨拶を交わしたあと、類がテーブルとテレビの間にある、一人専用のソファーに腰を掛けた。

「じゃっ、さっさと始めてくれ」

「はい」

そう返事をしたあと、軽く部屋の同じところ往復する。
「では雪さん、問題です。あなたは今、直方体の箱の中にいます。その箱はあなたのサイズにぴったりの箱です。一歩も歩くことはできません。さて、この状況であなたが出来ること。又は、これから起こりうることは、全部で何パターンあるでしょうか」
その問題を聞いて、類は鼻で笑った。
雪はというと、真剣に深く考えている。
普通に考えれば『０』。けど引っ掛けという可能性もあるし……といった具合である。

「１！」
「不正解です」
即答させてしまった。
「やっぱりなかったな。発想力」
「じゃあ、類はわかったの？」
「ああ。無限だろ？」
「正解」

はぁ！？……

「僕は、あなたが箱に閉じ込められるとは言いましたが、どこに箱があるとは言っていません。道路だったら、轢かれるかもしれませんし、冷蔵庫だったり、刑務所だったり。はたまた宇宙だったりっと可能性はさまざまです。つまり、場所だけで無限。そこで起こりうる出来事がさらに無限です。よって答えは『無限』。又は『X』となります」

なんとも曲がった正答だが、言っていることは正しい。

「というわけで、僕はこれで……」

「おいっ、待て」

透けているスーツの襟を掴んで、学の移動を阻止する。

「どこへいく？」

「明日あたりにまた来ますから、今日はこれで！」

そうあわてた様子で、ポンっと消えていってしまった。

「なんだったの今の……」

目を丸くした様子の雪が、類に確認をとる。

「学か？あいつは俺の……なんていうか、あれだ。ん〜滞在者というか、なんというか」

「さっき、契約とかなんとか言ってたけど？」

「ああ～、あれは、あいつの推薦状を出すという代わりに、霊界(あっち)のジャッチを待つ間、俺の言うことを聞くって感じの関係か……な？」

「それって奴隷ってこと!?」

「言い方悪いな～。せめて召使いと呼んでほしいものだな」

とりあえず、学は類の言うことを聞かないといけないという哀れな状況ということに変わりない。

「あんたって最低ね」

怒るというより、呆れたという言い草だったが、どこか本気ではないような言い方でもあった。

少しは俺のことがわかってきたようだな……

類は雪の顔を見て、笑みをこぼした。

ＥＰ２－ＣＰ１９　無限の発想力（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP2ーCP20　謎の男

ドンドンドンッ

突然、ドアを強く叩く音が部屋に響いた。
類が一つため息をついて、ドアの方に足を運ぶ。

「はいはい、今開けますよ〜」

ドアを開けると、類ぐらいの歳の青年が、汗だくで慌てた様子で類の肩を掴んできた。

「ハァハァ……助けてくれ。あんた、悪霊退治……やってるんだろ？」

「……そうですが」

めんどくさそうに言うが、類には珍しく丁寧な言い方だった。

「会社に……変なのがいるんだ」

「変なの？」

「口が5つもあって、目がない……ば、化けもんだ……」

それを聞いた雪が、ソファーから立ち上がって、類の後ろに立って本格的に話を聞く姿勢になった。

「だが今は8時だ。会社への侵入はできないはずだが？」
確かに、今は午後8時過ぎたという時間帯なので、通勤区のシステム上、会社への侵入はできない。
「俺は、会社連立の管理官であると同時に社長なんだ！」
『社長』という言葉に、二人は動揺した。と言っても雪は、こんなに若いのに社長なんだ~、と思っており、類は、なるほど社長か~。金がもらえそうだな、と言ったぐあいである。
「じゃあ、あんたが会社を最後に出たところに、偶然遭遇したという感じか……わかった。助けてやる」
「あ、ありがとうございます」
一瞬喜びの笑みを浮かべて、深々と頭を下げた。
「行くぞー、雪」
雪を引きつれ、路地を出ようとする。
「あのー場所は……」
「知ってるからいい」
そう言って、青年の視界から完全に消えてしまった。
「……え？」

‡—†—†—‡

コツコツと類の茶色の革靴の足音が真っ暗な廊下に響く。

「なんで私も来なくちゃいけないの？」

一方雪の靴はスニーカーなので、足音はさほどしない。

類は雪の話を普通に無視する。

「ねぇ、疑問なんだけど、さっきなんであの社長さんは、類が悪霊退治やってるってわかるの？」

「お前……馬鹿だろ？」

「はっ？」

「宣伝してるからに決まってるだろっ。宣伝しないで金になる仕事がどこにある」

「でもそんなことしたら、警察とかにバレるんじゃ……」

「霊力者（サイキック）を通しての口コミだから、その心配はねぇーよ」

「じゃあ、あの社長さんも？」

「まぁ恐らくな。だが、自分で悪霊を倒せないとなると、弱い霊力だと思うが……」

「ふ～ん」
しばらく歩いていると、類が回りの殺気に気づき、足を止めた。
「どうしたの？」
「こっちだっ」
そう言っていきなり、雪の手を掴んで、すぐそこの部屋の中に連れ込んだ。
「な、何！？」
「お前はしばらくそこでじっとしてろ」
乱暴にドアを閉めると、類のコツコツと廊下に鳴り響く音は、やがて小さくなって消えてしまった。
　ひとり取り残されてしまった雪は、部屋の中を観察……ではなく、窓から射し込む月明かりを頼りに、電気のスイッチを探索することにした。
それは以外に近くにあり、カチッと音と共に明りがついた。
部屋は思っていたよりも広く、そのわりには、オフィスデスクが少なかった。
　雪が部屋の中央に来たその時！突然部屋の明りがパッと消えてしまった。
「な、何！？」
急いで再び明りを点けにいこうとした……が、それは背後から襲

ってくる殺気によって阻まれてしまった。
霊感に鈍い雪でもわかるほどの嫌な気配というか、殺気は、雪の身体を完全に縛った。

逃げたい……

しかし、恐怖によってそれは許されなかった。

「……こんなときに……類はなにしてんのよっ」

襲い迫る恐怖に耐え、震えた声で類に助けを求めた。
当の類はというと、なぜか雪のいる部屋のすぐ下の部屋で、うろうろしていた。

「おかしいな……霊気が消えた」

つまり彼は、霊気というものを頼りに、ここに来たわけだが、どこにも悪霊の姿が見当たらないので、悩んでいたのである。
しばらく考えた後、突然なにかを感じたように、一瞬驚きの表情を浮かべ、急いで部屋を出た。
類がそうしている間に、完全に雪には死が迫っていた。
さっきの若い社長さんの言っていたとおり、それは、黒くて丸い物体の真ん中にデカイ口が一つ。その上下左右に小さい口がひとつずつある。目はない……と言いたいところだが、実際は大きい口を取り囲む小さい４つの口の中に存在し、瞬(まばた)きをしているように、開いたり閉じたりしていて、よりその恐ろしい姿を増している。
恐怖で動けない雪に向かってゆっくり、浮遊している状態で近づいていく。

どうして動かないの……

雪の表情は恐怖というより、焦りの表情のほうが強くなっていた。
彼女自身は、動けないのは恐怖のせいだと思っているのだが、実際はあの４つの眼によって、金縛り状態にあっていたのである。
雪の額から汗が流れ落ちる。
殺されるなら、さっさと殺してほしいのにも関わらず、この悪霊はノロノロと、まるで雪の恐怖と焦りを楽しんでいるかのように近づいてくる。
そしてとうとう、その恐怖から逃れるときが来た。
その悪霊は雪の目の前にまで近寄り、大きい口をいっぱいに開いた。その口の中の正体は眼ではなく、腕だった。
口の奥から伸びてきた2本の腕は、雪の首に一直線に向かい、ガッチリと捕らえた。

「うっ……」

どんどん口の中へと引きずり込まれていく。

もう……だめだ……

雪がそう思ったそのとき！突如上から降ってきた刃によって、その腕は切断され、その反動で雪はその悪霊から離された。

グサッ

その音が聞こえた数秒後、悪霊は徐々に透けて、最終的に完全に

消えた。
その消えた悪霊の背後には、暗くてよく見えないが、人影があった。
月光に当たっている髪が紫なことから、類ではないと確信した。あと男ということも。
悪霊を殺した↓が、類ではない↓誰？↓左手に変な鎌を持っている↓私を殺せる？↓殺せる……↓逃げる？↓無理↓とりあえず距離をとる、という思考順序でゆっくり後ろへ数歩退がる。
「わっ！」
数歩退がりすぎて、椅子の足に足を掛け、お尻から床に転んでしまった。
それと同時に、その人影がこちらに向かってくる。

殺される！

雪は再びを恐怖を感じたが、意外にも手を差し伸べてきたので、恐怖感が吹き飛んだ。
少し戸惑いながらも、その人の手を取った。とても冷たかった。
「きゃっ」
突然、その手が強引に引いたため、その人の胸に飛び込み、抱きついた状態になってしまった。
「雪！」

聞き覚えのある声で呼び、部屋のドアを乱暴に開けて入ってきた。
そして、部屋の明りを点ける。

「あ……」

雪と類が同時に声を上げた。
最悪のタイミングである。

「ち、違うの類。これは——」

雪が慌てて、その問題の彼から離れたが、もう遅かった。

「いや、いいんだ。俺は何も見てない。悪かったな二人の時間を邪魔して」

類がわざとらしく、片手で目をふさいだ。

「だから、違うだってば！」

そんなこと言ってももう手遅れだった。雪は既に、類の冗談という術中に入ってしまったのである。

「まさか、あの子があそこまで欲に飢えていたとは……」

嫌味たらしく、雪にぎりぎり聞こえる程度の小声で呟く。
類の冗談に利用されている彼のほうはというと、無表情でただ立ち尽くしている。
さっきまで紫に見えていた髪の色は黒くなっている。というよりは、実際は紫だが、光の当たり方によって黒にも見えてしまう。
服装はその髪と同色の黒のフード付きローブに、ただの黒いズボ

ンに黒い靴という、真っ黒い服装だった。

「はぁー。そろそろこの冗談にも飽きてきたな」

類の誤解を解こうとしている雪を楽しむ類は、その彼に気づいて、その冗談を切り上げた。

うっ、またやられた……

雪は悔しい表情を浮かべると、黙って部屋から出て行った。

ＥＰ２－ＣＰ２０　謎の男（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP2ーCP21　霊心理解（メンタルスタンド）

その後、類たちは会社を出て、類の家に帰る途中だった。

「名は？」

「神月光（かんづきひかる）」

「俺は類だ」

「私――」

「お前はいいいっ」

類が雪の顔ごと掴んで、突き飛ばす。

この通勤区は相変わらず、この時間帯はまったく人の姿が見当たらない。なので、車道のど真ん中を、光のような黒いローブを着た怪しい人が歩いても大丈夫なのである。

「ところで、あんなところで何してたんだ？」

「……」

動じることすらせず、ただ黙々と歩き続ける光。

「……明日まで、お前の家に泊めて欲しい」

突然言葉を発したと思えば、まったく話を変えてくるので、類は

ため息をついて、

「まぁ……いいけど」

と答える。

しばらくの沈黙のあと、類が突然口を開く。

「……は！？……ガス？……イグニッション……爆発！？」

側（はた）から見れば、危ない人である。当然、雪もそれを見て、心配そうな目で類を見つめる。光はというと、それでも黙々と歩き続ける。

「類……大丈夫？」

「はっ？……あ〜そっか、お前には見えないんだな。……あんたはどうか知らんが」

「見える。が、言っていることはわからない」

単調に早口で答える。

「こちらの霊子さんによるとだな、ガスタンクの近くで遠隔発火（イグニッション）が自殺をしようとしているらしい。俺はそいつを今から止めに行くが……お前らも行くか？」

雪は「うん」と頷くが、光はしばらく硬直して、しばらくの沈黙のあと、「行く」と答えた。

そして、類一行は、その爆死を図ろうとしている子から約１０ｍというところで、様子を覗っていた。

その子は会社近くのガスボンベの横に、震えながら立っていた。

「あの子？」

「ああ」

その容姿は高校生。だが、それにしては背が小さい。ではどうして、高校生ということがわかるというと、赤を基調とした制服を纏（まと）っているからである。

正直類は、あの制服は見飽きたと思っているが、自殺者を放っていくわけにもいかない。

「ねぇ、どうしてこんなところで身を潜めないといけないの？」

「あいつに無闇に近づけば、大爆発しかねないからな」

「……どうして？」

「お前なぁ、もう少し自分の頭で考えることをしろよ。何でもかんでも、どうして？じゃっ、脳が退化するぞ」

「はいはい、悪かったわね『バカ』で。……って、どうして？」

「はぁ〜。あいつが遠隔発火（イグニッション）だからだ」

「イグニッション？」

「放出型霊力の一種で、基本、燃やせるものはすべて発火させることができる霊力だ」

「それって、『発火現象』ってやつ？」

「いや、遠隔発火（イグニッション）は発火現象（パイロキネシス）とは違って、自在に発火させることはできない。燃えるものだけだ。人とかなぁ」

さりげなく、不安にさせるような発言が聞こえたが、聞き流した。
つまりは、遠隔発火（イグニッション）は燃えるものすべてを発火させることができ、それは気体でも例外ではなく、そのガスボンベのガスを発火して、爆破させることだってできるというわけである。
無論、それを阻止できなければ、類たちも木端微塵（こっぱみじん）である。
それを理解したように、雪の表情が堅くなる。光は予想通り無表情だった。

「で、でも、このままじゃ、私たちも死ぬかもしれないんじゃ……」

「まぁ、その前に俺が阻止するから安心しろ」

「どうやって？」

「霊力放出（バースト）で、あいつの脳内に潜入した後、霊力で運動神経を鈍らせると同時に、思考能力を低下させ、潜在（ハイド）能力と空中浮遊（フロート）で──」

「あーもういいよ」

「なんだ、説明したら拒否するし、しなかったら追求する。一体お前は俺に何を求めてるの？ったく」

まったく類の言う通りでもあるが、わざとらしく早口で説明したので、理解できないのも納得だった。
類は、改めてその例の子のほうに向きなおして、手を翳（かざ）した。

「霊力放出（バースト）」

銀白のオーラがその子に一直線に飛ぶ。

丁度そのとき、その子がガスボンベに触れようとしている瞬間だった。

「思考共有（ジョイント）」

だが、その動きは今の類の台詞と同時にピタッと止まった。

「ま、間に合った～」

雪が一安心している間に、目の前にいた類の姿が消えていた。

ふと、その子の方を見ると、類がその子の手を抑えていたのである。

「い、いつの間に！」

スピード的に、１０ｍ１秒というところであろう。

「離してよっ」

甲高い声を上げ、必死に抵抗しているが、その力は弱いようで、類もあまり力を入れていないように見える。

「火憐（かれん）」

「！」

その子の抵抗が止まった。

「あなたは人に迷惑を掛ける子じゃないわ」

類の口から、優しく透き通った声が聞こえてくるが、それは類本人の声ではなかった。もっと詳しく言えば、その子、つまり火憐の母親の声だった。

「生きて。生きるのよ火憐。苦しくても、辛くても、それを乗り越えるの。母さんも助けてあげる。だから、母さんを悲しませるようなことはしないで」

「お、母……さん？」

「生きて」

それが最後の言葉だった。

火憐はそのまま地べたに座り込み、悲泣した。

問題解決を図った光がゆっくりと、類のほうへ足を運ぶ。

類の行動をじーっと見ていた雪が、それにハッとなって、光を追い抜いて、類の方へ駆ける。

ゴホッ、ゴホッ

「大丈夫っ？」

雪は類がひどく咳き込んでいたので、背中をさすってあげた。

「あー、こんなにきつかったっけか……」

元の気の抜けた声に戻った類が、雪の肩を借りて姿勢を整える。

「それより、その火憐って子を―」

雪が火憐の方を見ると、まだずっとうずくまって泣き叫んでいた。

「……大丈夫？」

火憐はコクっとひとつ頷いて、立ち上がって涙を拭いだ。

「……ごめんなさい。迷惑かけて」

「どうして自殺しようとしたんだ？」

「あなた……超能力者ですよね？」

類は正直に頷いた。

「お前が自在に物を燃やせること……」

火憐はその言葉を理解して、

「じゃあ、話します」

と承諾した。

「……この変な能力に嫌気がさしちゃって、死のうと思ったんです」

小学生のような声が耳に響く。

「私の学校は、全然私みたいな人がいなくて、ずっと誰にも言わず

に隠してきたんです。……だけど、たまに勝手に出ちゃって、火事になりかけたことだって……。それで――」

「――自殺を図ったと。まぁ、わからなくもない。俺だってそういう時期があったしな。だが、母さんも言ってたろ。もう死のうなんて考えるな」

「……うん！」

　さっきの顔が嘘のように、明るい表情で元気よく返事をした。

「ありがとうございましたー」

　雪は手を振り返した後、先を行く類たちの元へ駆けていった。

「ねぇ、さっきのは……」

　類達に追いついた雪が質問した。

「霊心理解（メンタルスタンド）」

「メンタルスタンド？」

「……霊の気持ち、言葉がわかる、俺の基本霊力の一つだ。さっきの場合は、母親の霊を憑依（ひょうい）させただけだ」

　普段以上にだるい声で喋り、表情も疲れきっているように見える。

「ねぇ……大丈夫？」

「……あ、ああ」

とは言ったものの、憑依させるだけで、こんなにくるとはなぁ。まぁ、ここ最近は、霊力を使い過ぎたかもしれんが……。いや、それだけじゃない気がする……だぶん。

「やっぱり、霊力者って大変なんだね」

「ああ。自殺者の2割が霊力者と言われてるほど、霊力を持つには、強い精神力を要する」

たかが2割ではない。元々、霊力者自体が少ないので、2割というのは非常に多い。

「お前もその覚悟があるんだろ？」

「うん！」

類は軽く鼻で笑った。

‡—†—†—‡

「これを受け取ってください」

類の家で待っていた若手社長の手には、悪霊を倒した報酬の札束があった。まぁ、一枚千円の札束一つだったが。

「おお！」

雪は当然のこと、類までが唸りを上げる。

「どうもっ」

類は失礼にも、その札束を熊が鮭を獲るような勢いで取ると、超高速で数え始めた。

「ざっと、10万円ってとこか」

え〜っ。もっと期待してたのになぁ〜

ただあの部屋で突っ立っていただけで貰えるだけでもありがたいというのに、この欲張りな貧乏少女はまだ物足りないらしい。

「なんだ、これじゃあ全然少ないじゃないかだって？」

「ああっ、い、いや、ち、違うんです。わ、私そんなこと、これっぽっちも……」

思考共有（ジョイント）によって、雪の心を読んだ類が、わざらしく雪の顔を見て、不快な笑みを浮かべる。

「ありがとうございました」

礼を述べたあと、若手社長がドアを優しく閉めた。

「もー、類！危うく報酬がパーになるとこだったじゃない！」

「まぁ、いいじゃないか。5万も足して貰ったんだし」

ソファーに寝そべって、再びお札を数え始める類。

「そうそう、お前はこのソファーで一晩を過ごしてくれ」

「……わかった」

「じゃ、おやすみっ」

そう言って、その場でわずか5秒で爆睡。恐るべきスピードである。

「……」

自分で言っておきながらも、自分がそのソファーで寝ているので、光は地下のベットで寝ることになった。まぁ、これももしかしたら、類のささやかな優しさかもしれないが。

ＥＰ２－ＣＰ２１　霊心理解（メンタルスタンド）（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます＾－＾

誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。

次話もよろしくおねがいします。

EP22―CP22　お風呂

「あ〜、最近面白いの、やってないなぁ〜」

　翌朝、一番早く起きた――と言っても、朝11時――雪が、類愛用のソファーでテレビをつけての感想だった。

　結局昨日は、類は愛用のソファーで、雪と光は、地下で寝たのだった。

　光はというと、たぶんまだベットで寝ている。『たぶん』と曖昧なのは、朝、光の姿を見ていないし、寝ているという確認もしていないので、予想である。

　類の方は、朝ソファーにもいなかったことだけで、外出したと決め付けた。というか、実際類がどこへ行ってなにをしようとどうでもいいことなので、そんなに気にしなかった。結果、類の居場所は知らないという結論にたどり着く。

　雪は、全チャンネルを一通り見た後、テレビをプチっと消して、ソファーの背もたれに、ため息をしながら思いっきりもたれかかった。

「はぁ〜、軟禁って結構暇。類もいないし……あ！」

　雪は起床時間10分で類がいないことに気づいた。と、その時、類愛用のソファの斜め向かいにあるキッチンの奥から、なんと類が現れた。

　突如現れた類は、タオルを腰に巻き、上半身裸。つまりは、風呂上りという格好でこちらに向かってくる。さらにその証拠として、髪が濡れ、特徴的な斜め4方向だけの長い髪の毛が垂れていた。

「な……あんた、どこから来たのよっ。……それ以前にその格好…

「……」

「いやっ、誰がどう見たって風呂上りだろーが」

「いやいや、誰がどう見たって変態よっ」

雪の言うことも一理ある。

「だいたい、風呂上りって言ったって、どこにそう呼べるものがあるのよ！それ以前に、どっから湧いたのよっ」

「湧いたって、俺は虫ですか？」

「だってそうじゃない。出入り口もない、誰もいなかったほぼ密室に近いキッチンから、突然、タオルを腰に巻いた上半身裸の変態が出てきたら、それはもはや人間ではないと思っても変じゃないと思うけどっ！」

「出入り口もない？何言ってんだ。通路なら、あそこに——」

「え！？」

類がキッチンの奥の方を指すので、そのほうへ急いで向かうと、なんと、突き当たり左に廊下があるではないか。

その廊下の一番奥にドアがひとつ、左側にも一つあった。

前々からこの家の構造に疑問を持っていた雪の謎が解決した。と同時に、この家の新たなる謎が生じた。

「なんで、このこと——」

「教えなかったかって？　それはお前の好奇心のなさと、推理力のなさのせいだろ。俺のせいにすんな。だいたい、『ここってなんでドアがないんだろう』と思ってんだったら、少しは自分で調べるか推理しろっ」

つまり、この家は玄関から見ると、『L』字型になっている。外見は四角形なのに、中の構造がL字型はおかしい、と雪は前々から思っていたのである。だったら自分で、そこに繋がるドアを探しだり、推理しろ、と類は言っているのである。

まぁ、キッチンの奥に通路があるなんて、人の家のキッチンをお構いなく物色するよっぽどの失礼な人か、設計者でもない限りわかるはずがない。その設計者は誰かと言えば、だいたい予想はつくが……

「ってことは、ここにお風呂が？」

「当たり前だ。……まさかっ、お前ずっと風呂入って——」

バシっ

類の右頬にビンタが命中した。

「そんなわけないでしょっ。ったく、夜こっそり銭湯に行ってたわよ」

「人の爆睡を利用して夜に外出するとは……」

「賢いでしょ？」

「いや、その上に『ずる』が付くな」

バシッ

今度は左頬に……恐らく言わなくてもわかるだろう。

「とりあえず安心した～。もうわざわざ銭湯に行かなくてよくなるし。……お風呂ってことは、トイレは？」

「あるぞ。風呂んとこに」

類がそういうと、急いで廊下を走った。
雪が左側のドアを開けようとしたとき、

「風呂場は奥のほうだ」

と言われたので、ドアノブから手を離して、奥のドアノブの方へ手を伸ばした。
そこには、ピカピカの白いタイルの壁床に、清潔感漂うトイレとシャワーに浴槽があった。

「良かったー。だって地下のトイレって汚いんだもん」

「ああ。ここは澪が管理してるからな」

「さすがっ！すごいなぁ澪さんは」

「ところで……」

「ん？　なに？」

「お前さ、その制服洗わないの？」

「失礼ねっ。ちゃんと銭湯のついで、洗濯してますよっ」

こいつこの制服何着持ってんだ？

「ちなみさ、それは何日ペースで？」

「な、何よ突然……。まぁいいけど、だいたい2日に1回ぐらいかな」

なるほど、だいたい2着持っていて、それを着回してるのか。それにしても、とことん哀れだな。澪が戻ってきたら、澪にこいつの服を買ってこさせるか。じゃないと、さすがにこのスタイルは飽きる。

と、一人で勝手に考える。

「じゃ、私、お風呂入るから、ほらっ」

「何？」

「だから……」

「だから何？」

雪は改めてこの類という男を鈍感だと悟った。

つまりは、雪は今からお風呂に入りたいので、男性の類はとっと出ていけ、と合図しているのであるが、まったくその意味を理解できていない。

「じゃあ何？一緒に入りたいの？別にいいけどっ」

笑みを浮かべ、類を睨みつけて、わざとらしい冗談を言う。

「ああ。じゃあ入るかっ」

「ええっ！」

予想外の発言に、危うく転びそうになった。

「はぁ〜、お前はバカだな。まず1に、今の台詞で、男は普通に『入る』っていうだろうがっ」

やっぱこの人変態だわ

「第2に、俺は変態じゃない。これは一般的男性論だ」

ううっ……

「第3に、俺はこの家にいるときは、お前にレイノを託してる。だから、考えてることはお見通しだ」

……

いつの間にか、冗談を仕掛けたつもりが、類の冗談の術中にはまってしまっていた。

「第４に、お前と言えども、女と風呂を——」

ブシっ

さっきと違って、鈍い音が風呂場に響き渡る。
威力はそうとうなものだった。あの類が軽く吹き飛んだのだ。しかも顔面グーパンチなので、ダメージはさらに増す。

「俺、前々から思ってたんだけどさ、お前鍛えてんの？すごく痛いんだけど……」

「もう一度殴られたいの？」

怒るという口調ではない。『無』だった。その言葉には、何も感情が込められていなかった。逆にそれが怖い。

「じゃあ、邪魔しないでね。それと、レイノは私の身体から追い出してね」

バタンっ

超乱暴にドアを閉めた。

「……俺の服、中にあるんですけど……」

ＥＰ２－ＣＰ２２　お風呂（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

ＥＰ２－ＣＰ２３　お風呂＋（前書き）

更新遅くなってすいませんｍ（＿＿）ｍ

EP2－CP23　お風呂＋

ふ～ふふ～ふ♪

キッチンの奥の廊下の方から、シャワーの音と共に、下手なのか上手いのか、なんとも微妙な鼻歌が聞こえてくる。
それは類にとっては、不快でたまらなかった。なので、テレビをつけ、その大きい音量でごまかす。
しばらくして、シャワーの音が止んだ。だが、鼻歌はまだ止む気配はない。

「ううっ。苦痛だ」

頭を抱えている類の側に、光(ひかる)がいつの間にか腰を下ろしていた。

「い、いつの間に……」

「……」

しばらく光の顔を見たあとに、類はまた頭を抱えた。

「眠れん……」

「え？」

ボソっと言ったためか、類にははっきりとは聞こえなかったらしい。

「……」

「あのー……なんなんですか？　聞こえないんだけど」
鼻歌のせいで不機嫌になった顔を上げ、軽く怒鳴った。
「うるさい……歌が」
そんなことまったく気にせず、またさっきと同じようにボソっと呟いた。
「はー、そんなこと――」

ギャヤアァァァーーーー

どこか鈍った叫び声が風呂場から響き渡ってきた。もちろん、その声の主が雪ということは言うまでもない。

「どうしたー？」

のんびりと風呂場に到着した類が、ドアを開けながら、まったく心配などしていませんよ的な声で問う。
さすがの類も一瞬硬直した。それには２つの理由があった。
まず一つは、急いで隠したであろう、きれいに巻かれていないバスタオルの下にある胸。
まさかとは思ったが……ない。まったくない。タオルの上からでも見て取れる。ここまでないと可愛そうに思えてしまう程だった。
まぁそれは、ほんの一瞬の話で……
問題は、浴槽で顔を赤くして、目を丸くする学（まなぶ）である。

「い、いや違うです。そういうつもりではなく、そもそも僕はそのようなことに興味はないというか……いや、そういう意味じゃないんですよ。そのー、なんというか、もう知ってるっていうか……」
「それってどういう意味？」
俯いて顔は見えないが、絶対に怒っているのは明らかだった。特に、『もう知ってる』という部分に激怒しているようだ。
「い、いや、もう知ってるというのは、生物学的にということであって、けしてそういうわけでは……」
そのまま俯いた状態で、バスタオルをしっかりと巻きなおし、学に向かってゆっくりと足を運ぶ。
その一歩一歩が重い。なにかわからない異様な圧が学に圧し掛かってくる。
「おい、一旦引くぞ。ここにいたら俺らまで巻き添えを食らう」
類が光の耳元で囁いた。
それはまじ、つまり本気だった。類は本気でこの場を立ち去ろうとしているのだ。
雪が学のいる浴槽の前で止まった。それと同時に、出来るだけ逃げようと、浴槽の端の端まで体が吸い寄せられていく。
そして、俯いていた顔を学のほうに、ギロッと変え、鬼のような形相で学を睨みつけると、指を鳴らし、右腕を後ろに引いた。と同時に、類たちは部屋から速やかに非難し、そっと、ドアを閉めた……

パリンッ

ガラスが砕け散る音と共に、学の悲鳴が風呂場に響いた。

EP2－CP23　お風呂＋（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます＾０＾
遅くなってすいませんでした。（しかも短くて；；）
けど、更新スピードの回復はまだだと思うので
3月ぐらいまでは不定期更新だと思いますが、これからも『類』を
よろしくお願いします。

EP2―CP24　人生のリュックサック

「はぁ～、この家には落ち着ける場所はないの？」

「まぁ、ないといえばないな」

あっさり答えられてしまった。

まぁ、あれからなんやかんやありまして、雪の発想力を鍛える訓練も、彼女自身が引き起こした暴力事件のせいで、再び後回しになってしまった。

幽霊にこういう言葉を使うのはなんだが、とりあえず学（まなぶ）は重傷を負い、類が強制的にどこかへ返還させた。

一般的に、幽霊に重傷を負わせることはできるのか……という疑問が浮上するのだが、厳密に言えば学は幽霊というレベルではない。類いわく、霊には5段階の過程的なものがあるらしく、死後30分以内であれば、霊体……つまり魂はまだ肉体に宿っている。その後、第2段階に入るのだが、約2週間はこの世をさまよえるらしい。そして、魂は問題の第3段階へと進む。

問題というのは、第3段階から、魂が悪霊化するか、そのまま霊界に逝くのかということに分かれるからである。

その第3段階というのは、第2段階の時に、どれだけの後悔、怒り、欲……つまり『念』を蓄（たくわ）えたかによって、その姿形を変形させる段階のこと。例え念が1つだとしても、その念があまりにも強かった場合、それは姿形を変貌させ、第4段階、『悪霊』になってしまうというわけである。

無論、念の弱い霊（もの）などは、そのまま霊界へと導かれ、最終的には『冥界』へ逝くことができる。

さて、悪霊と化した魂は最終的にどうなるかと言えば、『集合体』と呼ばれる、強力な悪霊へと進化するのである。

というわけで、長々しい説明となったが、学は今第3段階の変形

前なので、物理的ダメージを受けてしまうというわけである。とは言っても、怪我をするとか言うんじゃなく、なんと言うか、肉体的に魂がそういうことを記憶しているため、痛みは錯覚。まぁ、あまりにも強い衝撃だと、精神的ダメージで気絶するかもしれないが。

「だいたい、幽霊だったらもうちょっと変な姿でもいいと思うけど、何あれっ。完璧誰がどう見ても人間よねっ。普通の人に見られるのと、なんら変わんないじゃないっ」

不機嫌な顔で文句を吐きながら、キッチンの冷蔵庫から昭和の香り漂う（ただよ）、瓶のコーヒー牛乳を発見し、それを取り出した。なぜか、ふたが開いていたが、中身は満タンのようだったので、誰も飲んでいないということを推定し、口に近づけた。

するると、類がコーヒー牛乳の方を指差して、

「あ、それ俺が口つけた――」

「うぅっ、……えっ！」

「――っと思うだろ？」

「ふ〜」

また類の得意の冗談だと思い、雪は額の汗を拭って、安心のため息をついた。

「本当につけちゃったんだな〜これが」

「ブブゥウゥウッ」

思わずコーヒー牛乳を噴出した。

「いやな、飲めるかなぁっと思って軽く1滴程度飲んだんだ」

「ち、ちょ、ちょっと！それを早く言ってよ！」

「なーんてなっ」

類が不快な笑みを浮かべた。

「ったく、また冗談？」

雪はそう言って、またコーヒー牛乳を飲み始めた。

「あ、そうそう。それ、マジで飲めないから。腹壊すぞー」

「うっ、ブブゥゥウゥッ」

またもや、噴出した。

「そ、それこそ先に……」

グュルルルルゥ

「うっ……」

腹部に異変を感じた雪は、類を一回睨みつけて一直線にトイレに向かった。

「まったく、忙しい奴だな」
そう言いながらニヤリと笑みを浮かべた。

‡―†―†―‡

東京の街のほぼ中央に位置する、商店区、通勤区、通学区の丁度境目の山（？）の頂上に、警察署があった。
その警察署の屋上で、勇と竜が缶コーヒー片手に休憩していた。
ふたりともパッとしない顔だったが、特に勇はうわの空だった。
「最近見ないですねー。類の奴」
「……ああ」
勇は手すりに肘をのせ、右手で缶コーヒーを外に持ってただ遠くを見つめていた。
勇の脳裏には、数日前に竜に言われた言葉が浮かんでいた。
それは、茜と話したあとのことだ。
「どうして俺と裕輝（ゆうき）だけが知らないことを、みんな知ってるんだよ！」
「……」

「答えろよ！」

「ごめん……先輩。やっぱ俺、隠してた。先輩には、まだ知ってほしくない」

似合わぬ真面目な弱い口調で言う。

「だから……だから何を知ってほしくないんだっ！」

鉄製の階段が勇の怒鳴り声を反射し、より竜の耳に響いた。
そして、短い沈黙のあと、竜がうな垂れてぼそっと勇に聞こえるように言った。

「先輩には……まだ言いたくない。……・・・もう少し、時間をくれ……」

竜はそのまま黙って階段を駆け下りて行った。勇は引き止めようと声を掛けようとしたが、なぜか喉の奥が詰まったような感覚になり、結局、左手だけがそういう風になっただけだった。

時間をくれ……っか。

「先輩？」

「！」

勇は竜に肩を叩かれて、現実に引き戻された。

「大丈夫ですか？」

「ん？　あ、ああ……」

「なんか最近元気ないですね」

そう言いながら、勇の隣に腕組みをしたのを手すりの上にのせ、勇と同じほうを眺めた。

「なぁ、時間って——」

「先輩」

それはわざと勇の話を拒むようだった。

「人生って、疲れますよね～。何かを持ってると。それをいっそのこと捨て去って、楽に生きたいですよね～」

「……」

空は徐々に怪しくなってきた。太陽が黒く塗りつぶされ、二人に影が重なる。

「でも……人間って不思議で、それができないんですよね。……リュックサックの中には、いらないものだけじゃない。必要なものもある。だから、それを捨てるってことは、すべてを捨てることになる。それはもっと苦しい。でも、リュックを開けて、いらないものだけ捨てればいい。だけど、人間はそれができない。何でなんでしょうねっ。ホントっ、不思議な生き物ですねー」

小雨が降りだしてきた。時期に大雨になりそうな雰囲気である。

「……おまえ――」

「さっ、中に入りましょう。風邪引きますよ」

そう笑って、ドアの方に向かっていった。

気のせいかもしれないが、その目からは涙が流れていたようだった。雨がそういう風に見せたのかもしれないが、どこか引っかかる笑みだった。

勇は空を仰いで、竜の後(あと)からドアへと向かった。

ＥＰ２－ＣＰ２４　人生のリュックサック（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

EP2ーCP25　潜在能力（ハイド）

「あ、あんたね……さっきのは、冗談では済まないわよ……」

雪が疲れ切った様子で、お腹を抱えて類の前に立ちはだかる。この状態から見てかなり苦戦したと見える。

「済んだじゃないか」

真顔で言われたのが腹が立つ。

だが今はとても怒鳴るなどという体力は持ち合わせていない。

雪はその状態で、光（ひかる）の隣に腰を下ろし、誰が消したかわからないテレビを再度つけた。

テレビの音が部屋に流れると同時に、光がハッとなったように動じた。それを見た二人は確信した。こいつは寝ていた、っと。

髪が前に垂れていたということもあり、（そもそも存在が薄いからかもしれない）顔が見えなかったので、気づかなかったのである。

寝てるいるのか、起きているのかわからない、どこでも眠れそうなタイプの彼はさて置き、雪がテレビの方に耳を傾けると、こんなニュースが入ってきた。

「今朝、東京都通勤区のビルの屋上で、神原俊二（かみはらしゅんじ）さん、25歳が首を刺され、死亡しているのを発見しました。死因は傷口から、凶器は槍のようなもので刺されてのショック死と見られています」

まぁ、それだけでも相当の事件なのだが、さらに雪を驚かせたのは、映し出されたのその『神原』の写真。それはあの若手社長だったのだ。

「ち、ちょっと類！これって……」

類がテレビの前にしゃがんで覗き込む。それを見た類の表情が険しくなった。

「また、『奴ら』の仕業か……」

「よしっ！」

すると雪が立ち上がって類を見下ろした。

「行くんでしょ？」

「あ、ああ……」

いつもは自分から連れ出すのに、雪のほうから言われると……なんか違和感を感じた。

まぁ、そんなことは気にせず、立ち上がってドアのほうへ向かった。

「って、お前はどうする？」

光（ひかる）はしばらくまったく硬直したあと、急に立ち上がってドアのほうへ足を運び出した。

類は軽く鼻で笑ったあと、家から出て、ドアを閉めた。

路地から出ようとすると、雪が例の『自殺相談所　霊の方はこちらからお入りください』という看板を見つめ、ぼーっと立っていた。

「前から気になってたんだけど……これって何？」

「ん？……あーこれか？これは看板」

「いや、そうじゃなくて、なんでこんな看板が？」

「じゃあお前は、普通のなんの変哲もない一般住宅にこんな看板が掛けてあるんですか？っと逆に問うぞ」

「意味わかんないんですけど……」

「はぁ～。看板があるってことは、ここが店、又は会社ということだろうがっ。ったく」

まぁ、薄々感づいてはいたが、本当に店だったとは。

しかも素晴らしいことに、その店と呼ばれる場所に滅多に客が来ないのが驚きである。まぁ、こんな路地にあっても、さらにこんな名前の店では誰も入りたくはないだろう。

「じ、じゃあこの、『霊の方はこちらからお入りください』って――」

「お前少しは推理をしろよ、推理を。俺は『ゴーストマネージャー』って言ってるよね？つまり、俺は霊も客の内なんだよ。わかる？お前そんなに頭使わなかったらマジで脳が腐るぞっ」

呆れてるのか、怒っているのかよくわからない口調で雪に説明するが、とりあえず類から見る雪の好感度が下がっているということは間違いないだろう。

「じゃ、つまりここは『家』じゃなく、『店』ってことね」

「あ゛〜やっとわかった？だったらほら、さっさと行け」

「ちょ、ちょっとー」

類は雪の背中を押して、無理やり路地の外へ追い出した。

‡―†―†―‡

「ねぇー、類が普通に街歩いてもいいの？」

「おまえさぁー。マジでイライラする」

「はぁ？」

「それ2回目だし、理由も言ったし、同じこと言いたくねぇーし」

「あれ？そうだっけ」

「知らん。自分で考えろっ」

通勤区のとあるビルの前の歩道を3人は歩いていた。

冬なのに、太陽がギラギラと輝いていて、今日は少し暑め。

車がよく通っているが、この先約200メートルのところは違った。警察が道路を封鎖していたからだ。恐らく、今朝のニュースの事件と関係があるに違いない。なぜなら、そのビルの道路を付近が封鎖されていたからである。こうなってくると、絶対的に類たちは事件を調べようにも調べられない。

「どうするの？類」

「まぁー見てな」

そういって、躊躇（ちゅうちょ）することなく、立入禁止範囲まで近づく。

「止まれ！」

やはり、警察に止められてしまう、が。

「ここは――」

『死』

類がそう呟いたとき、警察官は目を見開いて硬直し、涙を流した。

「行くぞ」

雪と光（ひかる）に声をかけ、黄色い立入禁止の線を潜り抜けた。

中に入ると突然、類と光が進路を変え、ビルの路地に向かって急ぐ様子で走り始めた。

「おい！さっさとこっちに来い！」

「な、何!?」

類が突っ立っている雪の元に駆け寄り、呆れた様子で手首を掴んで路地の方へ引っ張った。

「な、何よ！？」

「お前バカだろ！何堂々と事件現場で突っ立ってんの？俺らは非関係者だぞ。それなのによく、あそこでウロウロと」

「えっ、類がなんとかやってくれたんじゃ……」

「お前、俺がどこまですごい人間だと思ってんの？まぁ、実際そうなんだが……さすがにここにいる警察官全員をどうにかするのは無理だ。とりあえずだな、ここは潜在能力（ハイド）で身を隠すぞ」

そう言うと、光と雪を自分に近づけさせた。

「いいか、俺から1メートルでも離れるな。数ミリでもだめだ。離れれば潜在能力（ハイド）が消える」

「でも、私たちが空を飛んでいたときとかは、そんなに近づかなくてもできてたんじゃない？」

「人数が3人だし、それに、潜在能力（ハイド）はレイノが中心の霊力だから、そのレイノを操る俺の近くにいなきゃ、3人まとめて発動するのは難しいんだっ」

そして、レイノが類が身体からニョロっとでてきて、3人の周りを何回か回ると、銀白のオーラが3人を包んだ。

「よし、行くぞ」

３人は路地を出て、問題のビルへ慎重に足を運んだ。

ＥＰ２－ＣＰ２５　潜在能力（ハイド）　（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

ＥＰ２ーＣＰ２６　泡霊（前書き）

この話には、残酷な描写表現があります。
苦手な方は控えてください。

EP2－CP26　泡霊

　その現場のビルに向かう途中、雪が何かを発見した。それは、地面にくっついている黒い泡だった。

「ねぇ……あれって」

　類は振り向いて、人差し指を口にあてた。

「声は透明にならないんだよ。ばかっ」

　そう冷たく言い放って、雪の腕を引っ張った。

　途中で雪が類から1メートル近く離れようとして、危うくバレそうになるというアクシデントが起こったが、それ以外は問題なく、ビルの屋上にたどり着いた。

　類は屋上に着くなり、霊力で屋上にいたすべての人間を眠らせ、潜在能力（ハイド）を解除し、遺体に近づく。

　見るも無残な姿だった。ニュースでは死因は首を刺されてっと言っていたが、恐らく、首を刺す以前に腹部を小さな何かで刺した後がある。これでも十分死に至る。首は最後のとどめというぐらいのおまけっと言ったところだ。そのほかに足に2箇所、腕に3箇所の貫通した傷がある。しかし、どれも傷の大きさ不規則で、同じ凶器で指したようには見えない。それに首以外の傷は首の出血でわかりにくい上に、大きさが小さい。

「また、派手にやりやがるな」

「うっ」

雪はそれを見て、ひどい吐き気に襲われた。と同時に、それをいつもと変わらぬ顔で見る類に少し軽蔑を覚える。

「お前はどう思う？これを見て」

突然そこに現れたように、後ろにいた光(ひかる)に類が問いた。

「……」

雪にはわからなかったが、類には少し動揺しているのを感じた。なるほどな……

一瞬の思考のあと、類は納得した顔で笑みを浮かべた。

「……また、正義(キラー)の暗殺者？」

吐き気をやっとの思いで我慢した雪が、口を抑えながら聞く。

「恐らくな」

少し声のトーンが高かった。

「ねぇ、類」

「ん？」

「あれって何？」

「はぁ？」

「あれっ！」

雪がビルの下の地面に向かって指を指す。類がそこ見ると、黒い泡が地面からぷつぷつを沸いている。

「泡霊（ほうれい）」

「ほうれい？」

「成仏が中途半端の霊に見られる霊気の塊だ」

「……聞いた私がバカだった」

そういう専門的なことを言われても雪とっては理解不能だった。

(あれがあるってことは……もう間違いないな)

ポーン

類たちに聞きなれた銃声が街に響いた。

「どうも」

類よりも気が抜けた声で、相変わらず全身黒い服装の黒（コク）が隣のビルに姿を現した。

「あ、あんたは……誰？」
事実、雪は黒を知らない。まぁ、変な武器を持っているのはだいたい霊力者（サイキック）ということはわかるが。
「雪は下がってろ」
「まさか！　こいつが正義の暗殺者（キラー）!?」
「ああ。だがまぁ、ザコだがな」
「言ってくれるね。あのときは、よくもやってくれ――」
「あんたがやったのね！」
雪が黒の話を折る。
「え？　何の話ですかー？　俺は、別に仕事しにきたわけで、そのグロい死体のことなんて知りませんが」
「え？」
「まぁ、そいつが霊力者（サイキック）だったら、俺の仕事が一つ減ったわけで、大助かりだけど」
雪に怒りが込み上げてきた。何か文句を言おうとしたその時！
「こっちはお前が消えてくれたほうが、大助かりだけど、な！」
『な』の部部で、銀白のオーラを纏った右手で顔面に向かって殴

った。
それを半透明の銃で防ぐが、衝撃が強すぎて、吹き飛ばされてしまった。
「人が俺らに気づかないってことは、『霊の陣』を張ったのか」
「そう。親切だろ？」
そう言いながら類に銃口を向ける。
「お前の銃で人を殺せないことぐらい、知ってるぞ」
「……」
「プラスティック如き(ごと)の強度で、しかも銃弾までもがプラスティック。さらに言えば、お前は一人で……！」
台詞の最後の部分で黒がニヤリと笑みを浮かべる。
類は何かに気づいたようすで後ろを振り向く。
「残念だったな」

カチッ

銃には弾が込められてなかった。つまり、またしても偽者(フェイク)。
違うビルの屋上から、赤く長いポニーテール姿の明(あかり)が手を上に挙げ、その先に電気球を蓄えていた。それを確認した黒は、その場から身を退いた。

「おいおい、あれはまずいだろ」

類がそう言うのも訳ない。電気という殺人的物質をさらに超高密度に密集させ、それをこっちに向けて放出しようとしているのである。無論、そんなものを受ければ、類でさせ一撃である。

「雪っ、光っ、にげろ！」

「遅ーんだよっ！」

女らしからぬ発言のあと、類たちのいるビルの屋上に手を翳した。

「死ね！」

ボッフーンッ

突然、明のところが爆破した。爆発のあと、バチリと電気がビルを駆け巡る。

「……てめぇ」

「フフッ……」

爆風で吹っ飛んだ明をバカにしたように、綺麗な黒い瞳が見下ろす。

「あ！澪さんっ」

雪が安心と嬉しさの感情がこもった笑みを浮かべる。
作戦の失敗を受けて、黒が明の元へ現れた。
「おい、ここは退くぞ」
「ざけんな！　せっかく――」
「はぁ～、少しは学習してくださいよ、明様。あんたの霊力は時間が掛かりすぎる。かと言って、俺はあいつらを殺せない」
「……ちっ」
明が悔しいそうな顔したあと、二人は一瞬にして消えてしまった。

ＥＰ２－ＣＰ２６　泡霊（後書き）

読んでいただきありがとうございます＾－＾
誤字脱字や気になる点などがあればご指摘ください。
次話もよろしくおねがいします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6675f/

類

2010年10月10日10時33分発行